秋田県文化財調査報告書第80集

藤木遺跡，内村遺跡，桐木田遺跡，杉沢台遺跡，竹生遺跡発掘調査概報

1981・3

秋田県教育委員会

序

昭和55年度国営及び県営の農地造成事業に係る遺跡は５ヵ所あり，その調査を国庫補助を得て発掘調査を実施いたしました。その５遺跡の報告を一冊にまとめたのが本報告書であります。

能代市杉沢台遺跡では現在のところ，縄文時代の竪穴住居跡としては日本で一番大きいものが発見されましたし，内村遺跡からは縄文時代中期末の集落跡，竹生遺跡，藤木遺跡からは平安時代の竪穴住居跡，掘立柱建物跡などが発見されました。また桐木田遺跡からは中世末と思われる堀をもつ屋敷跡が発見され，各地で多大の成果を得て終了いたしました。

発掘調査は文化財を保護する側と開発側との協力と相互理解のもとにおこなわれるもので，その調査がスムーズに無事終了し，報告書としてまとめることができたのは関係者のご協力の賜と存じます。

最後に発掘調査から整理までご協力いただいた関係各位に対して心から感謝の意を表します。

昭和56年３月

秋田県教育委員会

教育長　畠　山　芳　郎

目　　次

Ⅰ．藤木遺跡

第１章　はじめに…… 1

第２章　遺跡の立地と環境…… 3

第３章　発掘調査の概要…… 5

第４章　調査の記録…… 8

第５章　まとめ…… 12

Ⅱ．内村遺跡

第１章　はじめに…… 23

第２章　遺跡の立地と環境…… 25

第３章　発掘調査の概要…… 27

第４章　調査の記録…… 32

第５章　まとめ…… 45

Ⅲ．桐木田遺跡

第１章　はじめに…… 65

第２章　遺跡の立地と環境…… 67

第３章　発掘調査の概要…… 69

第４章　調査の記録…… 72

第５章　まとめ…… 77

Ⅳ．杉沢台遺跡

第１章　はじめに…… 92

第２章　遺跡の立地…… 93

第３章　発掘調査の概要…… 93

第４章　調査の記録…… 101

第５章　まとめ…… 102

Ⅴ．竹生遺跡

第１章　はじめに…… 139

第２章　遺跡の立地と環境…… 139

第３章　調査の記録…… 139

第４章　まとめ…… 141

例　　言

1．本調査報告書は昭和55年度，秋田県教育委員会が主体となって国庫補助を得て緊急発掘調査を実施した遺跡の調査概報である。

2．本調査概報作成には下記のものが担当し，まとめたものである。

藤木遺跡，内村遺跡，桐木田遺跡

調査員　畠山憲司

補佐員　佐藤和弘

補助員　桑原　隆，三嶋隆儀

杉沢台遺跡，竹生遺跡

調査員　永瀬福男，熊谷太郎

補佐員　大高博康

補助員　佐々木金正

3．本調査概報の全体編集は秋田県教育庁文化課があたった。

4．本調査概報とは別に各遺跡ごとの本報告書が年度内に作成する。それとあわせて活用されたい。ただし桐木田遺跡は継続調査があり，本報は昭和56年度作成。

Ⅰ．藤木遺跡

第1章　はじめに

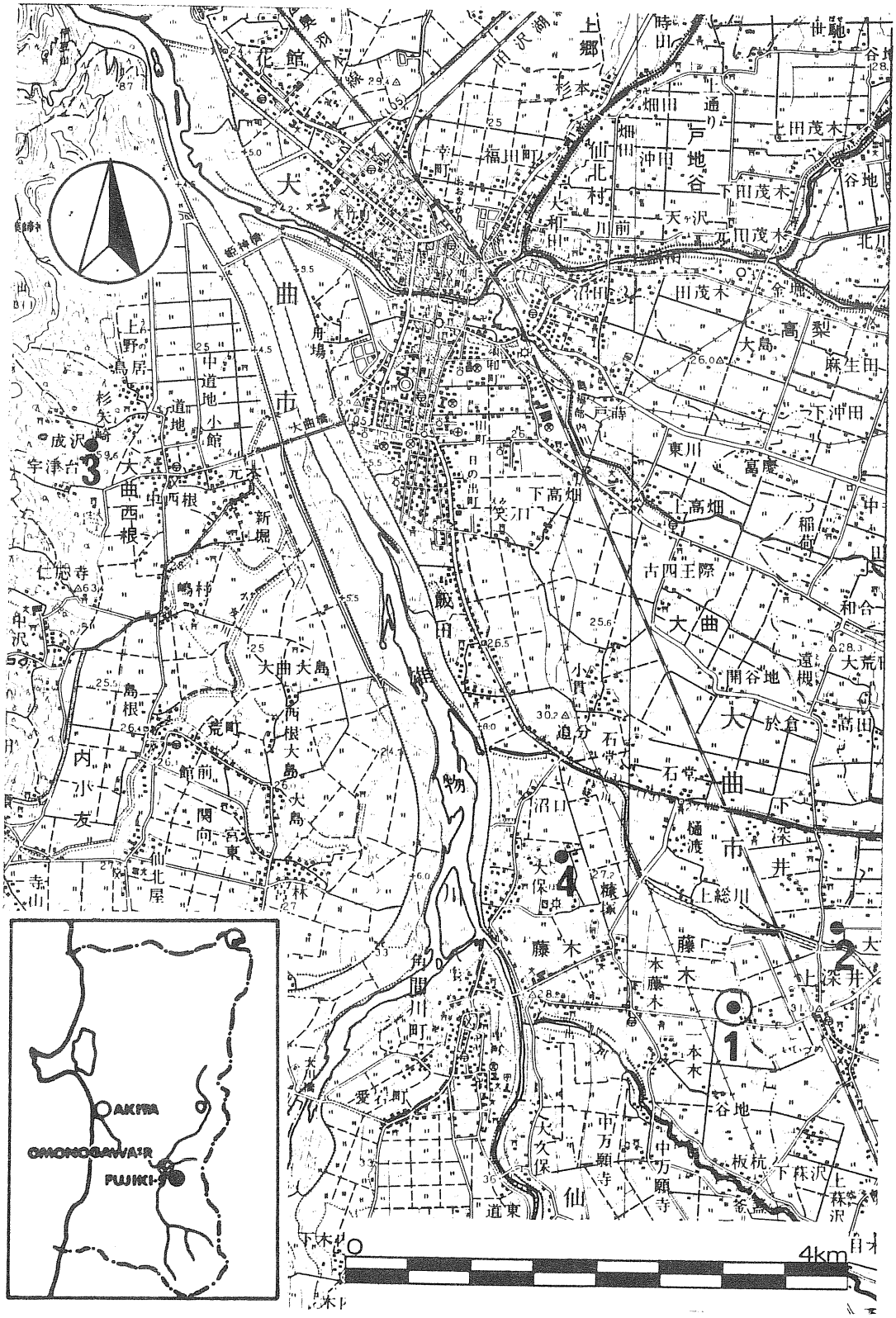
第1節　発掘調査に至るまで

大曲市に所在する藤木遺跡は，昭和37年の秋田県埋蔵文化財分布調査の際に登録された，いわゆる周知の遺跡である。この地域が昭和55年度より実施される県営ほ場整備事業地域内にはいるため，秋田県教育委員会が，昭和54年10月22日～24日，遺跡の性格及び範囲を確認する調査を行った。その結果，平安時代に属する土師器，須恵器等が多数発見された。

このため秋田県教育委員会は，工事に先立ち発掘調査を実施し，記録保存をはかり，今後の資料に資するものとした。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	藤木遺跡
遺跡所在地	秋田県大曲市藤木字一本柳谷地
調査期間	昭和55年6月30日～7月23日
調査対象面積	1,200㎡
調査面積	1,400㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	畠山憲司（秋田県教育庁文化課）
調査補佐員	佐藤和弘
調査補助員	桑原隆，三嶋隆儀
事務補助員	斉藤知子
調査協力機関	秋田県仙北平野土地改良課
	大曲市教育委員会


AKITA
OMONOGAWA
FUJIKI
4km

第２章　　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

藤木遺跡は横手盆地の東北部中央，六郷扇状地の西部末端水田中に位置する。六郷扇状地の扇央から扇端にかけては多くの湧水があり，縄文時代から中世にかけての遺跡が散見される。

遺跡の周辺は全くの平坦面で，古くは部分的に谷地化した湿地もあったようで，「谷地中」，「千間谷地」，「菅谷地」等の地名が残っている。遺跡の南西約１kmには六郷扇状地中央を通り西流する出川があり，西約2.3kmで雄物川に達する。

第２節　歴史的環境

藤木遺跡周辺は過去３回の耕地整理が行われ，いくつかの遺物が採集されている。これらの遺物に対してはいわゆる郷土史家などに若干の感心をいだかせていた。秋田県史編纂主任長井金風氏が，大正元年10月10日付で藤木村高階秀和氏にあてた「藤木村発掘物調査書」によれば本遺跡から出土した土器類は，①（現在の）土師器，須恵器である②墨書土器「伴」があり，大伴氏族の遺跡であろうか③糸切り底の土器がある④古墳と外堀が残っているのではないか，と述べている。

第３節　周辺遺跡

六郷扇状地及びその周囲には縄文時代から中世までの多くの遺跡が知られている。縄文時代では，東北2.2kmの石名館遺跡（晩期），東3.4kmの小出遺跡（中期）など。古代では，東6.5kmの六郷扇状地扇頂部に位置する上中村，石森などの古墳群の他，北北東７kmには払田柵跡，北西７kmに成沢窯跡群がある。また，北東１kmにはほぼ同様な立地で，墨書土器を多量に出土した藤木怒遺跡があり，本遺跡との関連が考えられる。中世の遺跡としては西2.5kmの四十二館跡等の中世館跡の他，東７kmの奥羽山脈西裾沿いに分布する板碑群，東北3.5kmの六郷町内にある板碑群がある。

第２図　遺跡の周辺とグリット配置図

第３章　　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

１．遺跡の層序

遺跡はかつての耕地整理等で大部分が破壊されており，わずかに残った1,200㎡ほどの畑地を主な調査対象とした。この畑地での堆積土の層序は以下の通りである。

第１層　黒褐色耕作土（15～20cm）

第２層　極暗褐色土（10～15cm）

第３層　黒色土（15～20cm），遺物包含層

第４層　褐灰～褐色土（10cm），漸移層

第５層　地山土，黄褐～褐色粘質土

これに対し，この畑地の南側水田中では第１層耕作土，第２層暗褐色土の下はすぐに地山灰黄色粘質土であった。

２．遺構の分布

今回の調査で検出された遺構は全てが畑地部分からのもので，掘立柱建物跡，井戸跡，土壙などである。掘立柱建物跡は調査区西側で，桁行方向を北西一南東にして縦に連なる形であり，井戸，土壙などはこれら建物群の東側に存在する。水田中からは遺構は全く検出されなかった。

３．遺物の出土状況

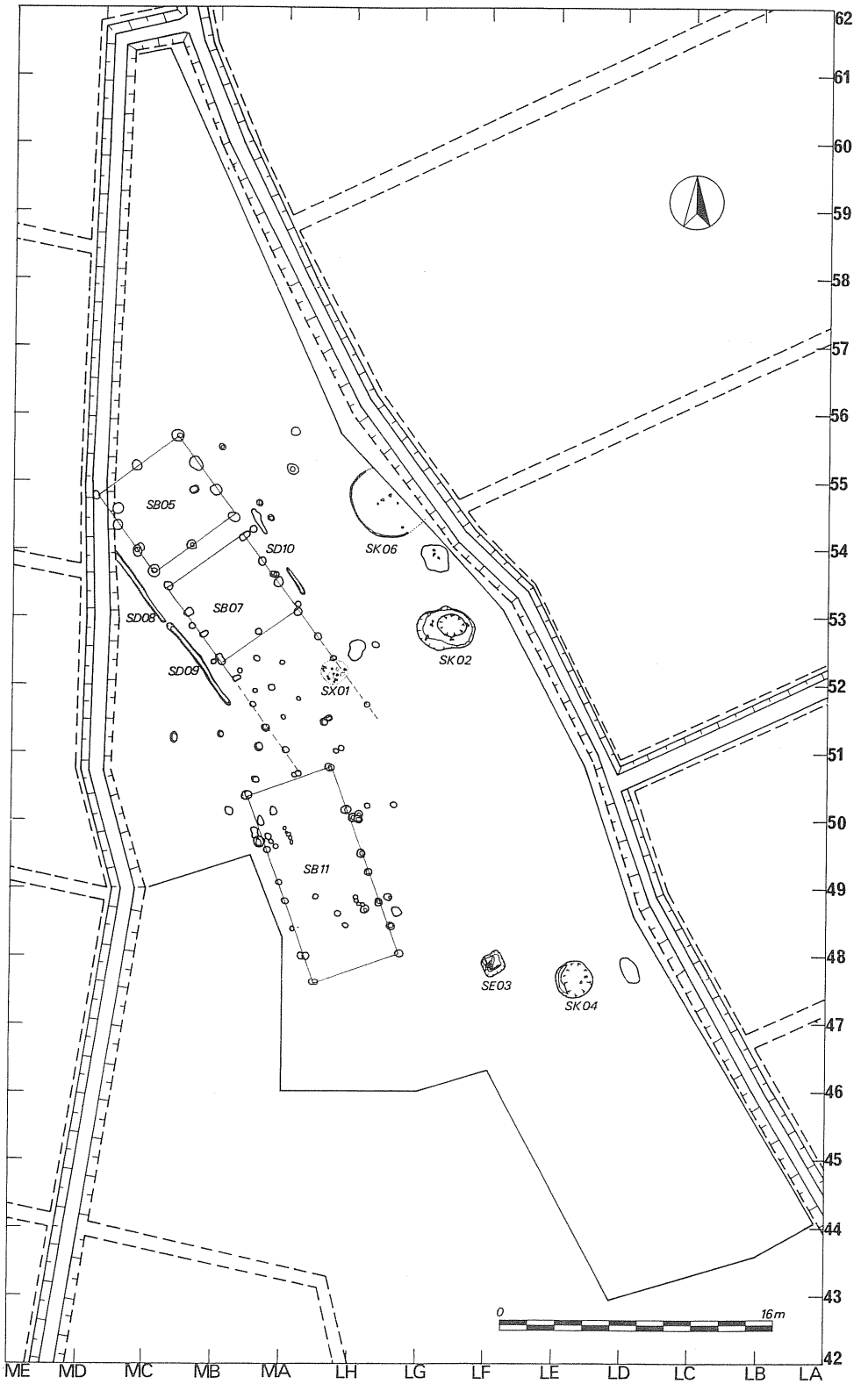
遺物の大部分は９世紀～10世紀の所産と考えられ須恵器，土師器でおおよその器形を推定し得るようなものは井戸，土壙から出土したものが多い。また，水田中からは数片を出土したのみであった。

第２節　調査の方法

発掘調査は４ｍ×４ｍのグリッド方式で実施した。調査区のほぼ中央に任意の基準点を設置し，ここから磁北方向での東西南北基線を求め４ｍ間隔での杭打ちを行った。東西にはアルファベット２文字の組み合わせ，南北には２桁の算用数字の組み合わせとし，各グリッドの名称は南東隅の交点のアルファベット，数字の組み合わせを用いた（ＭＡ50，ＬＥ46など）。

実測は原則として縮尺1/20とした。

遺構の名称は掘立柱建物跡＝ＳＢ，井戸＝ＳＥ，土壙＝ＳＫとし，これに発見順に通し番号を付した。ＳＫ01，ＳＫ02，ＳＥ03，ＳＫ05，ＳＢ05などのごとくである。


SB05
SD10
SK06
SB07
SD08
SK02
SD09
SX01
SB11
SE03
SK04
0
16m
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
ME
MD
MC
MB
MA
LH
LG
LF
LE
LD
LC
LB
LA

第3図　発見遺構全体図

第３節　調査経過

発掘調査は６月30日から７月23日まで実施した。

６月30日，現場作業の説明の後，早速表土剥ぎを開始。調査予定地は1,200㎡ほど残った畑地の部分にしぼり，土層の観察をしながら進めた。

７月２日，調査区中央部でＳＸ01を検出。焼土の中に土師器，須恵器片が散在している。同日，ＳＸ01の東でＳＫ02を検出。黒色土の落ち込みの中に火山灰と思われるサラサラした灰黄色土が円形に分布していた。９日，調査区南部で方１ｍの黒色土の落ち込みを検出，ボーリング探査して，井戸跡と判断した（ＳＥ03)。また同日，ＳＥ03の東側でＳＫ02に似た落ち込みを検出（ＳＫ04)。須恵器のやや大きめの破片が見られた。11日，調査区北東部でこれまでの土壙よりは大きいＳＫ06を検出。中央部に須恵器杯，壺などがバラバラに出土。この間，調査区の南西水田中を約200㎡ほど地山直上まで調査したが，遺物はほとんどなく，遺構も全く確認できなかった。

土壙，井戸跡の調査などと併行して，第３層遺物包含層，第４層を掘り下げ，地山土上面で柱穴を追った。柱穴はほぼ一定の方向に連っており，おおよそ３棟の掘立柱建物跡を確認した（ＳＢ05，07，11)。

３日に１日くらいの降雨に見舞れながら土壙，井戸，柱穴の精査，実測，写真撮影などを行ない，７月23日，全ての調査を終了し，24日，発掘機械の搬出，25日，プレハブの解体を行った。最後の日も雨であった。

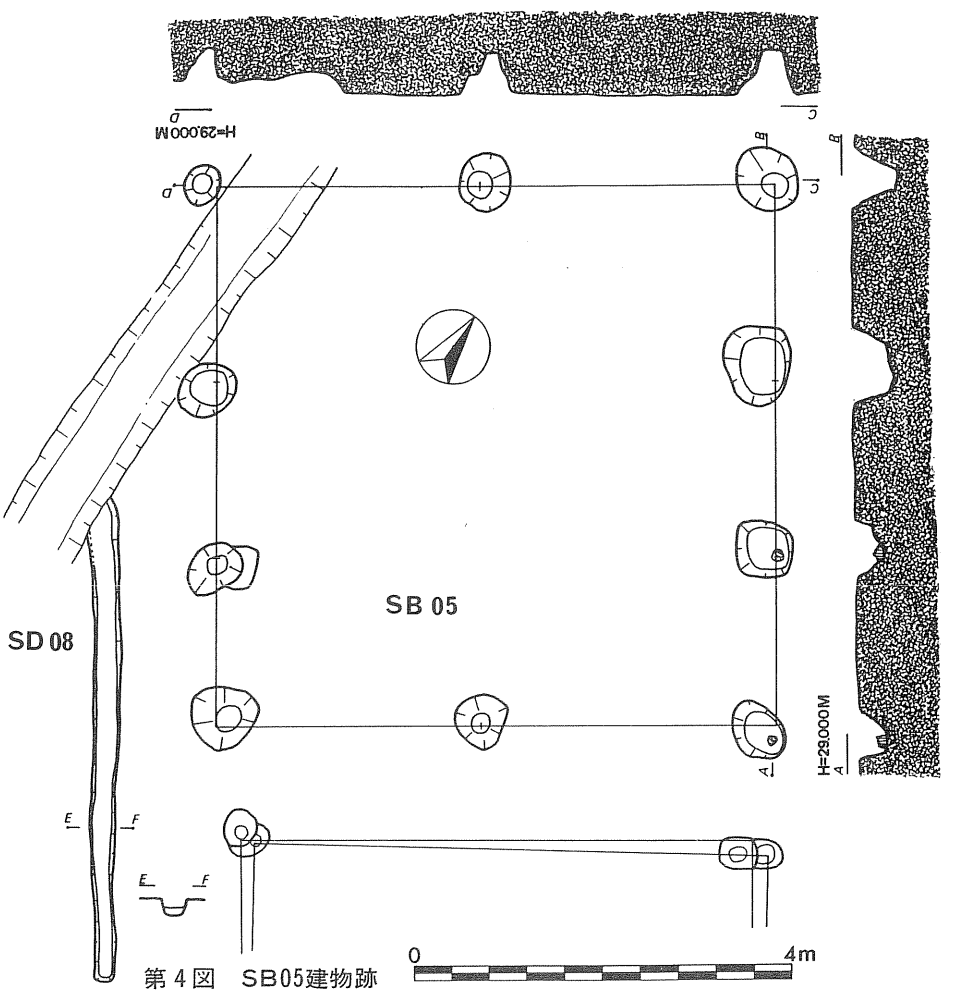
第4章　調査の記録

第1節　発見遺構と遺物

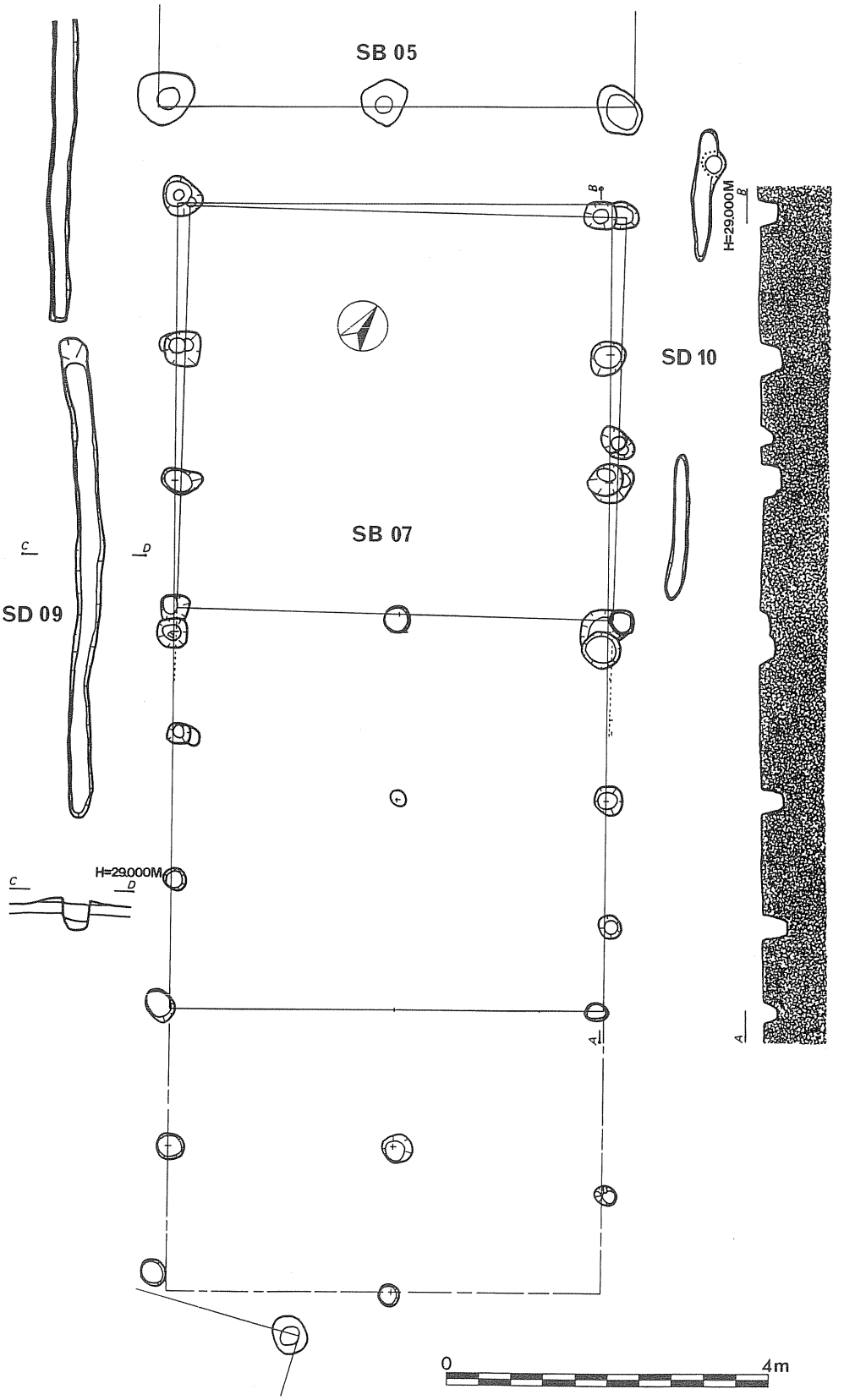
今回の藤木遺跡発掘調査で発見した遺構は掘立柱建物跡3棟，井戸跡1基，土壙2基，竪穴状遺構1基，溝状遺構4条である。柱掘方埋土中から平安時代中葉頃の土師器片などが出土している。ここではこのうち，掘立柱建物跡について報告する。

1．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はその桁行方向，並行する溝状遺構の存在などにより大きく2つに分かれる。



第4図　SB05建物跡



第5図　SB07建物跡

ＳＢ05，掘立柱建物跡（第４図，図版２）

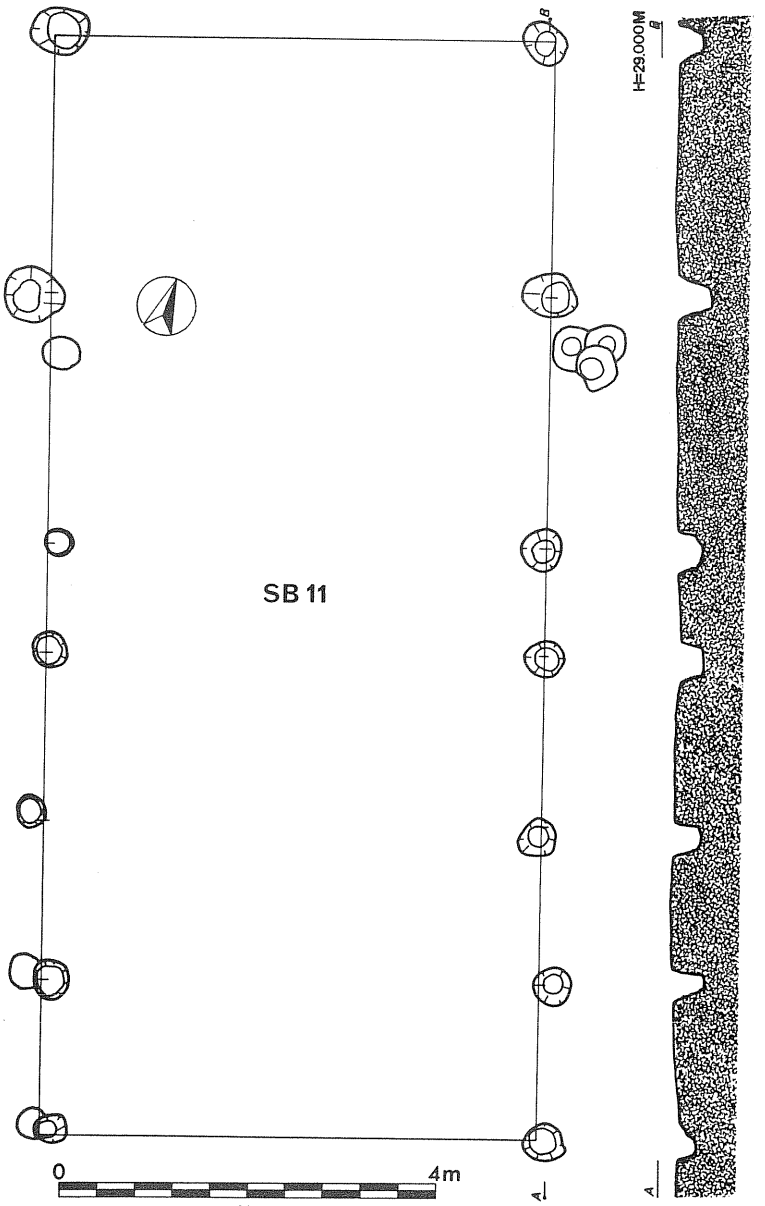
調査区北西部にある桁行３間×梁間２間の略方形の建物跡。桁行は総長574cmで南から178cm＋187cm＋209cm，１尺を31cm前後とする６尺等間である。梁間は総長591cmで東から311cm＋280cm，10尺＋９尺と思われる。柱掘方は確認面で径50cm～80cmの不整円形ないし略方形。深さは30～50cmで，底面に行くに従いせまくなる。柱根が２本残っていたが，径15cm前後で腐食によりやせていた。柱アタリ等からして径20cmくらいの丸柱に近いものであろう。桁行方向はＮ35.5°Ｗ。西側柱列の約１ｍ外側に桁行方向に並行する溝状遺構（ＳＤ08）がある。ＳＤ12とも合わせて本建物跡に関連するものであろう。

ＳＢ07，握立柱建物跡（第５図，図版２）

ＳＢ05の南に隣接して桁行方向をほぼ同じにする掘立柱建物跡。東西の桁行側柱列が対応するのは北部分３間のみで，それより南は判然としない。あるいは第５図よりも桁行の少ない建物が隣あっているのかもしれない。北部柱掘方に若干の切り合いがあり，桁行３間×梁間２間程度の建物が重複している可能性もある　桁行側柱列の西約１ｍと東約0.8ｍに方向を同じにする溝状遺構ＳＤ09とＳＤ11，12がある。建物と関連あるものであろう。桁行方向はＮ36°Ｗ。

ＳＢ11，掘立柱建物跡（第６図，図版３）

ＳＢ07の南に隣接するが桁行方向が異なる掘立柱建物跡。桁行６間11.70ｍ×梁間１間5.24ｍの長方形。柱掘方は径30～40cmの円形で深さは約30cm。径15cm前後の柱アタリのわかるものもある。桁行方向はＮ20.5°Ｗ。



第 6 図　SB11建物跡

第5章　ま　と　め

今回の藤木遺跡の発掘調査では約2,400㎡を調査した。その結果，掘立柱建物跡3棟，井戸1基，土壙2基，竪穴状遺構1基，焼土遺構1基の遺構と多数の遺物を発見した。これらの遺構と遺物について若干まとめてみたい。

1．遺構について

(1)　掘立柱建物跡　明確な掘立柱建物跡は3棟である。このうちＳＢ05とＳＢ07は桁行方向がＮ35.5°Ｗと，Ｎ36°Ｗでほとんど同方向であると考えてもよい。このことは2棟の掘立柱建物が同時に建てられたか，建物の方向に対する強い統一性が発揮された結果であると考えてよく，前者により妥当性があると思われる。2棟の建物の両側にあるＳＤ08，09，10のあり方からもうなずけるところである。

また，ＳＢ07とＳＢ11の建物の位置関係を見てみると，ＳＢ07が細長い建物であると仮定した場合，両者が同時存在することは考えられない。このことＳＢ11の桁行方向がＳＢ05，07とは異なることなどから，ＳＢ11と他の2棟の建物間には時期差があると考えられる。

3棟の建物は，たまたま畑地として残った部分で発見されたものである。未調査の水田部分（後世の耕地整理等で削平され，遺構として残ってはいないと思われる。）にもこれらの建物に連続するような建物が存在した可能性は十分に考えられるところである。

3棟の建物の時期は，柱掘方内から良好な建物が出土しなかったこともあり即断できないところもあるが，周辺から出土している遺物に等しい時期と考えられる。

(2)　井戸跡　井戸跡は1基のみであった。しかし，県内ではこれまでこの時期の例はあまりなく，その構築方法と合わせて興味あるところである。ＳＥ03では隅柱を用いず，厚さ約5㎝，幅20㎝，長さ90～100㎝の板を井桁状に組み合わせ，板の端を井壁の粘質土につき差して固定するという工法がとられている。

(3)　土壙など　2基の土壙の性格は判らない。径2.2～2.4ｍの円形のものと，長径3.5ｍ×短径2.6ｍの楕円形のものが発見されている。断面の形状は両者ともゆるい皿状を呈し，その底面近くには禾本科植物が炭化したと見られる層があった。また，埋土中には火山灰の堆積も見られた。何時頃降下したもので，どこから運ばれたものであろうか。

ＳＫ06竪穴状遺構と，ＳＸ01焼土遺構はともに竪穴住居跡とそのカマド（同一住居跡のものではない）とも考えられるが，どのようなものであったのだろうか。

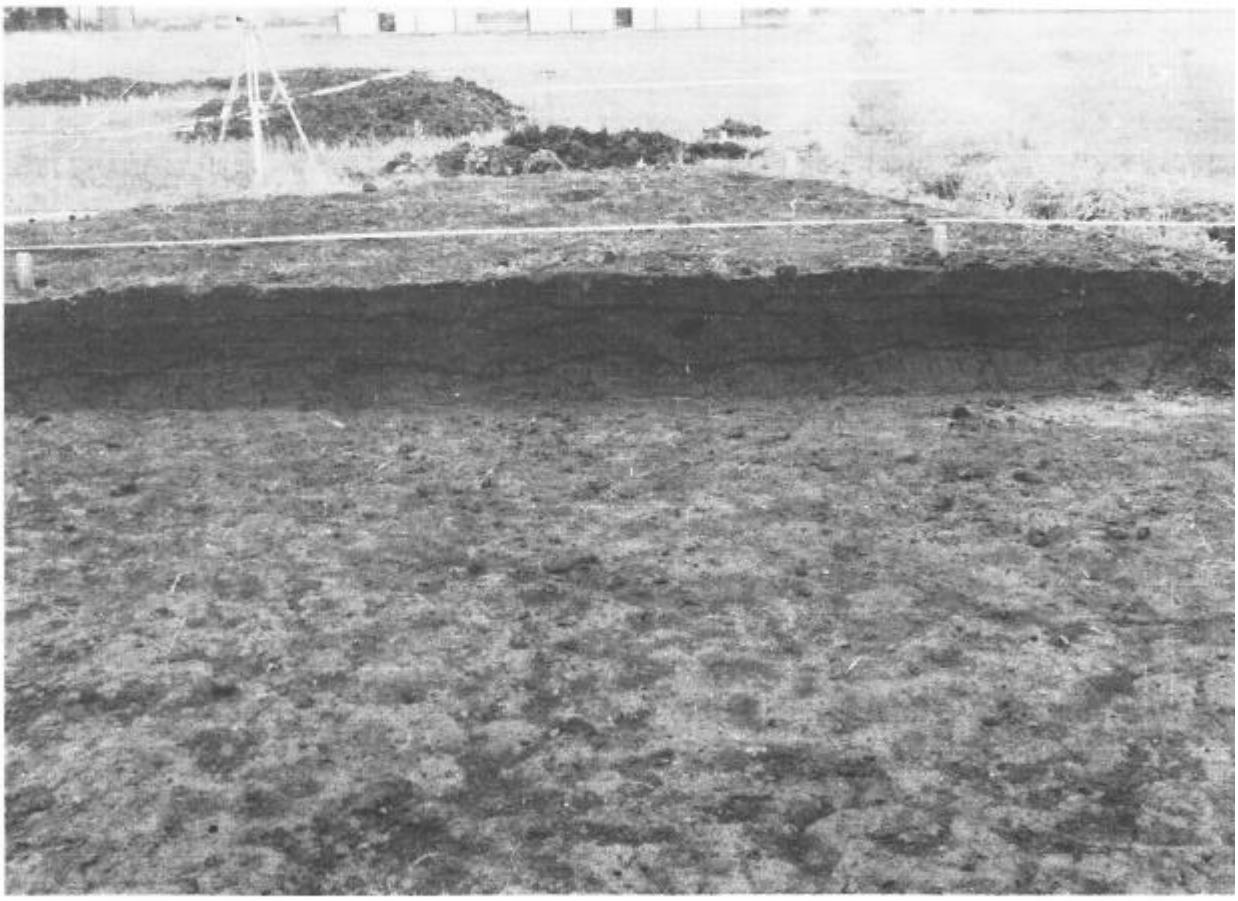
2．遺物について

須恵器と土師器が出土している。量的な比較では土師器が若干須恵器を上回る。

土師器では杯が圧倒的に多く，次に甕がある。この他に数量的には少ないが，口縁部が大きく外に折れ曲る皿や，内外面にタタキ目，アテ板痕，カキ目などのある鍋も出土している。また，県南の方ではあまり類例がなく，主に県北の館跡などから出土する底部に砂粒の付着したものもある。黒色処理された土師器はほとんどない。

須恵器では杯，蓋，壺，甕などが出土している。このうち杯では底部切離し技法に２種ある。底部の個数のみでこれを比較すると，回転ヘラ切離し25に対して，回転糸切離しは162である。

杯や高台付杯の底面などに墨書のあるものが約40点ある。このうちの約$\frac{2}{3}$は「伴」の墨書である。「伴」以外で明確にわかるものは「田」１点である。



図版 1　上　遺構群全景（南▶）

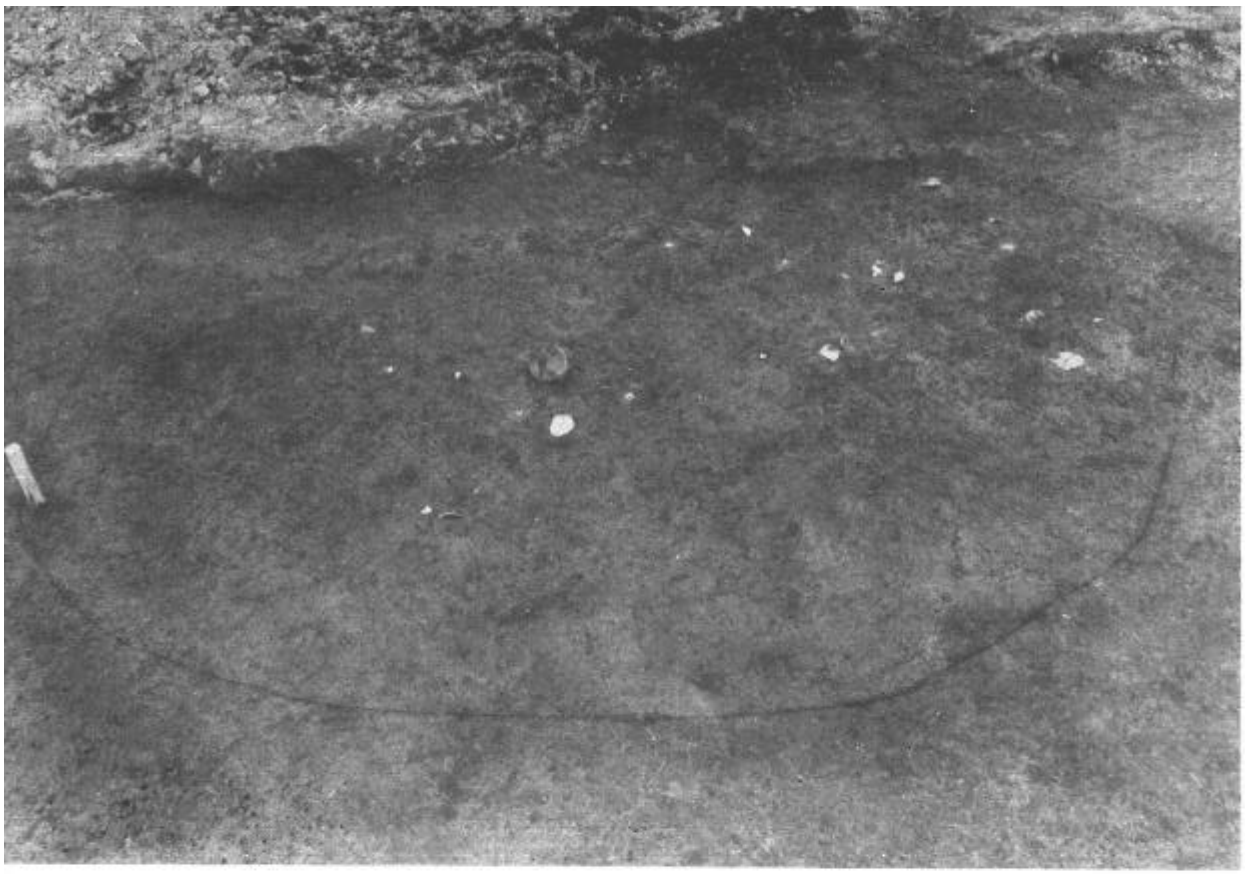
下　土層断面（北▶）

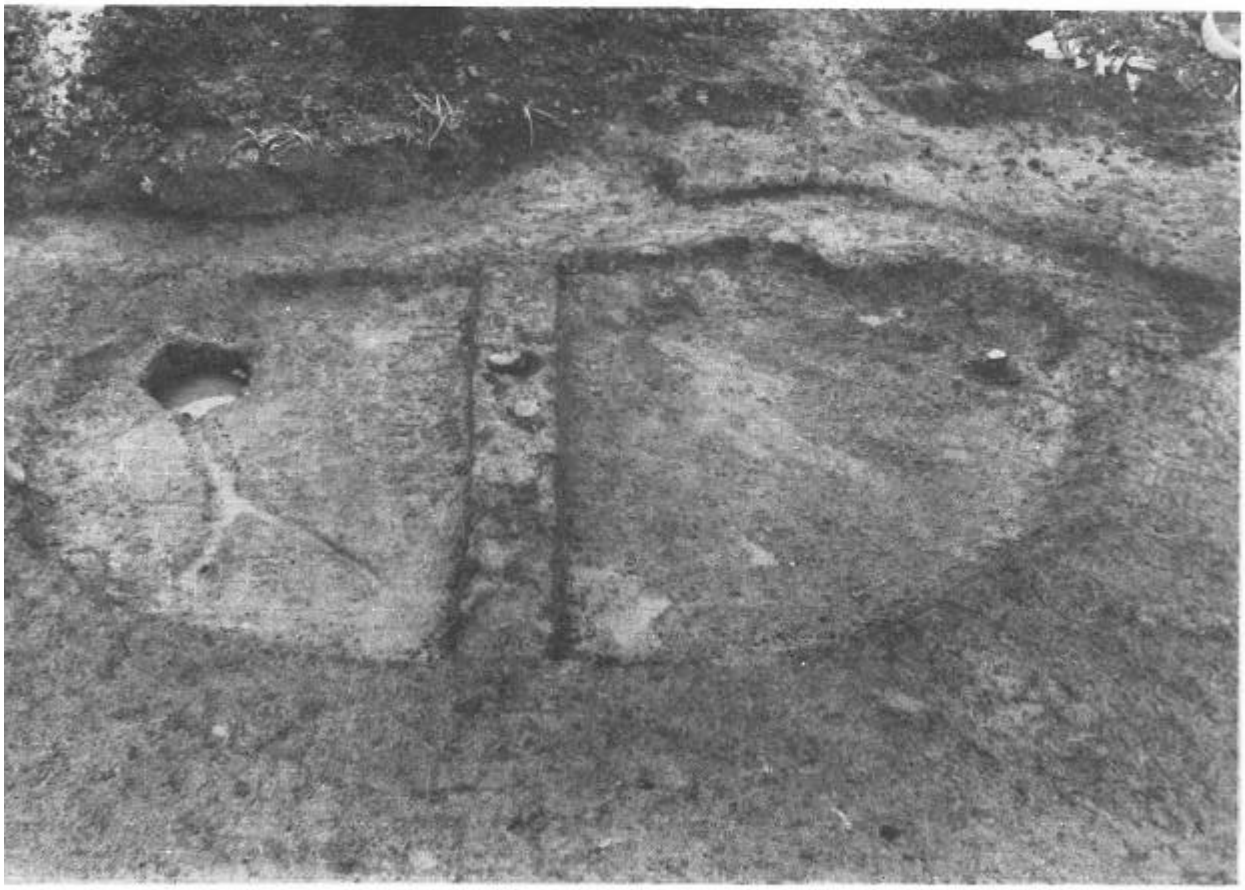
図版 2　上　SB 05 掘立柱建物跡（南東▶）

下　SB 07 掘立柱建物跡（南東▶）

図版 3　上　SE 03 井戸跡

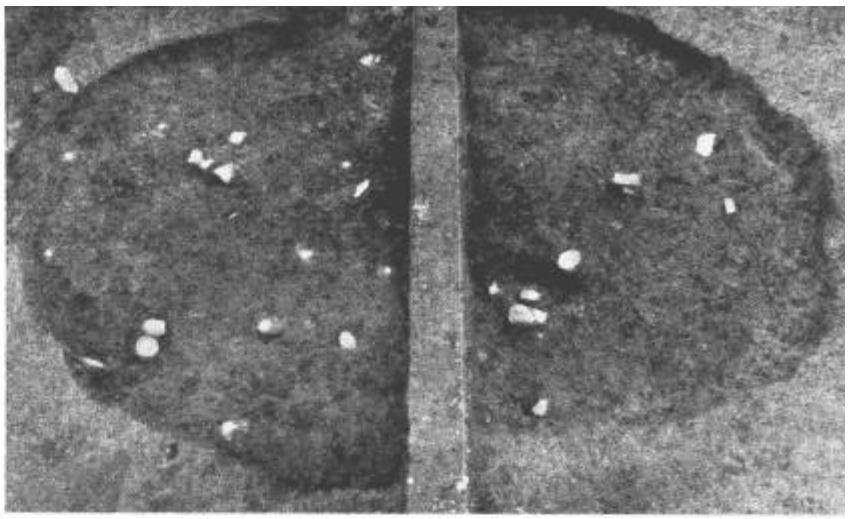
下　SB 11 掘立柱建物跡（南東▶）

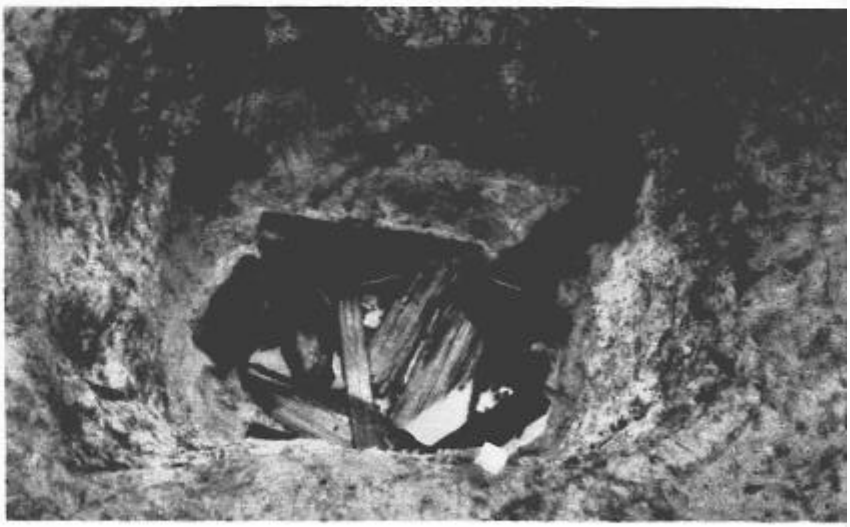




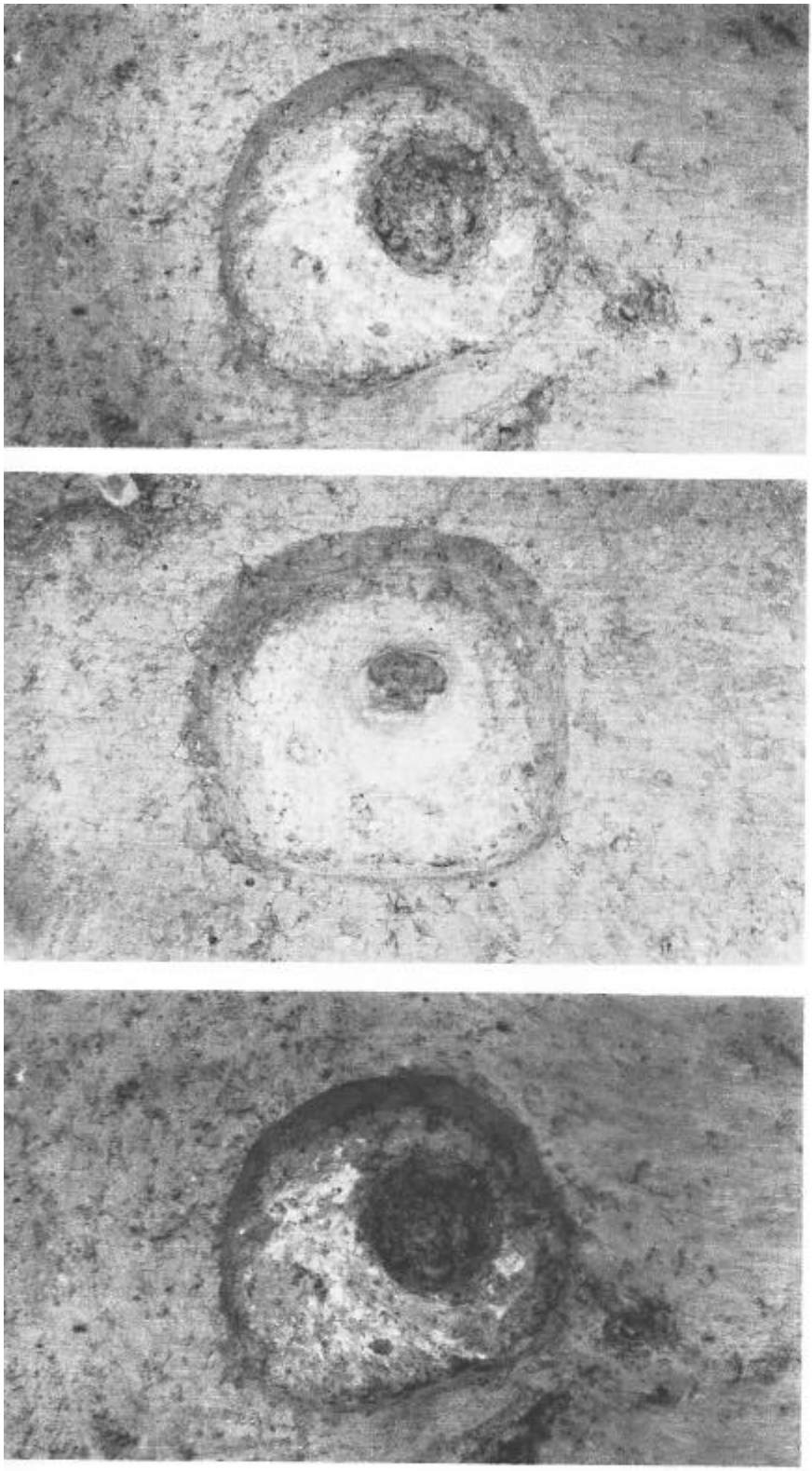
図版 4　上　SK 06 竪穴状遺構（西▶）

下　同上

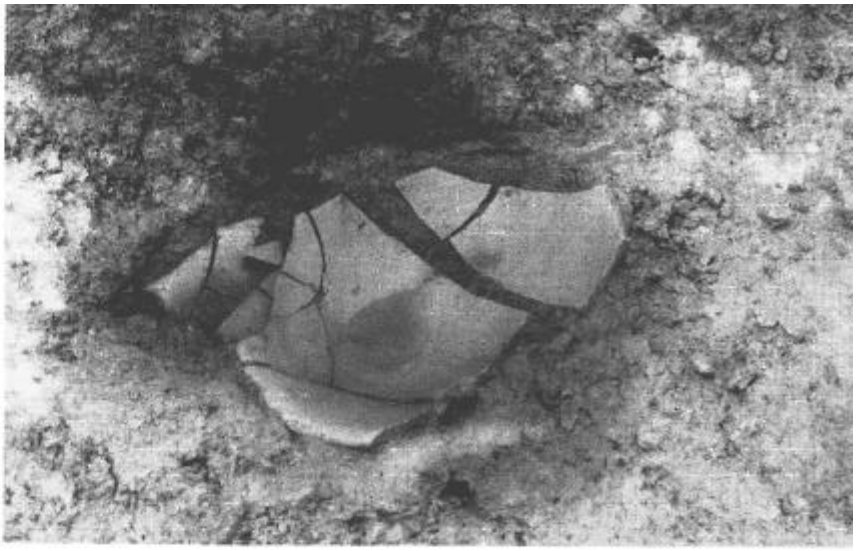


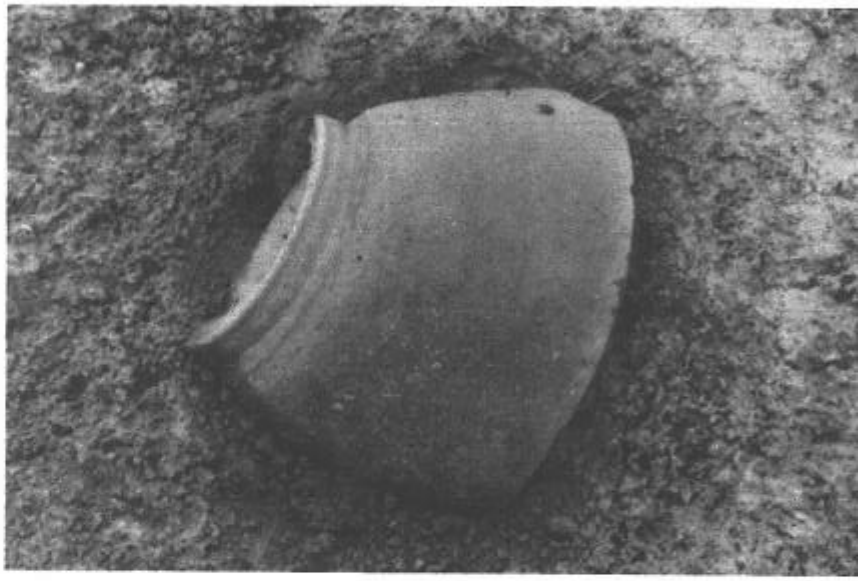


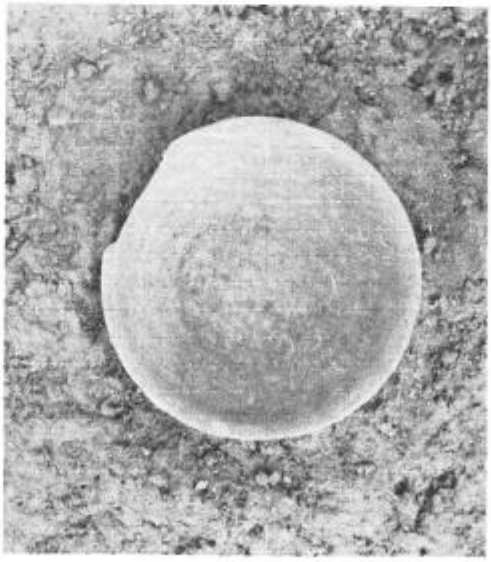
図版 5　上　SK 02 土壙
中　SE 03 井戸跡
下　SE 03 井戸跡



図版 6　柱穴完掘状況







図版 7　遺物出土状況

II. 内村遺跡

第1章　はじめに

第1節　発掘調査に至るまで

仙北郡千畑村に所在する内村遺跡は，昭和37年の秋田県埋蔵文化財分布調査の際に登録された，いわゆる周知の遺跡である。この地域が昭和54年度より実施される県営ほ場整備事業地域内にはいるため，秋田県教育委員会が主体となって，昭和53年10月９日～14日，遺跡の性格及び範囲を確認する調査を行った。その結果，破壊されている可能性が強いとされながらも，縄文時代中期後葉，及び平安時代後葉の多数の遺物を発見した。

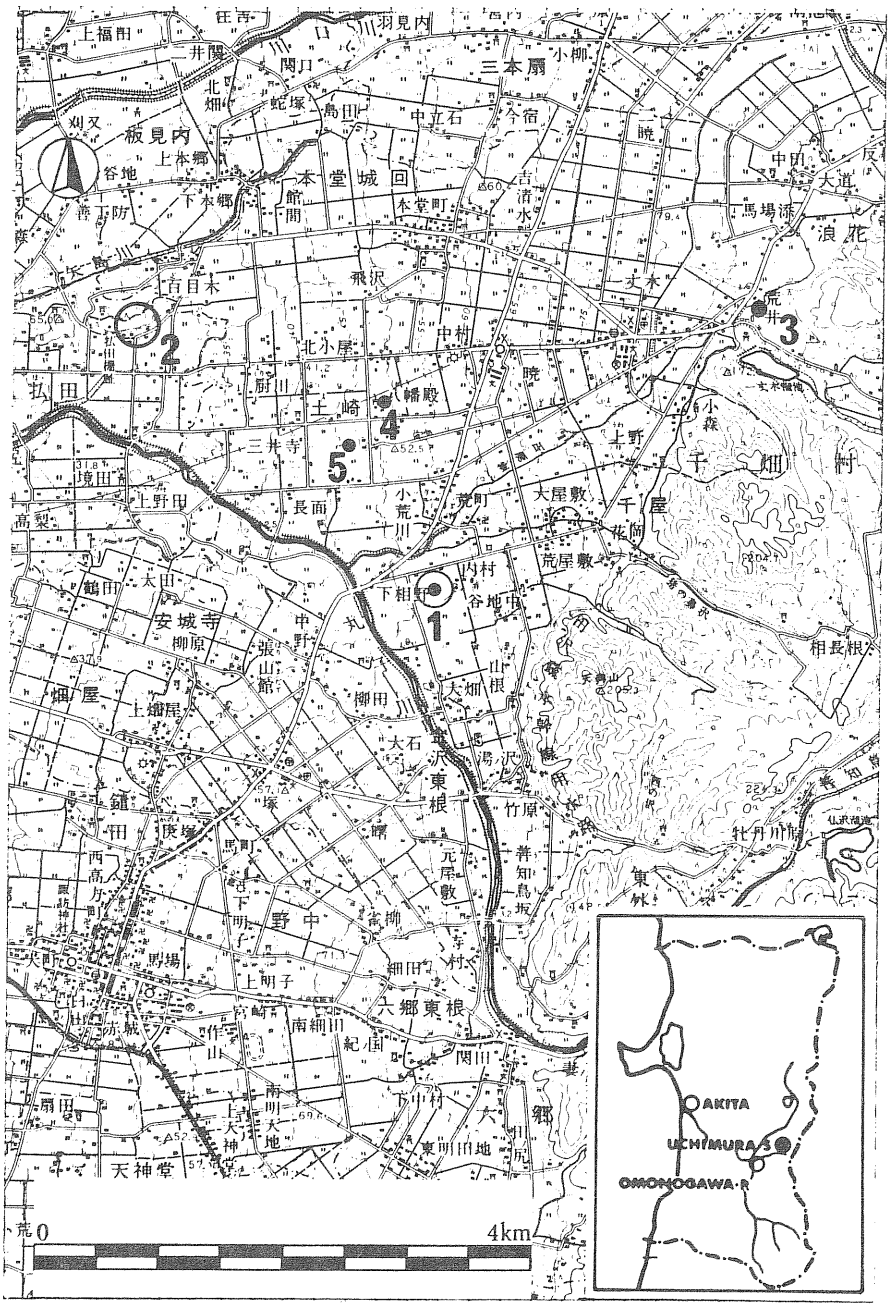
このため，秋田県教育委員会では，工事に先立ち発掘調査を実施し，記録保存をはかり，今後の資料に資するものとした。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	内村遺跡
遺跡所在地	秋田県仙北郡千畑村千屋字内村45
調査期間	昭和55年４月23日～６月24日
調査対象面積	2,000㎡
調査面積	2,400㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	畠山憲司（秋田県教育庁文化課）
調査補佐員	佐藤和弘
調査補助員	桑原隆，三嶋隆儀
事務補助員	斉藤知子
調査協力機関	秋田県仙北平野土地改良課 千畑村教育委員会
発掘調査参加者	田村義美，高橋与四郎，佐藤虎之助，佐藤喜三郎，熊谷権太，煙山昭蔵，高橋恭之助，加藤七之助，佐藤政之助，高橋修一郎，今川芳雄，須原文吉，佐藤周之助，高橋勇，今川三蔵，今川藤三郎，高橋源一，斉藤慎三，高橋熊雄，煙山仁市，佐藤秀雄，高橋軍平，藤井辰男，富樫金栄，加藤ツル，高橋ミヤノ，高橋サク子，藤井ユヨ，佐藤フジヱ，佐藤トラヱ子，高橋イネ，高橋フサ子，細井美保子，新田咲子，高橋リツ，高橋テツヱ，高橋イヱ，水戸カツ，佐藤ナツ，今川シデ，坂本ミツヨ，煙山ヒサ，今川チヤ，

高橋ハツヨ，富樫ヒデ，戸沢キヨメ，藤井イエ

遺物整理協力者　杉原敬子，児玉久子，神居トシ，石黒紀子，高橋邦子，山崎節子，山木紀子，高橋津真子，佐藤真智子，庄司礼子，柴田綾子，小川恵子



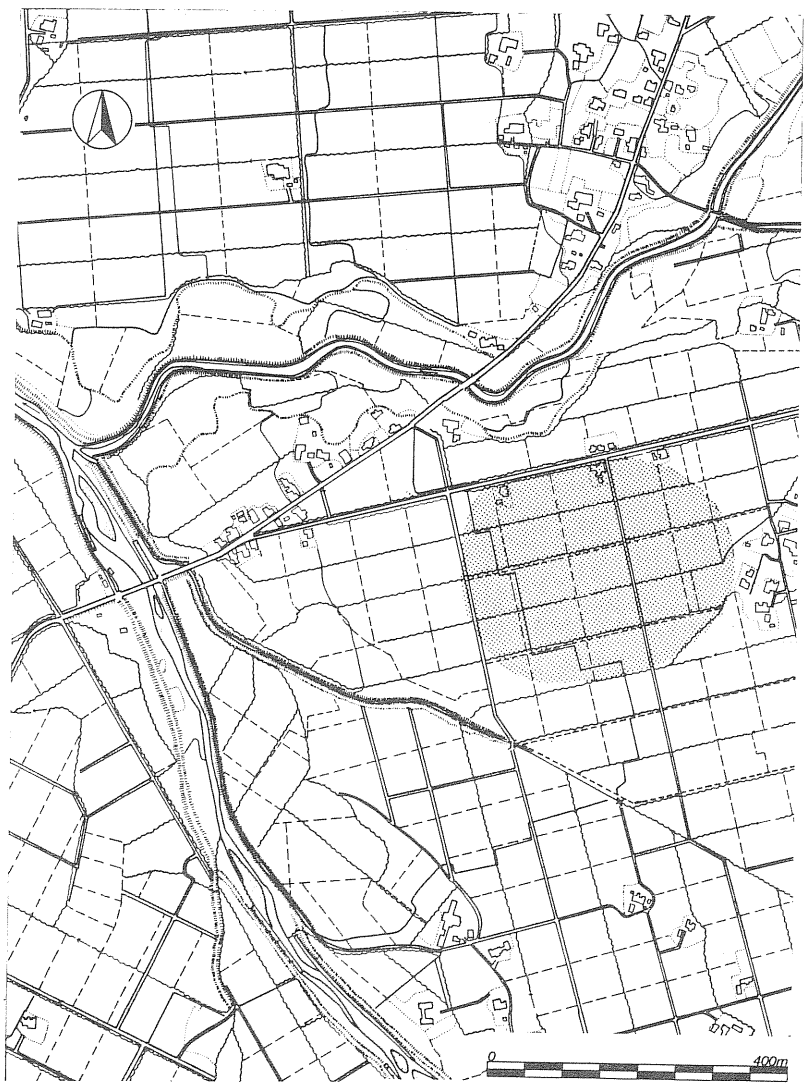
第1図　遺跡の位置

第２章　　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境（第１・２図，図版１）

内村遺跡は横手盆地の北東部，国鉄奥羽本線大曲駅の東方約8.5㎞に位置する。遺跡の東側には真昼嶽（1059.9m）を中心とする奥羽山脈が南北に連なり，北～西～南には肥沃で広大な仙北平野が広がる。

奥羽山脈に源を発する丸子川，真昼川等の中小河川は山脈西裾にいくつかの扇状地を形成している。遺跡はそのようにして形成された六郷，一丈木両扇状地の中間にあり，前者の丸子川（旧荒川），後者の釜淵川（小森川）にはさまれた微高地上に立地する。遺跡の標高は約50ｍで，丸子川の現河水面との比高は４～５ｍである。

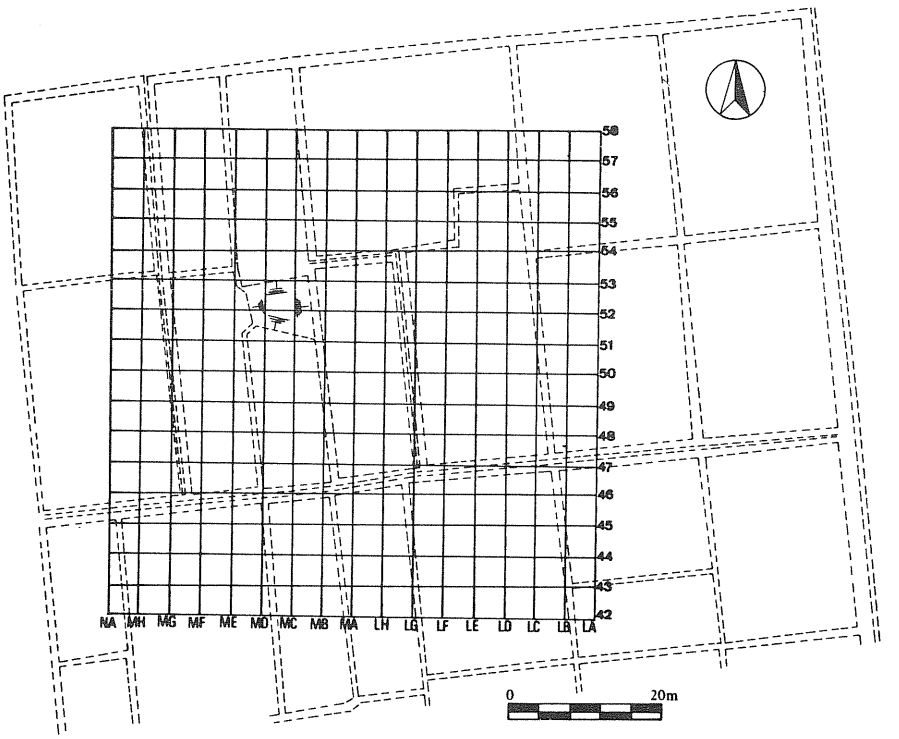


第２図　遺跡周辺の地形図

第２節　歴史的環境

内村遺跡のある仙北平野東部では，奥羽山脈から流れ出た水が急に平野部に達するため，良好な河成段丘の発達は見られない。このため，縄文時代から歴史時代の遺跡の立地は大きく２つに分けられる。１つは，脊陵山脈西麓にわずかに張り出したテラス状台地に立地する遺跡群で，主に縄文時代前期～中期中葉までのもの。他の１つは，山脈に近い扇状地末端部あるいは沖積地微高地上に立地する縄文時代中期最末葉～歴史時代の遺跡群である。

内村遺跡は後者に属する。



第3図　グリット配置図

微高地であるため，かつては水がかりが悪く，水田にすることが困難で土地所有者もこれをあきらめたという。しかし若者たちの集団である「消防団」が力まかせにこれを水田化したためこの水田に「消防田」という俗名が付されるようになったという。

第3節　周辺遺跡

第1図1が内村遺跡。遺跡の東側にある奥羽山脈西裾の台地には，1図3の一丈木遺跡をはじめ，縄文時代中期の組石群を持つ雲穣野遺跡や，中期，晩期に属する外川原II，III遺跡などがある，一丈木遺跡は昭和40～49年に4次にわたる発掘調査が行われ前期～後期にわたる遺物と中期全搬の竪穴住居跡が多数発見されている。扇状地末端に属する遺跡群は1図2の払田柵跡，4の中屋敷遺跡（縄文），5の寺屋敷（縄文）などがあり，この他にも同様な立地で，多くの縄文時代後期～古代遺跡が分布しているようである。払田柵跡周辺には土師器，須恵器を出土する多くの古代の遺跡がある。

第３章　　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

１．遺跡の層序

内村遺跡は丸子川と釜淵川との合流点内側の沖積微高地上に立地するため，氾濫原となったこともしばしばのようで，いわゆる砂利が非常に多い。しかし，ほ場整備事業による排水路の土層観察によると，この砂利層の分布が遺跡周辺均一ではなく，むしろ，地山は黄褐色のやや硬い砂質土や青灰色粘質土である場合が多く，砂利層のほとんどない個所も見られた。発掘調査した部分の地層は概略以下の通りである。

第１層　黒褐色耕作土（10～15cm)。

第２層　黒褐色砂礫土（３～５cm)。強い黒色土で非常に硬くしまっており上部に径３～５cmの小礫があり，下部に縄文土器，土師器，須恵器の細片を多く含む。

第３層　暗褐色土（10～15cm)。遺物（縄文土器が主であるが，まれに平安時代のものも含む)，炭化物を含む。

第４層　暗褐～黒褐色砂質土（15～20cm)。漸移層でまれに縄文土器，炭化物を含む。

第５層　地山土。地山土は地点により異なり明黄褐色砂質土であったり，黄褐色砂利層であったりする。

２．遺構の分布（第４図）

今回の調査面積はわずか2,000㎡強にすぎず，遺跡としての面積はこれ以上に広がっていることは確実である。

発見した遺構は大きく２時期に分けられる。１つは縄文時代中期のもので，竪穴住居跡，炉跡，土壙など。他の１つは平安時代後期の竪穴住居跡，土壙，焼土造構などである。

縄文時代の竪穴住居跡（炉跡）及び土壙は密接しており，いずれも強い関連を持っているものと考えられる。発掘調査した部分のみのこれら遺構群の分布状況を見ると，半径12～13ｍから半径40ｍの南東に開く半円の中にほとんどが入ってしまう。この小さな円の内側には遺構は少なく，この円上に径１～1.5ｍ，深さ１ｍ前後の袋状土壙が連なり，その外側に竪穴住居跡がめぐるように観取される。この遺構群が分布するところの地山は大部分が砂利，礫層である。

平安時代の遺構については，主に調査区中央から南東部分に集中していたが，工事途中の周辺の観察や，遺物の分布状況からすると，それほど濃密ではないにしてもおおよそ60,000㎡前後の面積を持つ遺跡であったことが考えられる。

3．遺物の出土状況

遺物はまず第2層下部の礫層中及びその下の第3層中から平安時代のもの縄文時代のものが小破片となって出土した。本来は，もっと上部に存在したものが，後世の耕作等で攪乱され，耕作土下に一緒に包含されたか，平安時代の遺構構築の際に縄文時代のものが掘り返され混じり合ったかしたものであろう。縄文時代の遺物と平安時代の遺物を層位的に区別できる部分は包含層が浅いせいもあり多くなかったが，調査区北東部と南東部では，縄文時代の遺物が細片ながらもややまとまりを持って出土した。

平安時代の遺物で完形に近い土師器などはほとんど遺構に伴ったものだけである。

この他縄文時代では数軒の竪穴住居跡覆土中に多くの遺物が意識的に捨てられた状況で出土した。

第2節　調査の方法（第3図）

発掘調査は4m×4mのグリッド方式で実施した。調査区のほぼ中央に任意の基準点を設置し，ここから磁北方向での東西南北基線を求め4m間隔での杭打ちを行った。東西にはアルファベット2文字の組み合わせ，南北には2桁の算用数字の組み合わせとし，各グリッドの名称は南東隅の交点のアルファベット，数字の組み合わせを用いた（MA50，LE46など）。

遺構の実測はグリッド杭のズレを手直ししながら，これを基準に，原則として縮尺1/20で行ったが，複式炉等1/10のものも多い。

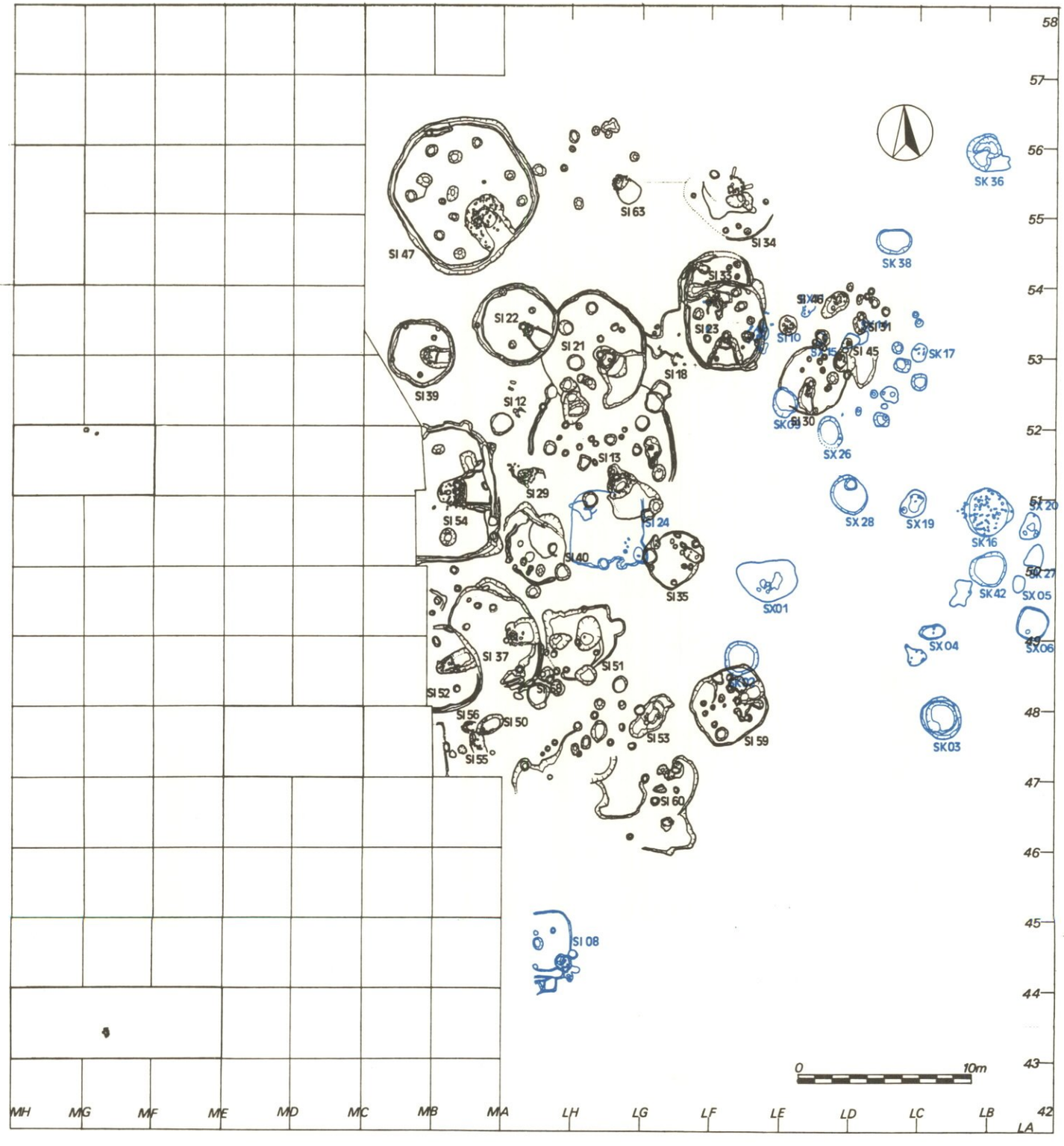
遺構の名称は竪穴住居跡＝SI，土壙＝SK，性格不明遺構＝SXとし，これに発見順に通し番号を付した。SK01，SK02，SI03，SK04，SI05……という具合である。

第3節　調査の経過

発掘調査は4月23日から6月25日まで実施した。

4月18日，調査に先立ち，調査予定地の現況での測量とグリッド杭打ちを行ない，同22日，発掘機材の搬入を行った。

4月23日，調査区外側に幅1mのトレンチを3ヶ所に入れ，地層と出土遺物の状況を観察した。24日，調査区中央部より表土剥ぎを開始。第II層の礫層上下から土師器片，須恵器片等が時折縄文土器を伴って出土しはじめ，26日にはLF46グリッドから緑釉陶器片（高台付杯）も出土した。4月30日頃よりII層中ないしIII層上面で土師器を伴う焼土遺構及び，土壙の上面が現われ始めた。5月19日頃までに焼土遺構，土壙は合わせて10基を超え，調査区南東隅では，平安時代の竪穴住居跡（SI08），東部中央ではSK16の土壙も確認された。この間現場では雨の日が多く，排水のための水路を掘ったが，これが結果的には第III層以下の断面観察をも兼ね


SI 47
SI 63
SI 34
SK 36
SK 38
SI 33
SI 22
SI 21
SI 23
SI 10
SI 31
SI 45
SK 17
SI 39
SI 18
SI 12
SI 30
SK 09
SX 26
SI 13
SI 29
SI 54
SI 24
SX 28
SX 19
SK 16
SX 20
SI 40
SI 35
SX 01
SK 42
SK 27
SX 05
SX 04
SX 06
SI 37
SI 51
SI 52
SI 56
SI 50
SI 53
SI 59
SK 03
SI 55
SI 60
SI 08
0
10m
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
MH
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LH
LG
LF
LE
LD
LC
LB
LA

第４図　発見遺構全体図

ることとなった。このことはまた，平安時代の遺構群の下に縄文時代の遺物包含層や遺構が存在することを知らしむることでもあった。

5月20日，調査区中央西部のII層を除去しきれいにしたところ，縄文時代中期後葉の竪穴住居跡数軒のプランを確認した（SI 13，21，22，23など)。また，この面で小型の複式炉2基（SI 12，18）が検出されたが，プラン等は把握できなかった。このようにして本遺跡は縄文時代中期後葉の集落跡でもあることが判然としたため，調査期間等を考慮して，この時期の遺構の検出に努めることに主眼を置くこととし，平安時代の遺構等を実測，写真撮影し，その下を掘り下げた。

6月4日までにセクションベルト等も全てはずし，竪穴住居跡の検出を進めたところ，複式炉のみのものを含めると20軒以上の存在が予想された。これらは重複も甚だしく全て良く整った複式炉を持つものであったので，各方面と協議し，6月10日までの調査予定を2週間延長することとした。また，これと併せて，秋田県払田柵跡調査事務所にも実測方の応援を仰ぐこととした。

6月に入ってからは遺構の検出，写真撮影，実測を同時に並行して行なう毎日となった。23日までに，縄文時代の竪穴住居跡15軒の他，複式炉のみのもの14基，その他の炉3基，土壙などを検出した。土壙は調査区内だけでもさらに10基前後の存在が予想されたが，期間がなく調査できなかった。

6月24日までに検出した遺構の実測，写真撮影を全て完了し，同27日，プレハブの解体，機材，遺物の運搬をして全ての作業を終了し，未発掘部分の多い遺跡への未練と，予備調査（範囲確認調査）の大切さを痛感しつつ遺跡を去った。

第4章　調査の記録

今回の内村遺跡発掘調査で発見した遺構は大きく分けて二時期ある。１つは縄文時代中期に属するもので，他の１つは平安時代のものである。

第１節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の発見遺構は中期末葉に属する竪穴住居跡15軒，炉跡16基，土壙４基である。このうち複式炉は基本的には１つの住居跡に付随するものと考え，竪穴住居跡に含めるのが妥当と考え，そのように記述した。ここでは，発見遺構のうち５軒の竪穴住居跡について報告する。

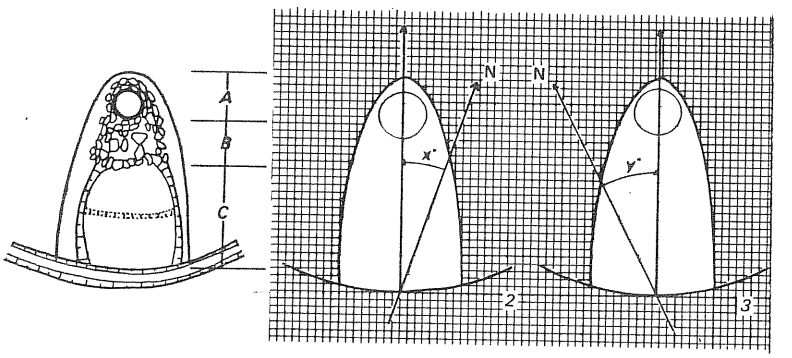
１．発見遺構と遺物

1）竪穴住居跡

おおよそのプランが確認できた竪穴住居跡は15軒である。これらは全て同時に存在したものではなく，互いに重複しているものもある。平面形は円形，隅丸方形，不整円形で，全て複式炉を有する。

複式炉の説明の場合，その各部の名称が繁雑にならないよう，便宜的に第５図１のように呼称することにした。

プランの確認できた複式炉は全てＣ部外端が住居跡壁に接している。このことから炉の軸線方向を求める場合，第５図２・３のようにした。つまり炉の長軸中心線と磁北とのなす角度をこれにあてている。これが真北をさす場合は0°真南をさす場合は180°で，矢印の方向がＮ→Ｗ→Ｓの場合(2)はＮx°Ｗ，Ｎ→Ｅ→Ｓの場合(3)はＮy°Ｅである。



第５図　複式炉模式図，炉軸線方向

ＳＩ13　竪穴住居跡（第６・７図，図版４）

〔位置〕　住居跡群中央やや内側で発見された。本遺跡では大型のものに属する。

〔重複など〕　北部でＳＩ21によって切られ，南東部でＳＩ29と重複し，南部で平安時代の竪穴住居跡ＳＩ24に切られている。

〔平面形〕　直径8.2～8.6ｍの円形。

〔壁・床面〕　明確な壁は東辺と北西辺のみ。この部分では高さ10～15cmを測り，垂直に近く立ち上る。床面はゆるい凹凸があるが，厚さ２～３cmの貼床で堅くしまっており，中央部から四方に広汎に焼けている。

〔柱穴〕　総数20本の柱穴があるが，P_1，P_2，P_4，P_5のように径70cm，深さ50cm前後のものと，P_7～P_{18}のような径30cm，深さ30cm前後のものがある。P_1～P_5の５本が主柱穴かと思われるが，P_3は土壙と重複している可能性もあり，はっきりしない。

〔壁溝〕　東辺と北西辺で認められる。幅15～20cm，深さ５～10cm。

〔炉〕　逆Ｖ字形をなす複式炉。Ａ部の埋設された土器の周囲の石は若干抜き取られた可能性がある。Ｂ部のＡ部寄り，石組斜面にも土器が斜めに埋設されている。Ｂ部の中央底部には石組がないが，Ａ部同様，非常によく焼けている。Ｃ部は攪乱によりはっきりしないが，わずかに貼床がある。軸線方向はＮ35°Ｗ。

〔その他〕　ＳＩ21やＳＩ29と重なり合う部分には地山土に似た黄褐色土が厚く堆積しており，プランの確認や重複関係をそれほど明確にし得なかった。

〔炉埋設土器〕　２つある埋設土器のうち第７図がＢ部斜面の埋設土器である。頸部のくびれる深鉢で，わずかに上半を欠く。浅存高50cm。磨消縄文による楕円形文，Ｃ字状文などを１～３個組み合わせて６つの区画を作り，それぞれの間を沈線で区切る。この区画のための沈線は２本ずつそれぞれ連続する可能性があり，この場合，上部で閉じられる区画と開いている区画が交互する形になる。

ＳＩ21　竪穴住居跡（第８・９図，図版４・５）

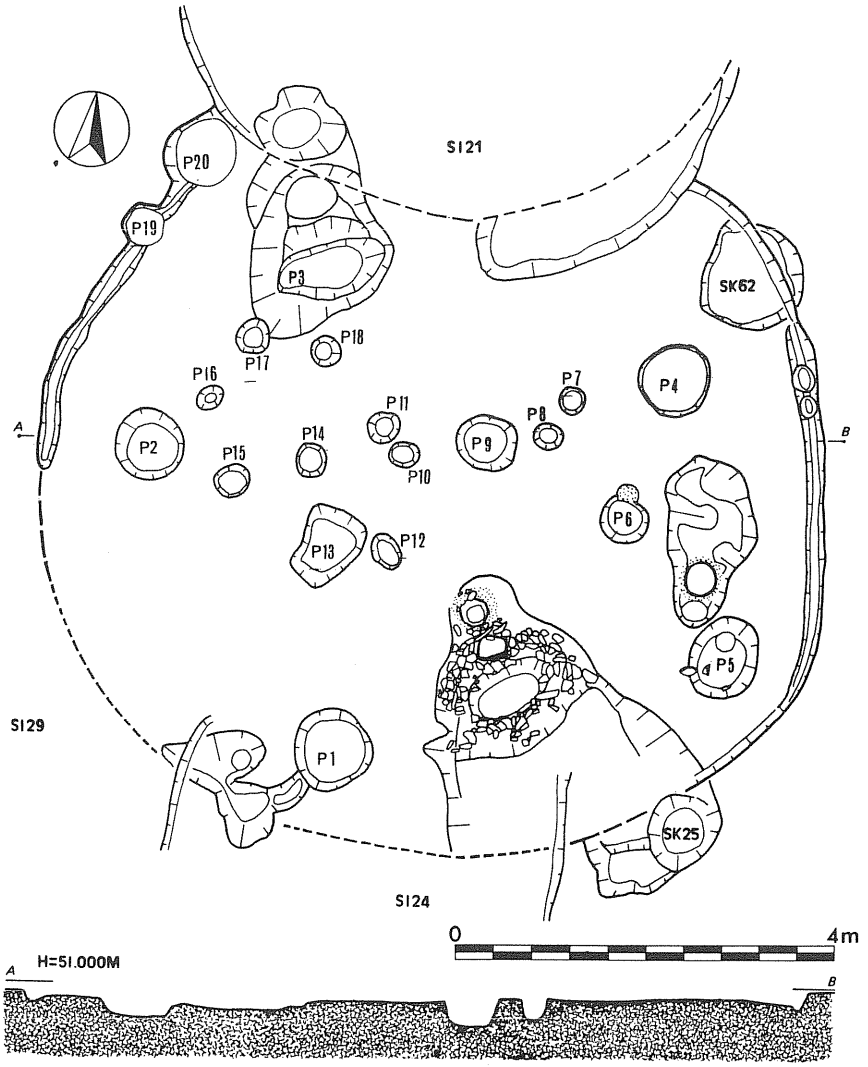
〔位置〕　住居跡群中央北部，砂利層を掘って構築されている。

〔重複など〕　南部でＳＩ13を切り，西部でＳＩ22に切られている。

〔平面形〕　直径約６ｍの円形。

〔壁・床面〕　東～北辺で25～30cmの高さを持ち，ほぼ垂直に立ち上る。ＳＩ13，ＳＩ22との重複部分で不明。床面は南西部を除き平坦で，黄褐色粘質土を厚さ３～５cmに貼っており，堅くしめられている。

〔柱穴〕　柱穴は床面上では８本あるが，P_2，P_7，P_3，P_4，P_5の５本が主柱穴かもしれない。これらは深さ35～50cmで，中には柱アタリかと思われる埋土状況を呈するものもある。これに

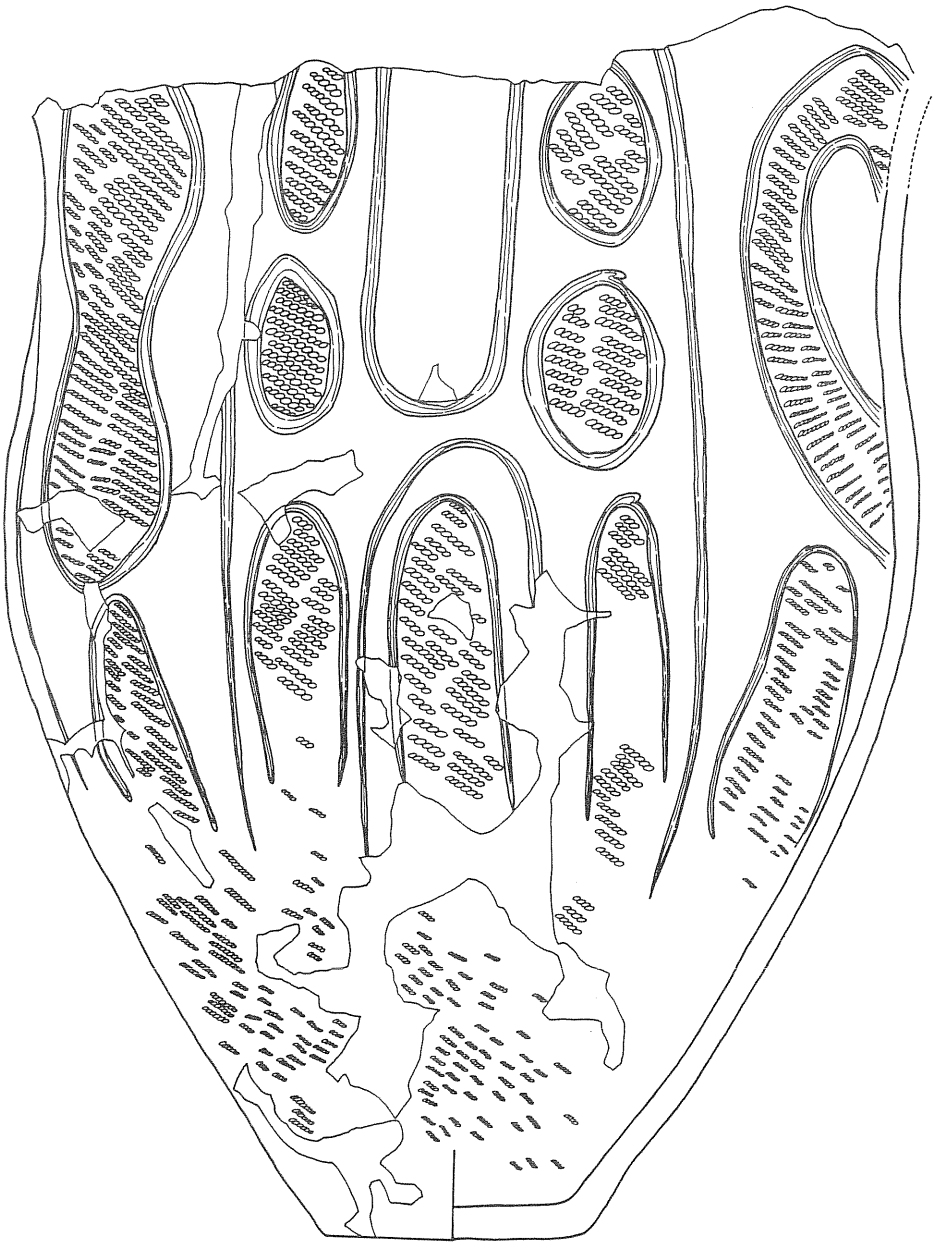


第6図　SI 13竪穴住居跡

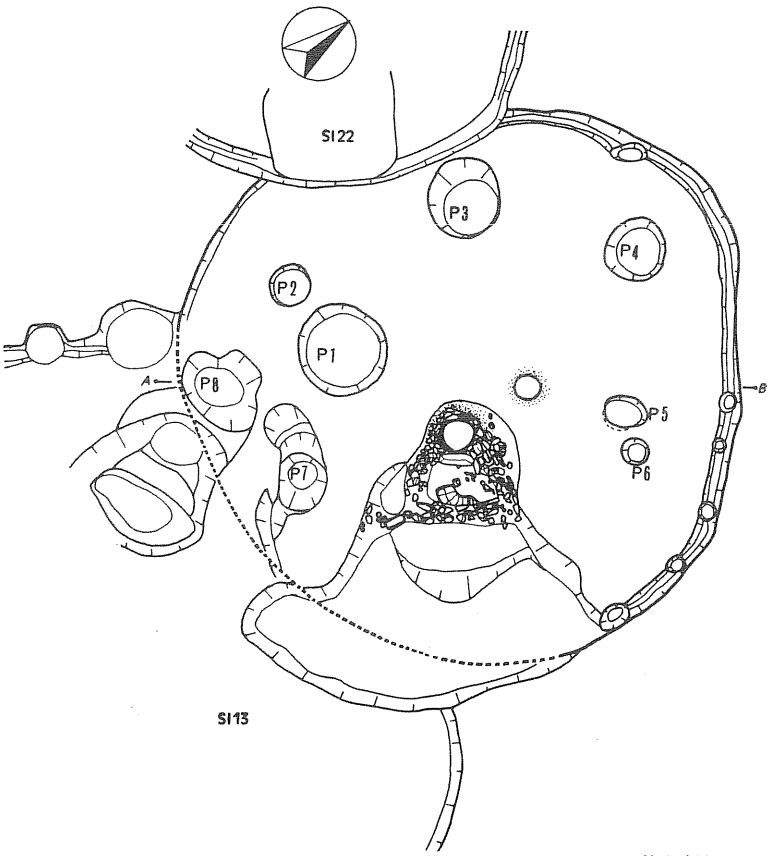
よれば，柱は径15～20cmで，柱アタリ部分を除いて柱掘り方内にも貼床が施されている。

〔壁溝〕　北～東辺にかけてきれいな壁溝がある。上幅20cm，深さ10～15cmで断面U字形をなし，ところどころに壁柱穴らしい落ち込みがある。

〔炉〕　平面形は裾の広がる逆V字形。A部には最大径42cmの深鉢形土器胴部を埋設している。B部の中央部には石組みがないが，内面がA部同様よく焼けている。A部とB部との境には比較的大きな河原石を用いている。C部は当時になされたと思われる撹乱が激しく，端を明確に



第7図　SI 13炉埋設土器



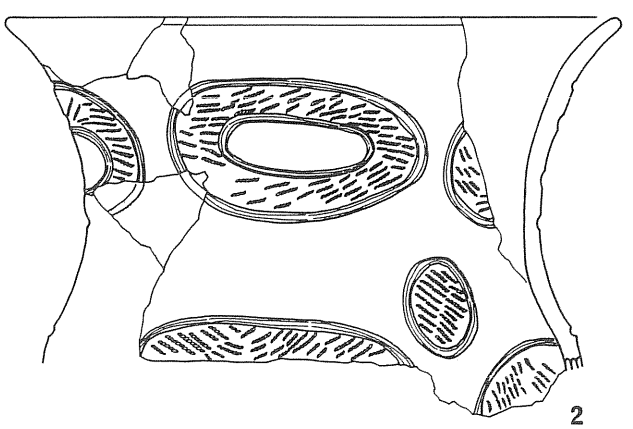
1．黒褐色土（10YR3/2）　しまっているがぼそぼそしている。炭化物を含み遺物包含層である。
2．暗褐色土（7.5YR3/3）＋にぶい黄橙色土（7.5YR6/4）　非常に硬く炭化物を含み遺物も弱干含む。礫を多く含む。
3．黒褐色土（10YR3/2）　2層に比べて軟かい。2層に比べて礫は少なく炭化物遺物を含む。ボソボソである。
4．黒褐色土（10YR3/2）＋褐色土（10YR4/6）　程んど礫を含まずサラサラしている。非常に硬く地山に続いている。
5．褐色土（10YR4/6））　地山層と非常によく似ている。
6．黒褐色土（10YR3/2）　軟かくサラサラし，鉄分を含んでいる。
7．褐色土（10YR4/4）　硬い炭化物は程んどない。

第8図　SI 21竪穴住居跡

なし得なかった。軸線方向はN50°W。

〔その他〕　複式炉の北に焼土を伴うもう1つの埋設土器がある。断面図でわかるとおり，その上部はSI 21の床面より上であり，SI 21の後に他の住居跡などが存在した可能性があるが，発掘の段階では捉え得なかった。

〔炉埋設土器〕　第9図1がこれで，深鉢の胴部。最大径は42cmを測る。磨消縄文によるC字



第9図　SI 21炉埋設土器(1)，出土遺物(2)

状文，Ｌ字状文などを横位に連続させる。胴部下半にも一段の文様帯を持つ。

ＳＩ22　竪穴住居跡（第10・11図，図版４・５）

〔位置〕　住居跡群北西部にある最も整った中型の竪穴住居跡。砂利層を掘り込んでいる。

〔重複など〕ＳＩ21を南東部で切っている。

〔平面形〕　径4.5～4.7の円形。

〔壁，床面〕　壁は20～30cmの高さを持ち，垂直に立ち上る。床面はほぼ全面が，厚さ２～５cmの貼床でよくしめられているが，北西部には一部これがない部分もある。

〔柱穴〕　床面での柱穴は４本でこれが主柱穴。深さは約50cm。

〔壁溝〕　上幅20～30cm，深さ15cmの壁溝がめぐり，壁柱穴がある。

〔炉〕　平面形逆Ｕ字形の整った複式炉。Ｂ部は全体が石組みで，Ａ部同様よく焼けている。Ｃ部底面は床面よりもよくたたきしめられた貼り床。住居跡壁からＢ部に向かい，ゆるく下降する。Ｃ部端に凹石がある。軸方向Ｎ53°Ｗ。

〔その他〕　ＳＩ21を切っているので，これにＳＩ13を加えた３つの住居跡の新旧関係は（古）ＳＩ13→ＳＩ21→ＳＩ22（新）となる。これは埋設土器によっても肯首されるところである。

〔炉埋設土器〕　第11図の１。頸部のほとんどすぼまない深鉢。頸部上半と胴下半を欠く。上部は波頭状，下部は三叉状に開く，縦に長い磨消縄文を５回くり返している。沈線内の施文はＲ－Ｌ－Ｒの複節縄文。

ＳＩ39　竪穴住居跡（第12，13図，図版８）

〔位置〕　住居跡群北西部，地山砂利層を掘り込んで構築している。

〔重複など〕　特にないが，中央部を新しい水路で切られている。

〔平面形〕　径3.8ｍの円形。

〔壁，床面〕　壁はしっかりしており，高さ20cm，垂直に立ち上る。床面は平坦であるが砂利層上にあるにも係らず明らかな貼り床はなかった。

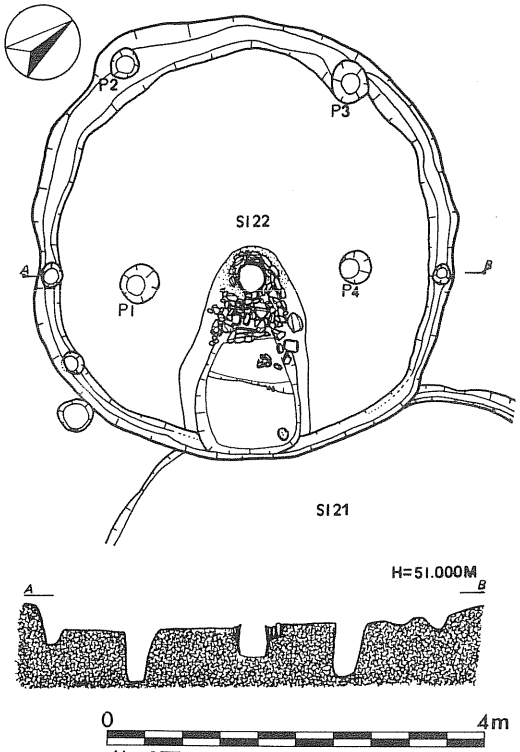
〔柱穴〕　４本ありこれが主柱穴。深さ25～30cmを測る。

〔壁溝〕　幅15～30cm，深さ５～10cmで全周する。壁柱穴は明瞭でない。

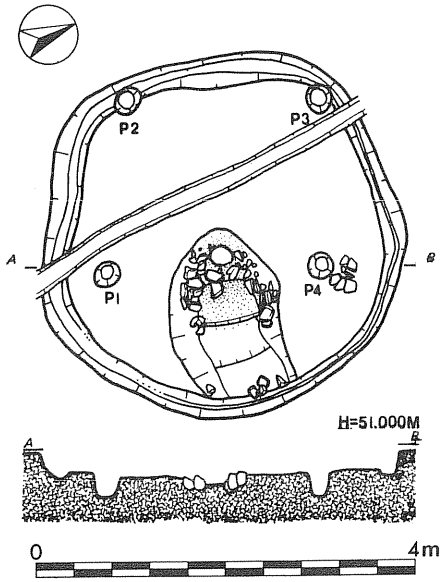
〔炉〕　Ａ，Ｂ部ともよく焼けている。特にＢ部の底面は焼けて赤変し硬くなっている。Ｂ部とＣ部との境はわずかながら段がある。軸線方向はＮ79.5°Ｗ。

〔その他〕　住居跡検出後の覆土除去中，複式炉上部に図版８のような集石があった。この段階では集石上面に焼けた痕跡はなく炉とは考えられなかった。住居廃絶後，炉部分にだけ石を集めたものであろうか。

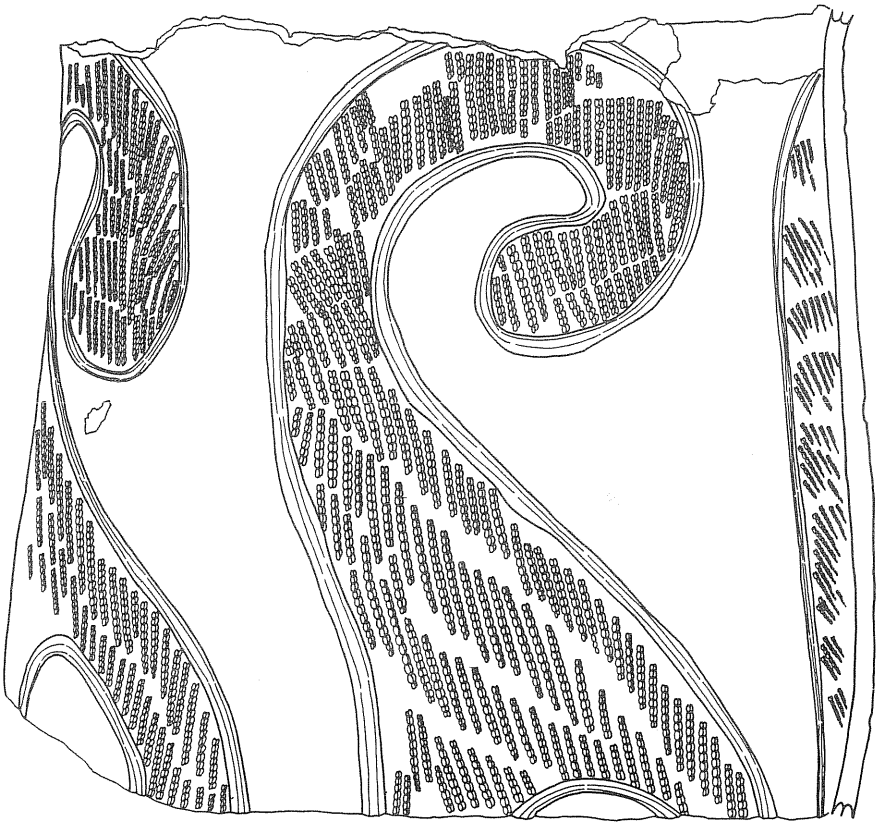
〔炉埋設土器〕　13図１がそれである。胴部上半と下半を欠く。縄文は縦位の回転施文。



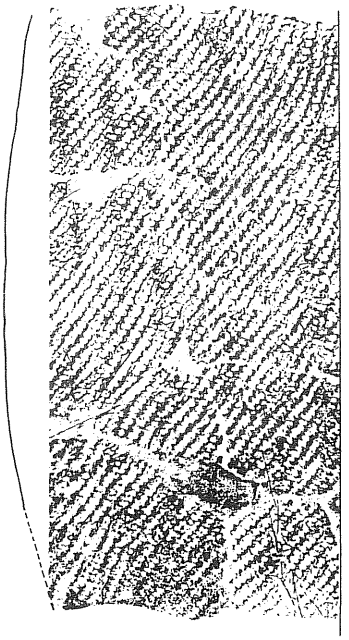
第10図　SI 22竪穴住居跡

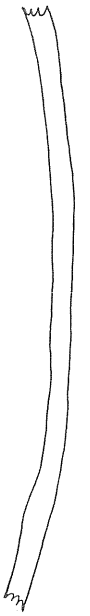


第11図　SI 39竪穴住居跡

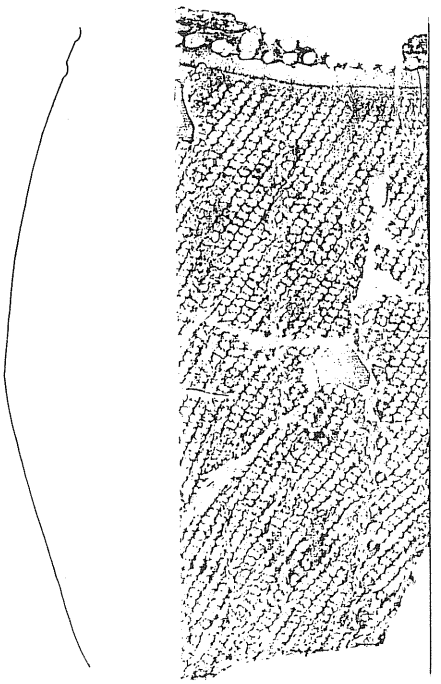


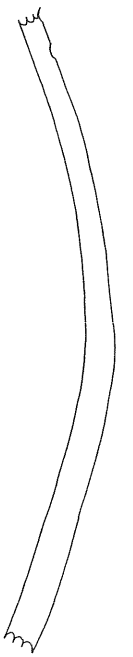
第12図　SI 22炉埋設土器(1)，出土遺物(2)





1

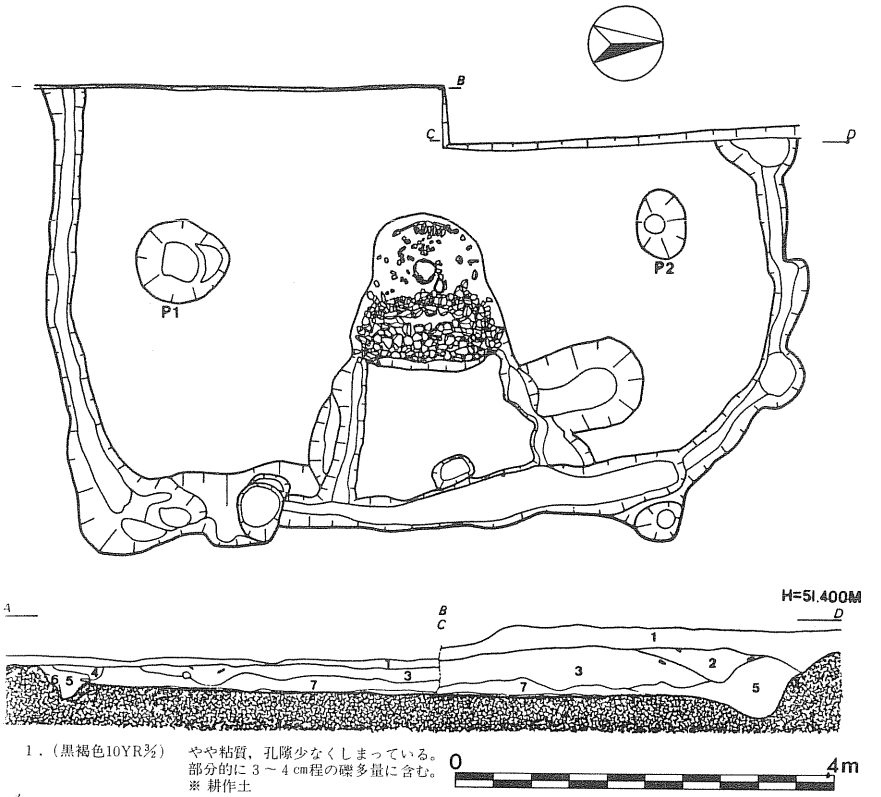




2

第13図　SI 39炉埋設土器(1)，出土土器(2)

0　10cm



1．(黒褐色10YR3/2)　やや粘質，孔隙少なくしまっている。
　　部分的に3～4cm程の礫多量に含む。
　　※ 耕作土
5．(黒褐色10YR3/2)　孔隙多く，砂質径1～3cm程の礫多量に含む。遺物を包含する。
3．(黒色10YR2/1)　孔隙色多く，粘性も少ない。遺物を包含する，1よりやや小さめの礫多量に含む。
4．(暗褐色10YR3/3)　砂質に近く，孔隙も多い。
5．(黒褐色10YR3/2)　砂質に近い，孔隙多く径1cm～4cm程の礫若干含む。
6．(褐色10YR4/4)　砂質，地山の黄褐色砂粒の混じったもの。
7．(にぶい黄褐色10YR4/3)　粘質，孔隙少なくしまっておりキメ細い。
8．(褐色10YR4/6)　砂質であるが，比較的キメ細かく孔隙も少ない。非常に硬くしまっている。
　　貼床部

第14図　SI 54竪穴住居跡

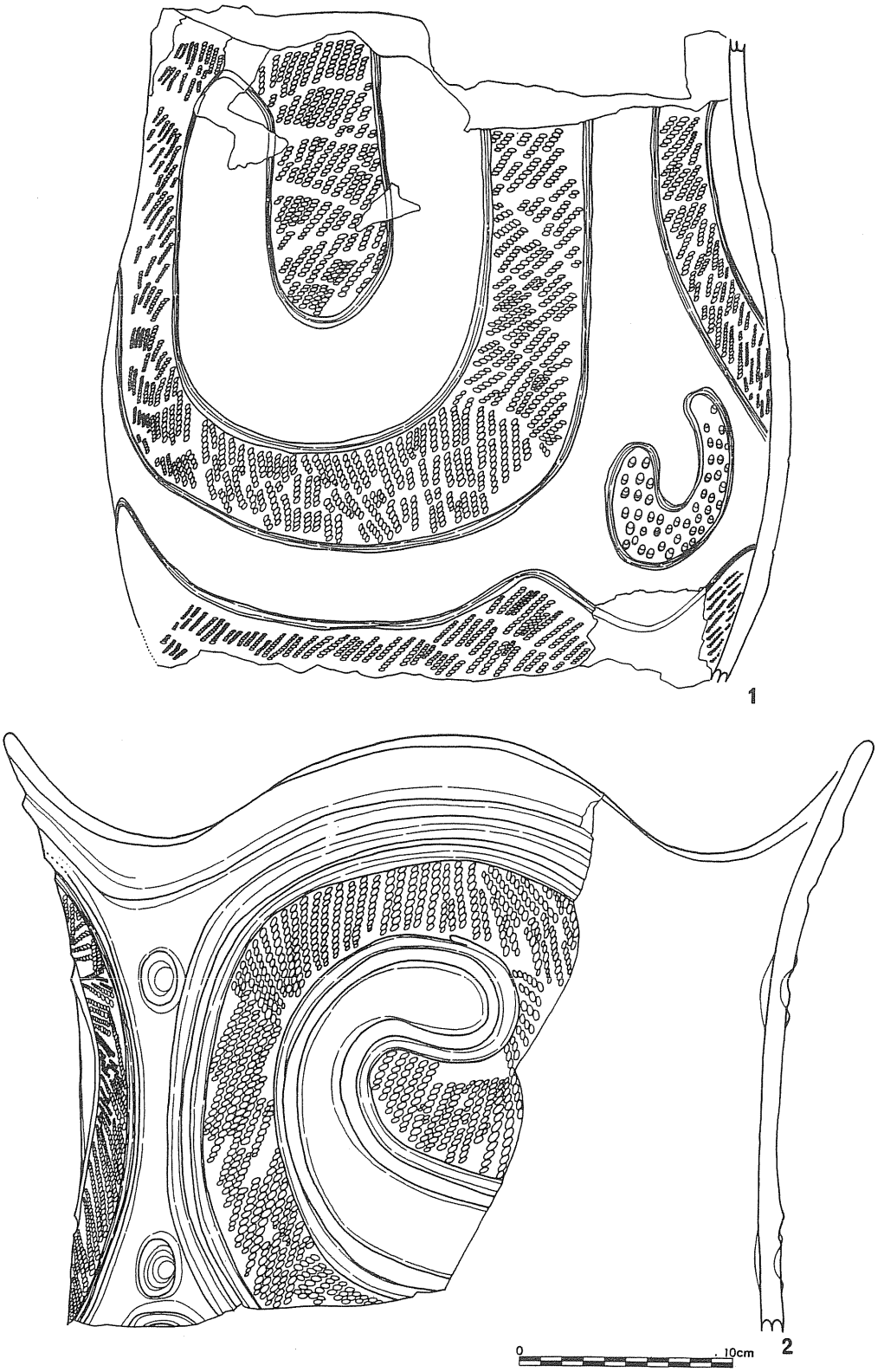
S I 54　竪穴住居跡（第14・15図，図版11）

〔位置〕　住居跡群西部中央にある。地山砂利層を深く掘り込んで構築された竪穴住居跡。

〔重複など〕　特にない。

〔平面形〕　住居跡全体の東側半分しか発掘できなかった。本遺跡竪穴住居跡は大部分が円形であるのに対し，隅丸方形のプランを呈するものと考えられる。一辺約7.7～8.0mであろう。

〔壁，床面〕　東辺では地山が高く残っており，壁高50cmを測る。床面は複式炉の北側でやや不明確な部分もあったが，平坦そのもので，黄褐色粘質土を厚さ3～5cmに貼り，硬くしめている。



第15図　SI 54炉埋設土器(1)，出土土器(2)

〔柱穴〕　床面上の柱穴は２本（Ｐ１，Ｐ２）確認した。いずれも主柱穴で深さ約40cmである。未調査分を含めても４本の主柱穴と考えられる。

〔壁溝〕　幅約30cm，深さ20～30cmの壁溝が全周をめぐる。

〔炉〕　本遺跡中最大で最も整然とした複式炉が，東壁中央部に取り付いている。全体の平面形は先端が丸味のある逆Ｖ字形。Ａ部は埋設土器を中心にして半径約60cmの円を描く。先端部には幅10cm前後，厚さ３～５cmの自然石を円周に沿って６個縦列させ，その内側に同様な石を７個放射状に配している。埋設土器の側に石囲はない。Ｂ部は径10～20cmの河原石を無数に段状に積み重ね全体として長方形にした石組み部。石組み部は底面，壁面とも火勢を強く受けたと思われ，中にはボロボロに砕けた石もある。Ｃ部の平面形は上底2.0ｍ，下底1.5ｍ，高さ1.5ｍの略台形を呈する。底面は粘質土が厚さ２～５cmに貼られ，平坦で非常にかたくしまっている。両側辺にはＢ部から発した深さ５cmの溝があり，壁溝に至っている。Ｎ98°Ｗ。

〔その他〕　覆土中からは多量の土器などが全て破片の状態で出土した。

〔炉埋設土器〕　62図１がそれである。胴部中央が膨らむ深鉢。頸部及び胴部下半を欠く。頸部から胴中央にかけては磨消縄文による大きな渦文が３単位並び，その下に波状の沈線が一周して文様帯を区画している。渦文と渦文の間の広い無文部には刺突で充填されたＣ字状文が配される。

第5章　ま　と　め

今回の内村遺跡の調査では，調査期間等の制約などから，約2,400㎡を発掘調査したにとどまった。調査の結果，内村遺跡は縄文時代前期中葉，中期中葉，末葉，平安時代後半にそれぞれ利用された複合遺跡であることが判った。特にこの中でも，縄文時代中期末葉と平安時代に属する多くの遺構と遺物が発見された。以下，この２つの時期の遺構，遺物について若干まとめてみたい。

1　縄文時代中期末葉の住居跡について

今回発見した縄文時代中期末葉の竪穴住居跡は15軒で，この他に竪穴住居跡に付随していたものと考えられる複式炉14基，土器埋設炉２基がある。竪穴住居跡はその平面規模により３種に分けられる。大きなものは径８ｍ前後，中位のものは径４～５ｍ，小さなものは径３ｍ前後である。竪穴住居跡と複式炉（以下住居跡群という）についてまとめると以下のようになる。

①　住居跡群は自然堤防的な微高地先端部とその周辺に占地する。全体として東～南東側の開く馬蹄形を呈する。

②　住居跡の平面形は円形ないし隅丸方形のものが主体をなす。

③　規模には大きく分けて３種類ほどある。

④　壁溝のあるものと，ないものがある。

⑤　主柱穴は不明なものもあるが，４本主柱のものが最も多く，規模が大きくなるにつれ，本数が増える。

⑥　床面は地山が砂利層であることが多いことから貼床としたものが多い。

⑦　住居跡群には切り合いのあるものもあり，（古）ＳＩ13→ＳＩ21→ＳＩ22（新），（古）ＳＩ37→ＳＩ52（新），（古）ＳＩ23→ＳＩ33（新），（古）ＳＩ45→ＳＩ30（新），（古）ＳＩ56→ＳＩ50（新）などが考えられる。また，この切り合いの関係などからして少なくとも数期の住居群の変遷が推定できよう。

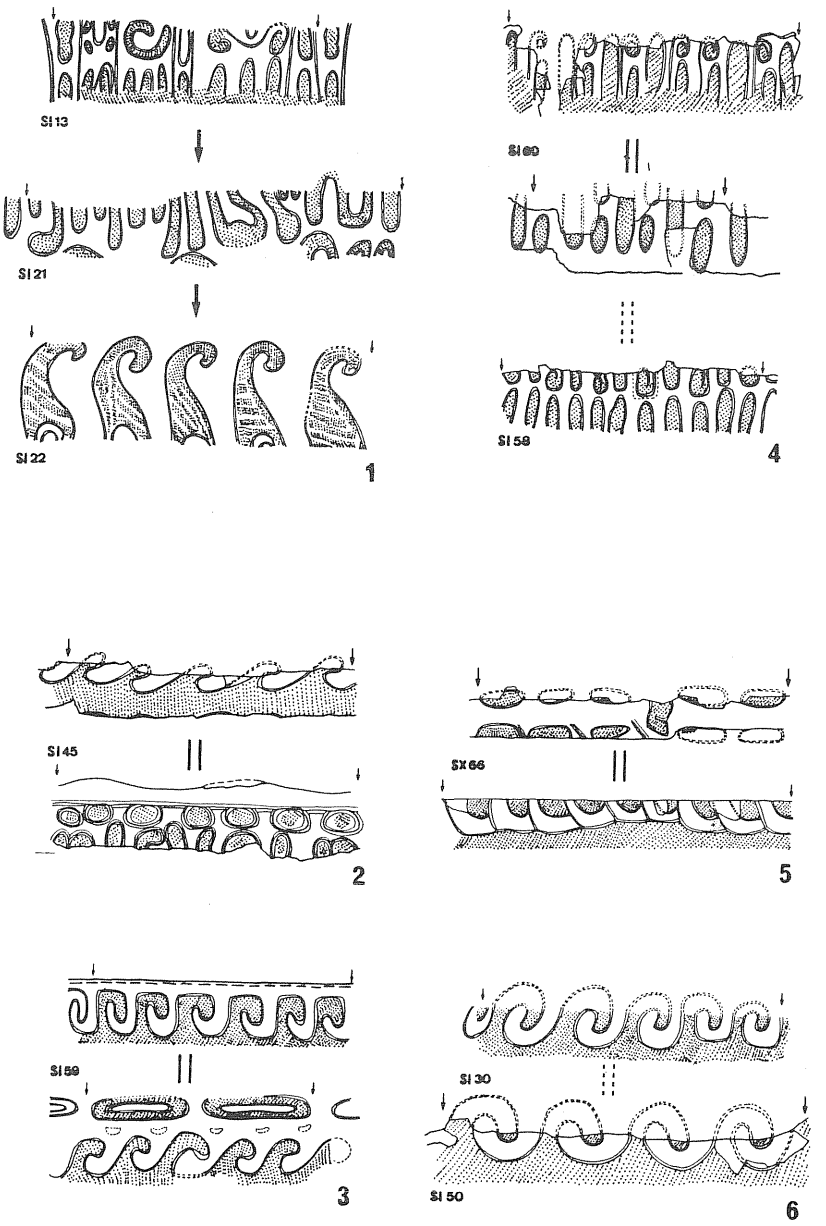
⑧　炉は複式炉で，炉端（Ｃ部）は住居跡の壁に取り付く。

⑨　炉の軸線方向は，住居跡の中心を通る直線上にあることが多い。

⑩　炉は大きく４つに分類できる。（第４章，第１節，２を参照）。これらは遺構間の切り合いからⅡｂ類からⅡａ類への変遷も考えられるところであるが，一様ではなく，現在のところ明確な時期差を表わすものとは言えないようである。

2．縄文時代中期末葉の土器について

内村遺跡出土土器は縄文時代中期末葉のいわゆる大木９．10式土器に比定し得るものが主体



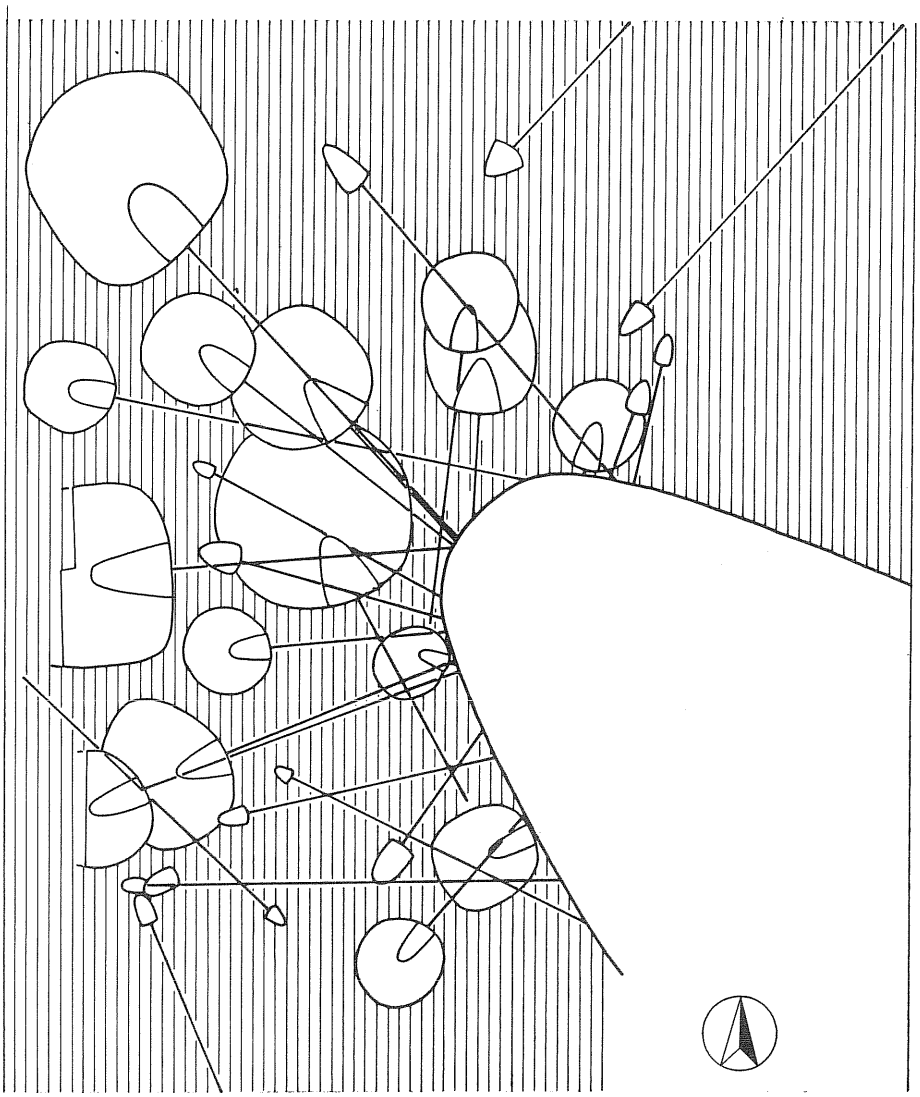
第16図　炉埋設土器展開模式図

を占める。竪穴住居跡内の，あるいは単独に発見された複式炉に埋設されている土器も全てこの時期のものである。

119図は，それらの埋設土器のうち，遺構間に切り合いがあったり，１つの炉に二重に埋設されていたりした精製深鉢形土器の展開模式図である。太い矢印は古→新を表わし，═は二重埋設されていた土器，┈はほとんど同じ文様の施されているものを表わしている。

３．複式炉の軸線方向から見た住居跡の分布について

120図は，住居跡内に於ける複式炉の位置が，集落内に存在すると予想される「広場」方向を向くと推定されるため，その軸線の走行状況を表わしたものである。これによると，推定「広



第17図　竪穴住居跡複式炉軸線方向図

場」は南東に開く楕円形を呈する。また，ほとんどの軸線方向はこの「広場」に集中するがＳＩ34，46，49，56などは，これとは大きくはずれるか，全く逆方向を取ることがわかる。

これらの炉（住居跡）が住居跡群の中でも最も端部に位置することは暗示的である。

4．出土石器について

ここでは遺構内から出土した石器を除いた石器で，明確に前期のものとわかる石槍２点を除いたものについて述べる。

遺構外出土石器は総数284点である。このうち掻器が８種類146点で全体の51％を占める多さである。この掻器のうち７，８類は細長いブレイド，あるいは剥片の一方の長辺に刃部を作出したものである。この石器の特徴は打撃面を上にして石器を見て，最も高い陵線が右にある場合は左辺に刃部があり，左に陵線がある場合は右辺に刃部が作られていることである。これは前者が右きき，後者が左ききの人が使用した石器であると考えられる。

5．平安時代後半の土器群について

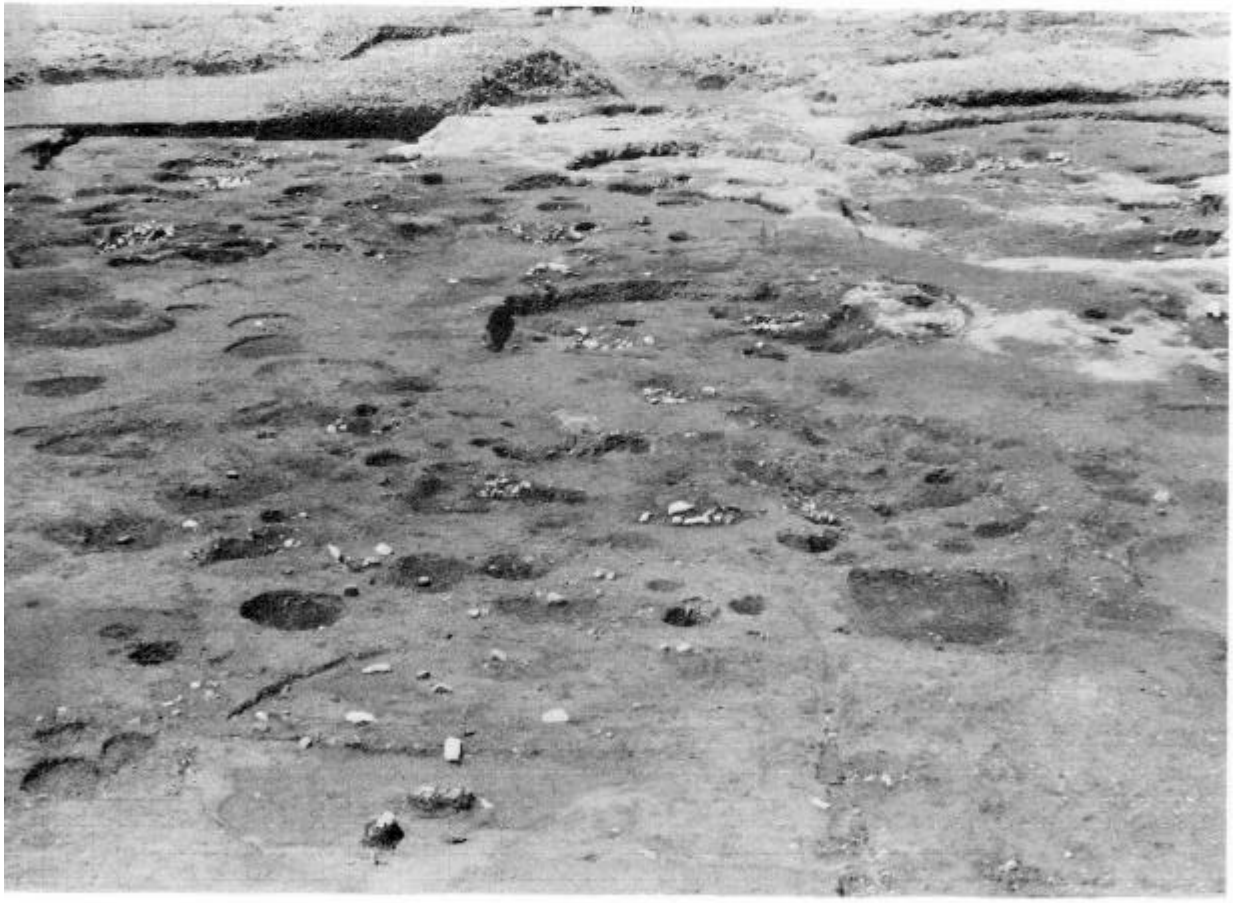
平安時代の遺構であるＳＫ16，ＳＩ08，10などから出土した土器群はその出土状況から見てほぼ同時期のものと考えられる。これらの土器群の特徴をまとめると以下のようになる。①須恵器の絶対量が非常に少なく，特に杯は全体でもほんの数点しかない。②土師器杯は全て色調が灰黄～にぶい黄橙色を呈し，底部回転糸切離しで再調整のないものである。③口縁部が大きく外に折れ曲り，浅い皿が比較的多い。④黒色処理された土器には，ていねいな再調整の施されているものが多い。

以上，今回の内村遺跡の発掘調査結果のいくつかをまとめてみたが，今後に数多くの問題を残したものとなった。縄文時代中期末葉に関しては，遺跡の立地がこの時期以前とは大きく変わっており，今後の分布調査等でも，このことについては充分な注意が払われねばならないことを教えてくれた。本遺跡では，集落内に存在すると予想される土壙，墓域などが同時に調査され得なかったことが返す返すも残念である。

平安時代に関しては，県内でも数少ない緑釉陶器や和鏡の出土など，払田柵跡に近い位置にあることとも合わせて，多くの問題を提起した遺跡であると言える。

図版 1　上　遺跡遠景（南東▶）

下　発掘前の状況（南▶）

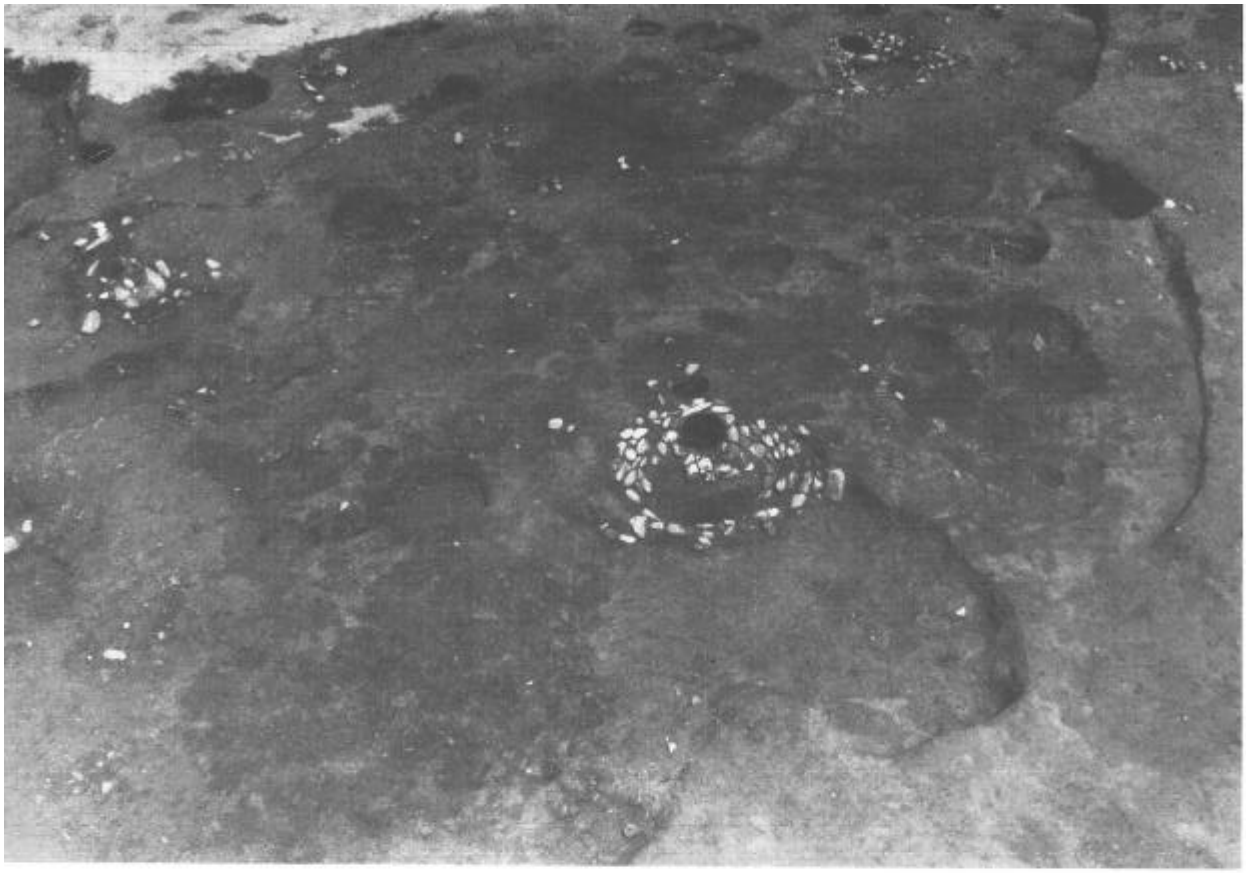


図版 2　上　調査区近景（南▶）

下　同上（東▶）

図版 3　上　調査区近景（北東▶）

下　同上（南▶）

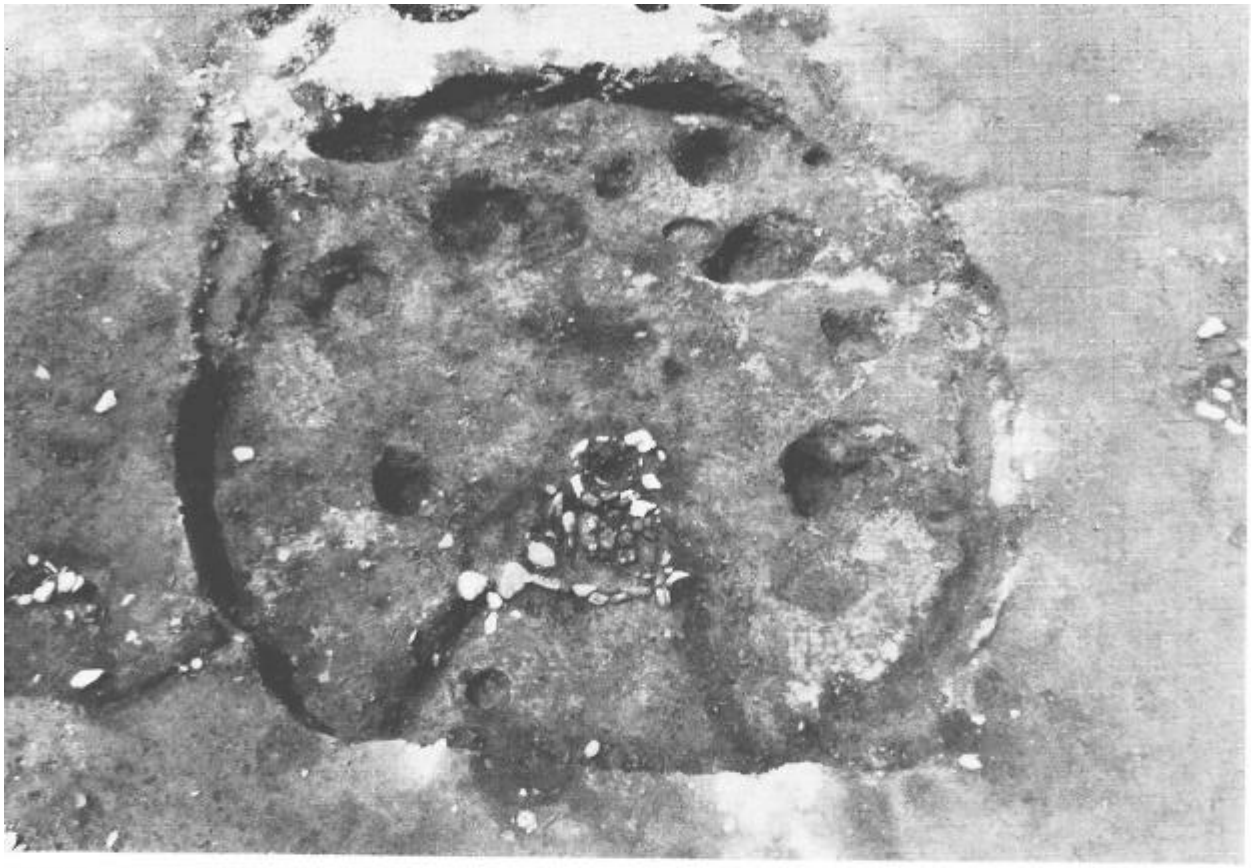


図版 4　上　SI 13 竪穴住居跡（南東▶）

下　SI 21, 22 竪穴住居跡（南▶）

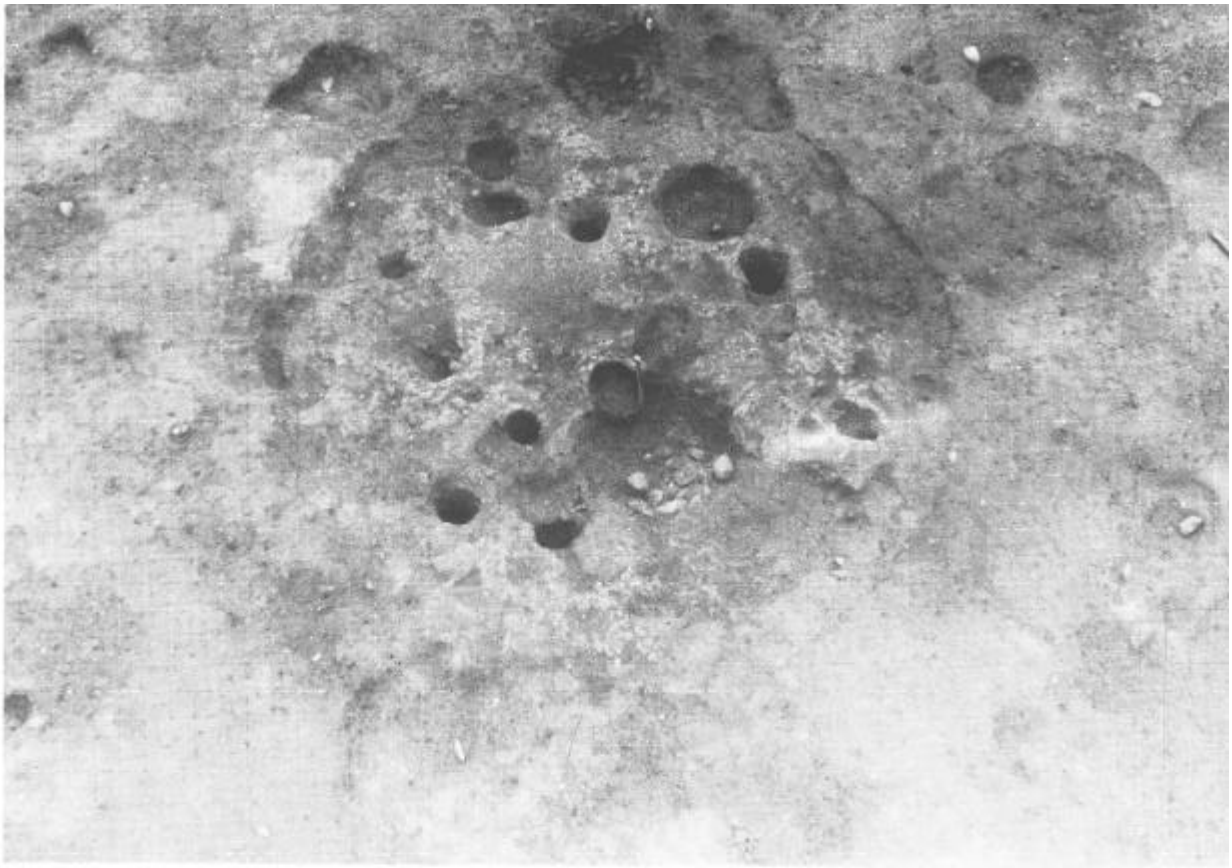
図版 5　上　SI 21 竪穴住居跡（東▶）

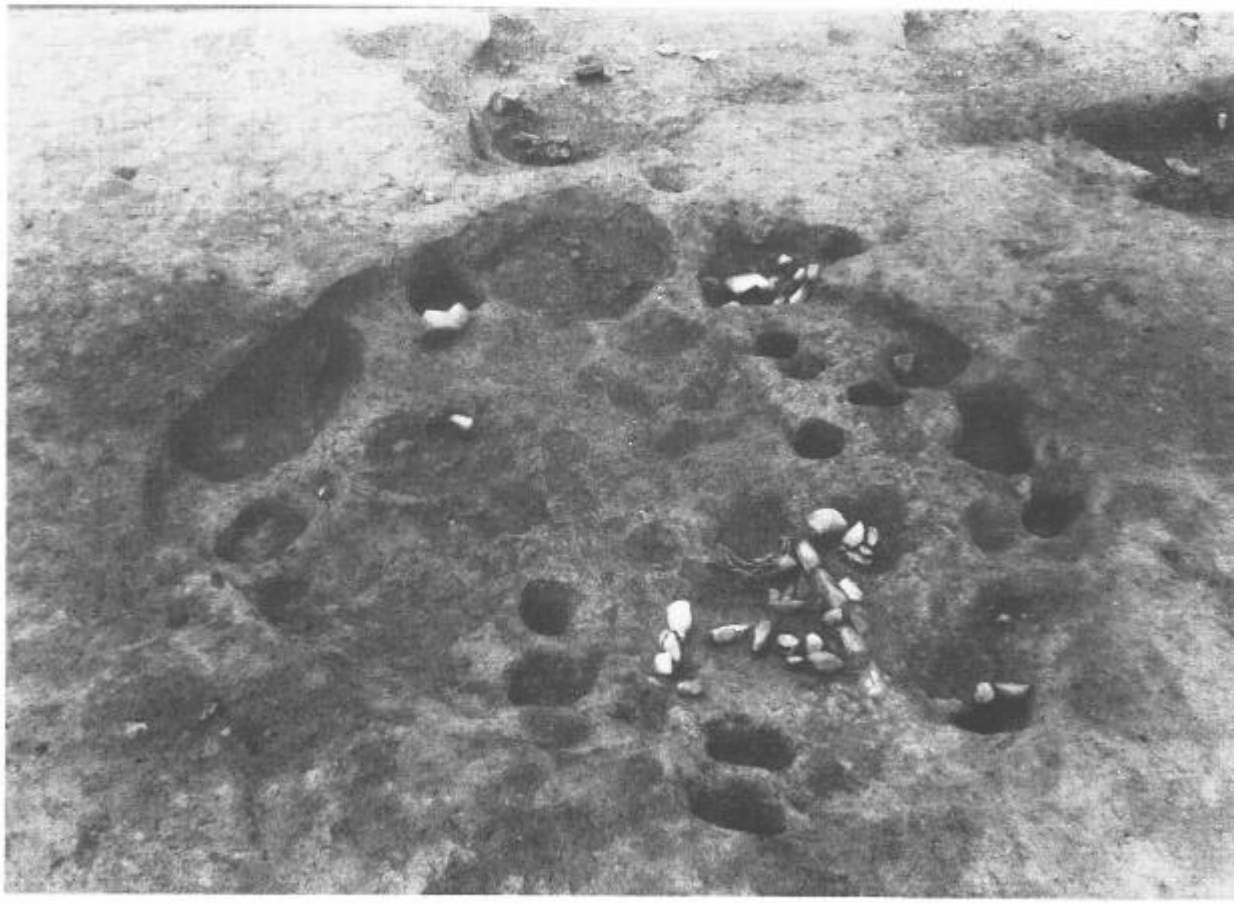
下　SI 22 竪穴住居跡（東▶）



図版 6　上　SI 23 竪穴住居跡（南▶）

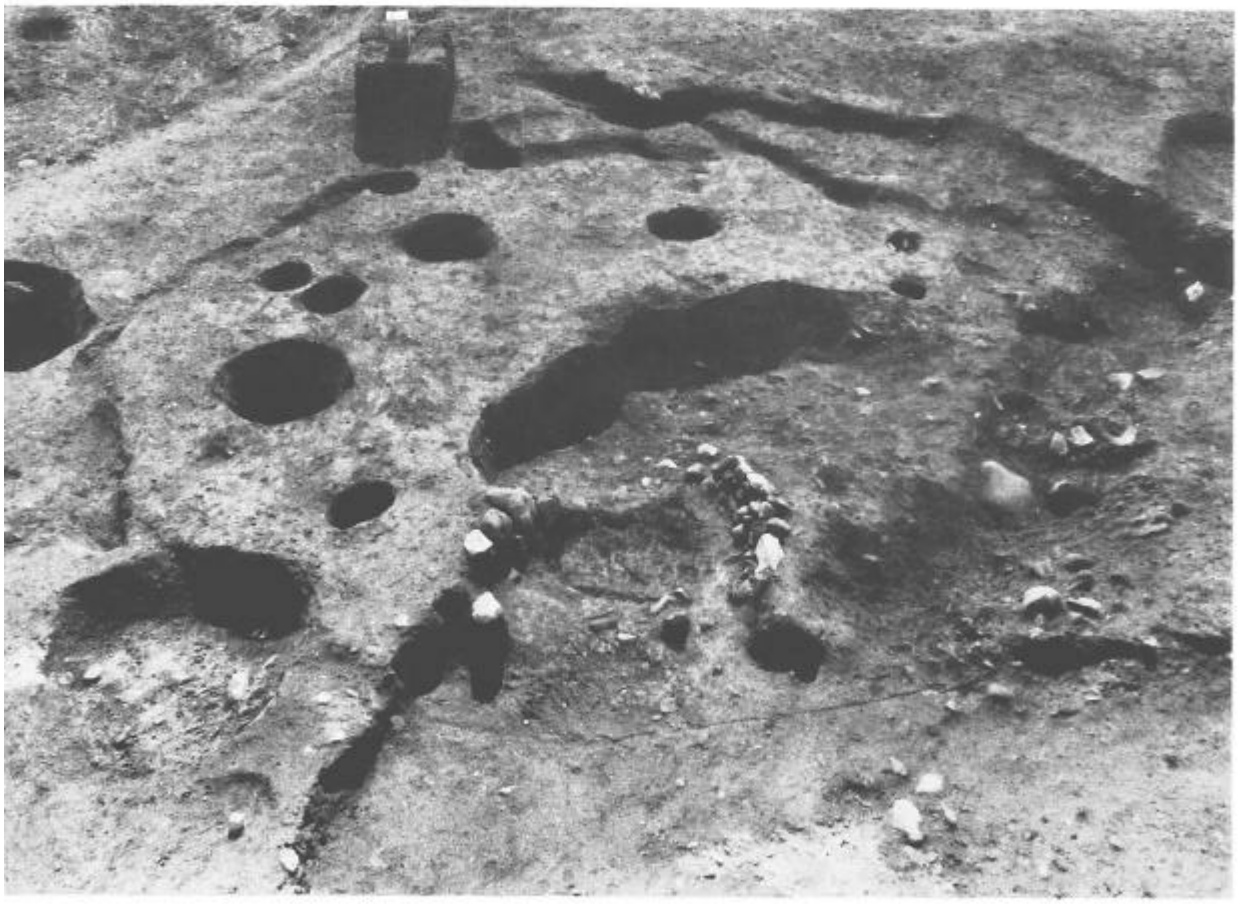
下　SI 23，33 竪穴住居跡（南▶）





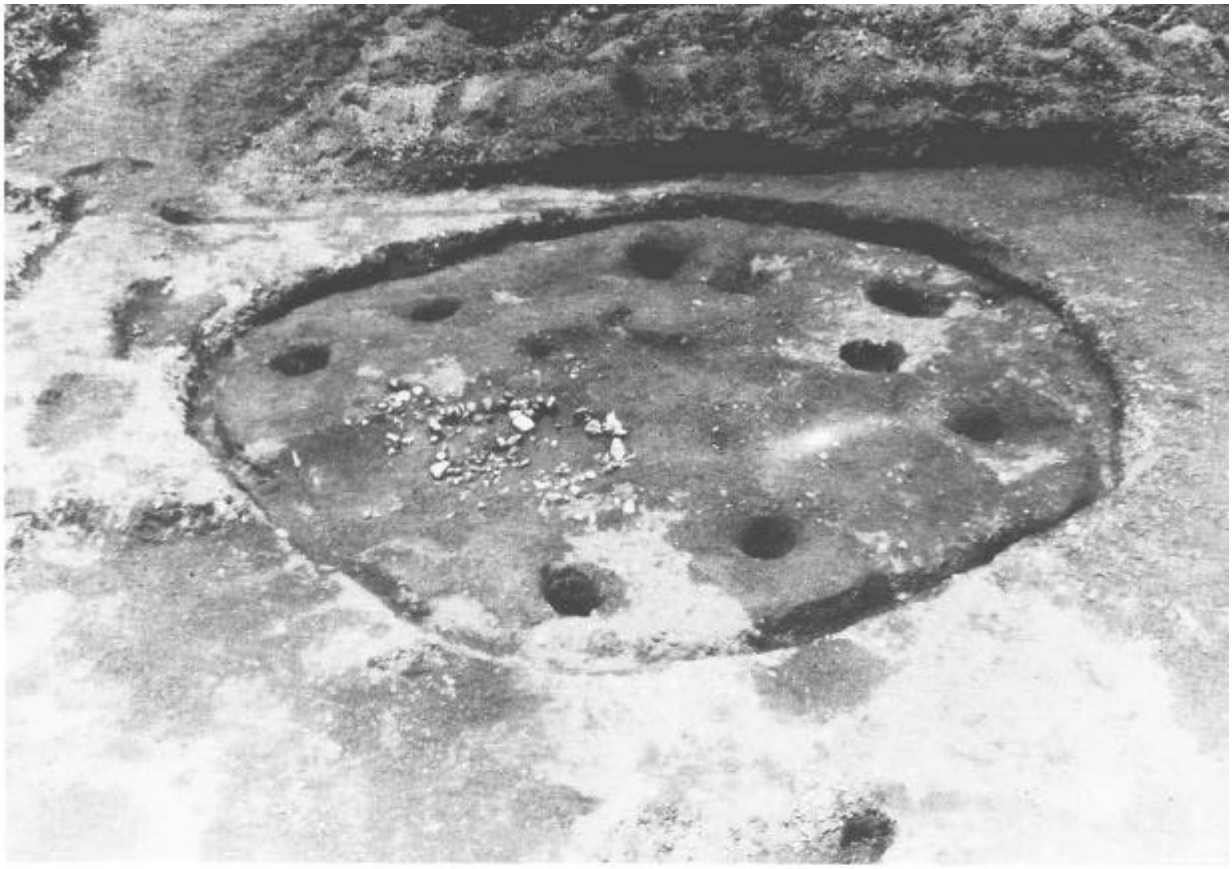
図版 7　上　SI 30 竪穴住居跡（南▶）

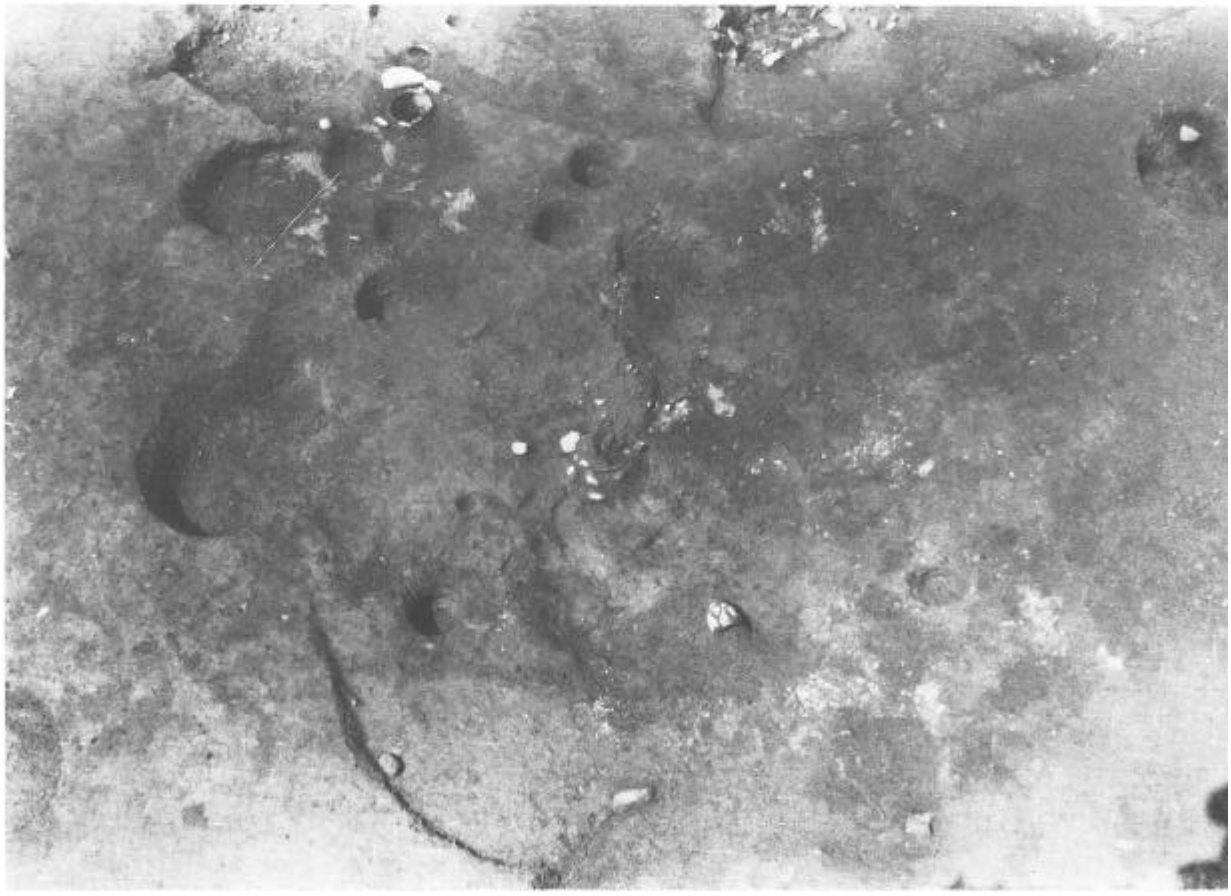
下　SI 35 竪穴住居跡（東▶）



図版 8　上　SI 39 竪穴住居跡（東▶）

下　SI 40 竪穴住居跡（東▶）



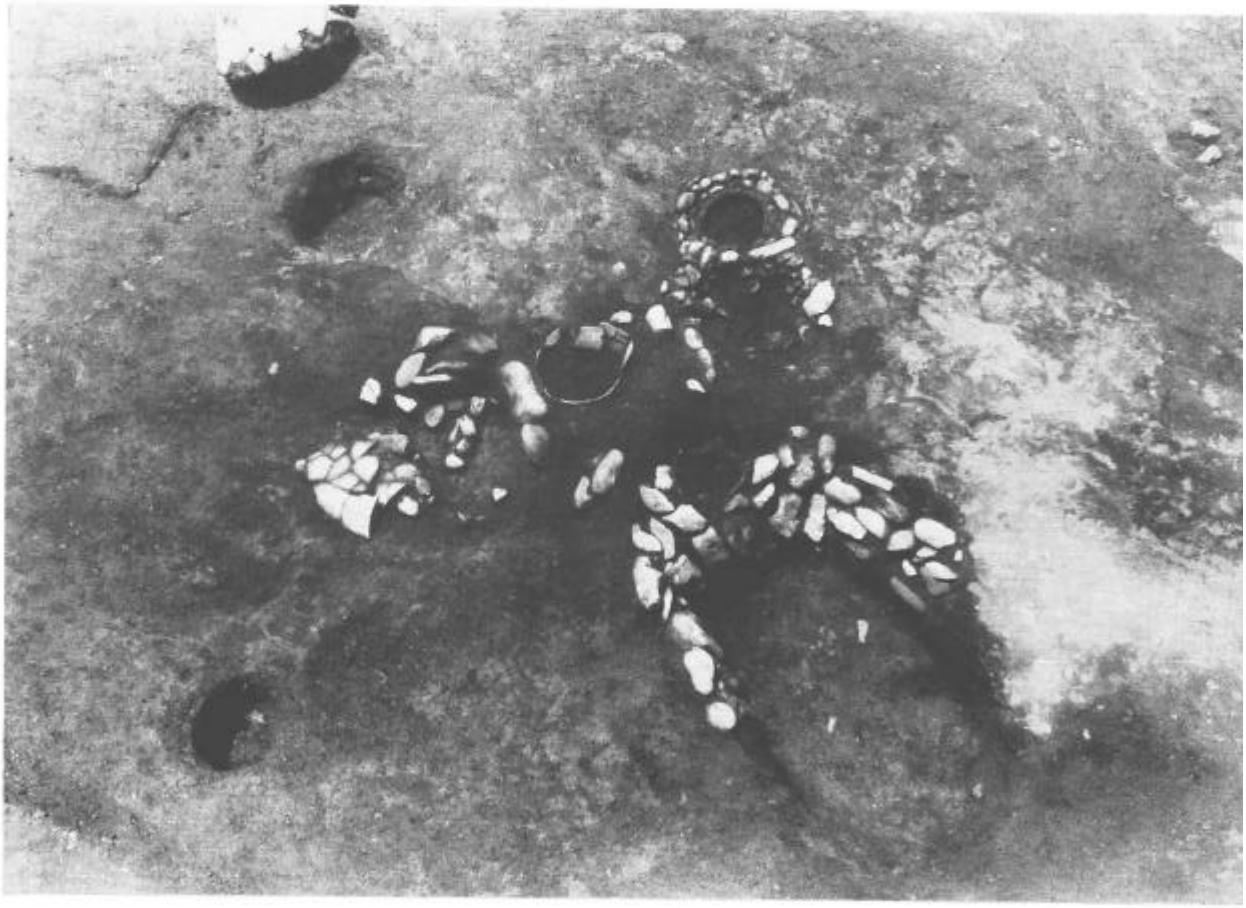


図版 9　上　SI 47 竪穴住居跡（東▶）

下　SI 51 竪穴住居跡（東▶）

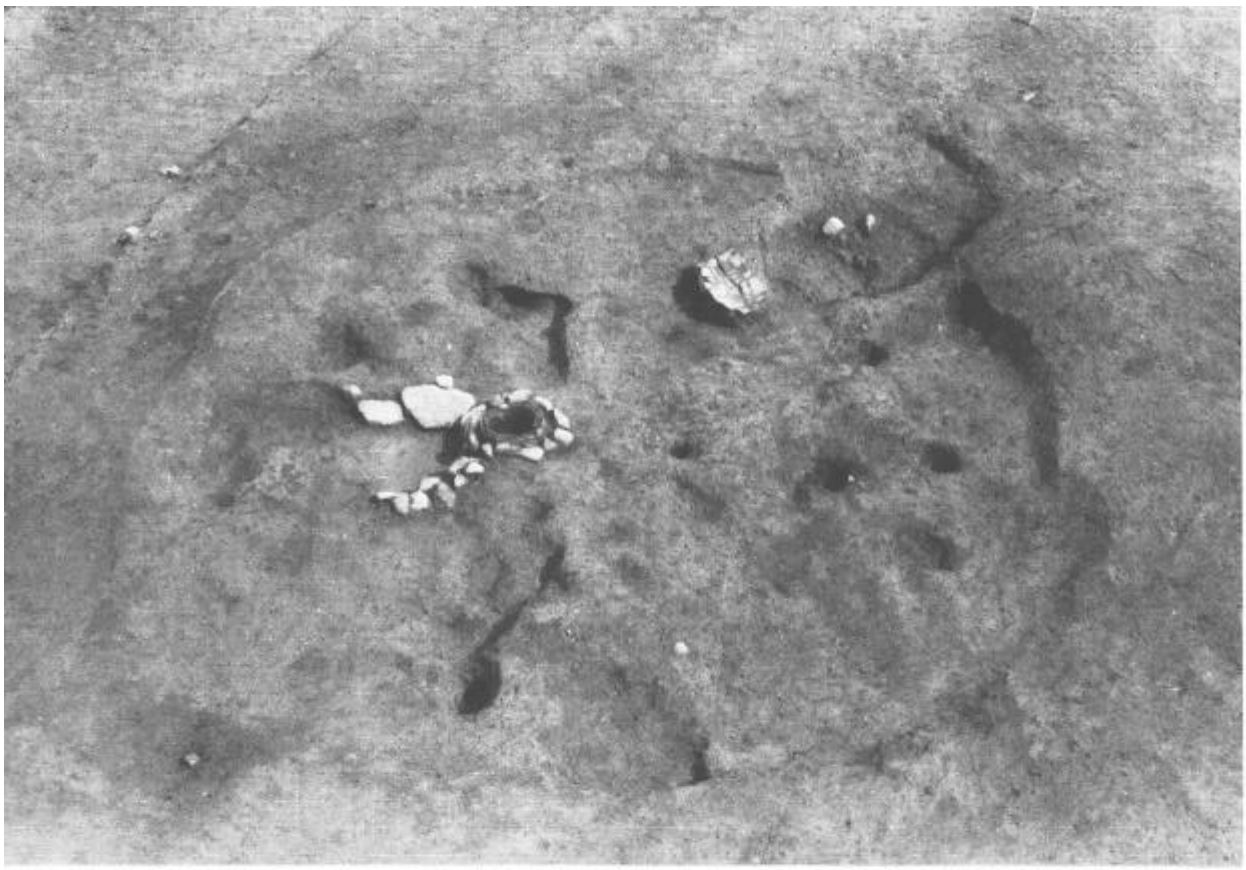
図版10　上　SI 37, 52 竪穴住居跡（東▶）

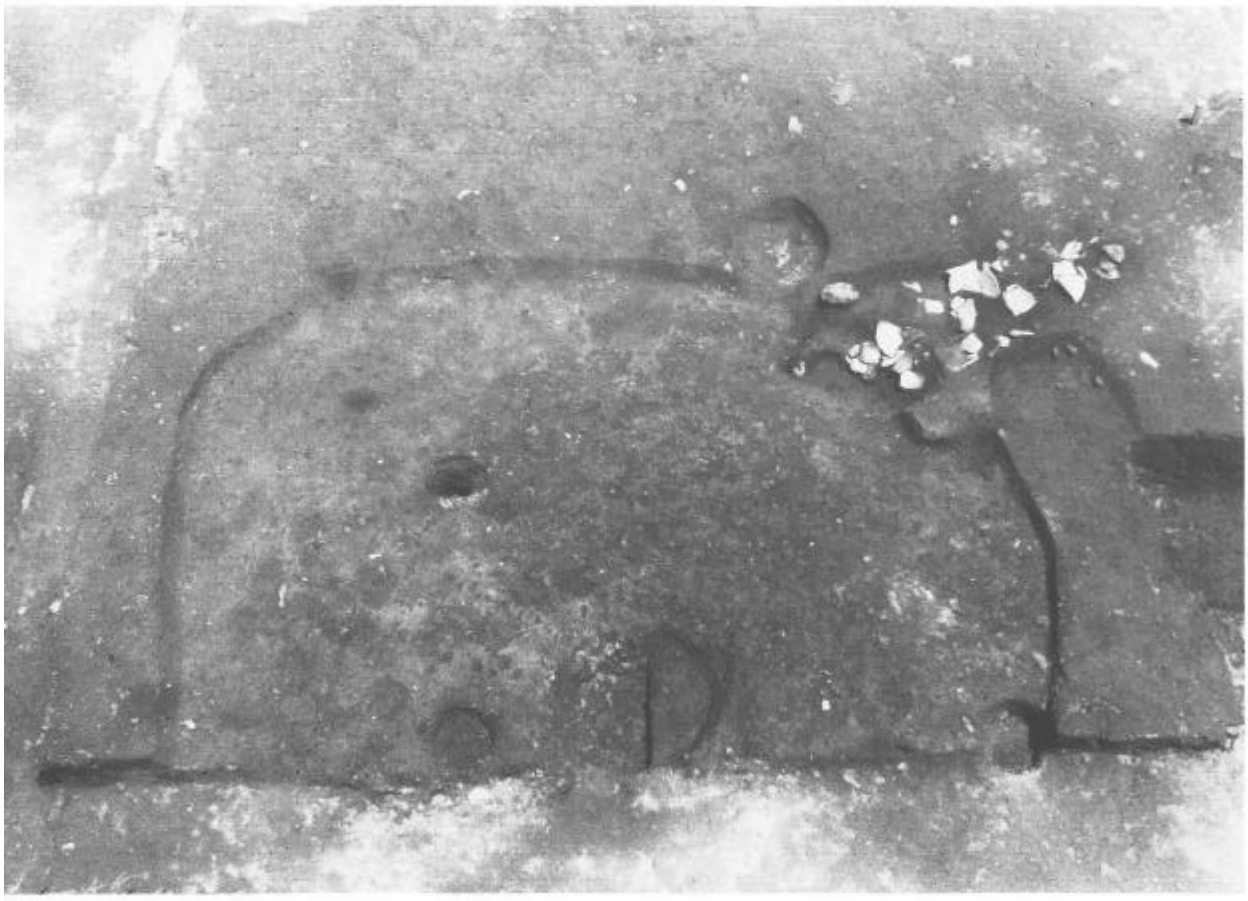
下　SI 52 遺物出土状況（西▶）



図版11　上　SI 54 竪穴住居跡（東▶）

下　SI 50, 55, 56 炉（南東▶）

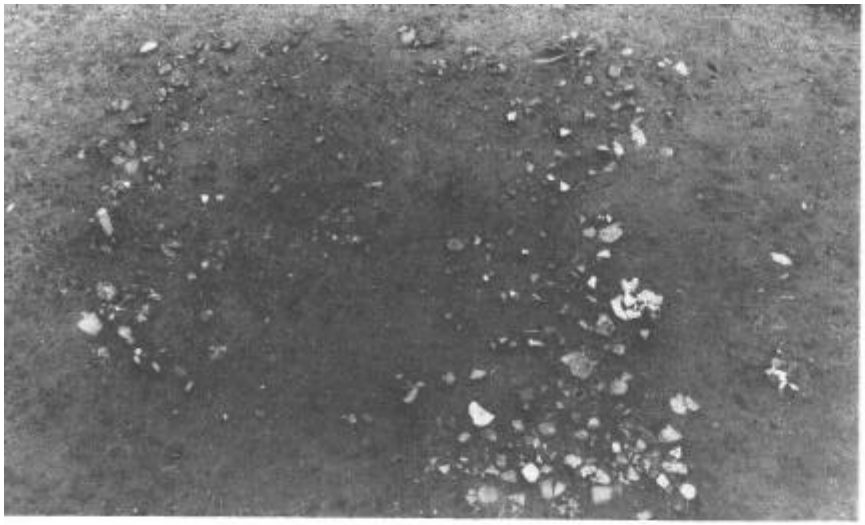


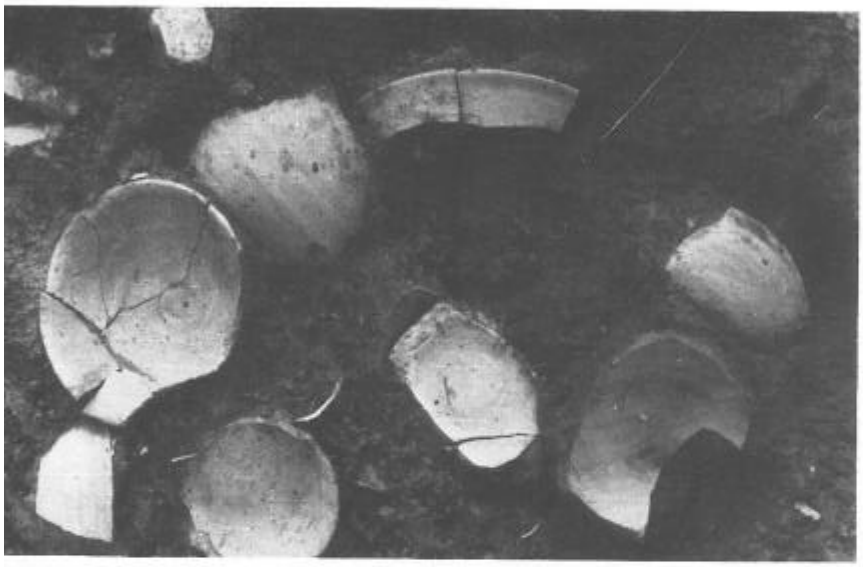


図版12　上　SI 59 竪穴住居跡（北▶）

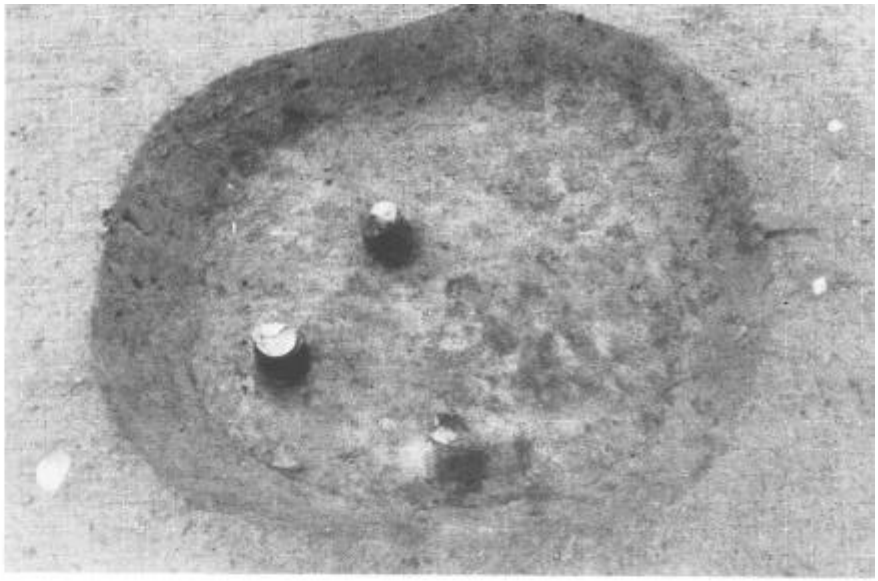
下　SI 08 竪穴住居跡（西▶）

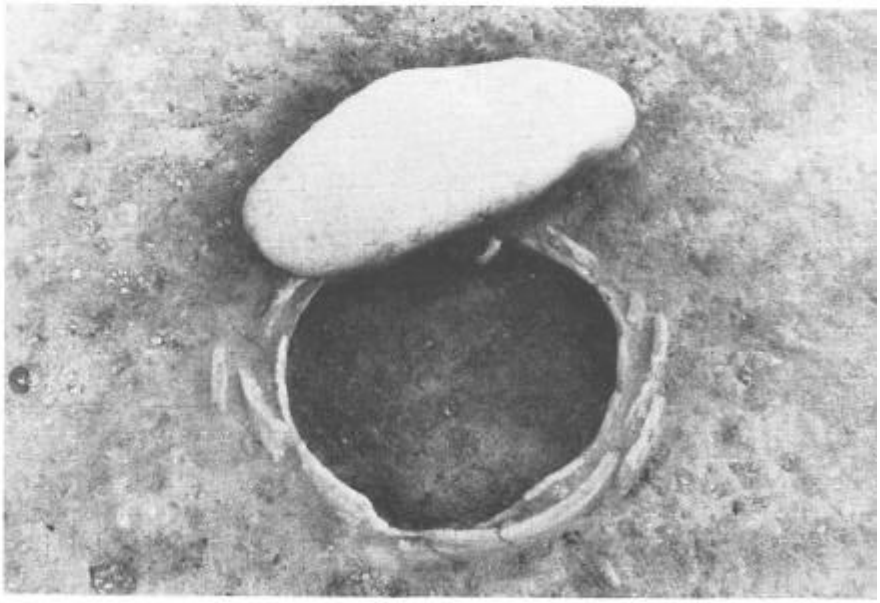
図版13　上　SK 16
竪穴住居跡
中　SI 40
遺物出土状況
下　SI 51
遺物出土状況





図版14　上　SK 16 遺物出土状況
中　同上
下　同上





図版15　上　SK 02

中　SI 10 カマド

下　SI 68 炉

III．桐木田遺跡

第1章　はじめに

第1節　調査に至るまで

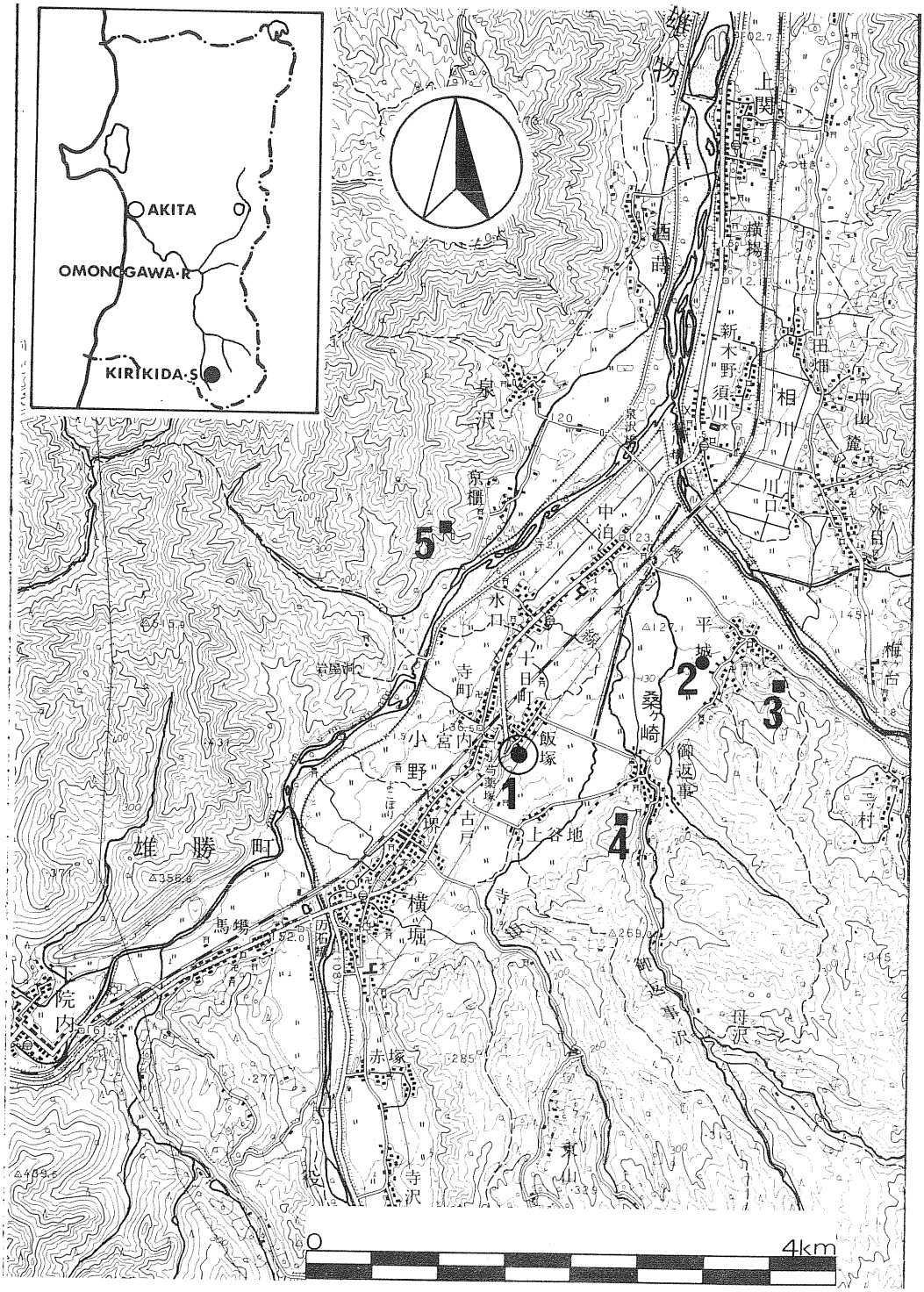
雄勝郡雄勝町に所在するいわゆる「桐木田井戸」は平安時代の歌人小野小町の使用した井戸跡と，古くから言い伝えられていた。昭和47年の山本博士の井戸跡鑑定でも，平安時代から見られる型式のものであるとされ，井戸跡の周囲に古代等の遺構の存在が予想されていた。しかし，この地域が昭和53年度より実施されている県営ほ場整備事業地域内にはいるため，秋田県教育委員会では昭和54年10月22日～11月1日，遺跡の性格及び範囲を確認する調査を行った。その結果，堀跡，柱穴などの遺構，中世末～江戸期に属する陶器，染付などの遺物が発見された。

このため，秋田県教育委員会では，工事に先立ち発掘調査を実施し，記録保存をはかり，今後の資料に資するものとした。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	桐木田遺跡
遺跡所在地	秋田県雄勝郡雄勝町小野字飯塚
調査期間	昭和55年7月3日～9月20日
調査対象面積	2,900 ㎡
調査面積	2,900 ㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	畠山憲司（秋田県教育庁文化課）
調査員	山田貞吉（平鹿町教育委員会）
調査補佐員	佐藤和弘
調査補助員	桑原隆，三嶋隆儀
事務補助員	佐々木恭子
調査協力機関	秋田県雄勝農林事務所土地改良課 雄勝町教育委員会
発掘調査参加者	小野田久孝，藤原和則，今幸太郎，太田三郎，今修三，築瀬善清，今貞助，築瀬清一，渡辺良市，今勝蔵，多田野庄蔵，竹内源次郎，柴田勝美，柴田進，樋口隆，小野田良子，小野田静子，佐々木葉子，藤原アチ，藤原ミネ子，藤原ミエ，藤原ミヤ，藤原雪子，小野垣キエ子，築瀬シズエ，小野垣

リエ，小野垣トキ，渡辺イヨ，金ユウ子，菅原さだ子，高橋サツ，東海林ミサ，金子恵美，



第1図　遺跡の位置

第２章　　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境（第１図）

横手盆地の最南端は雄物川の開析によってできた，東西１.５～２.０㎞，南北約10㎞の細長い平地となっている。この平地の東と西にはそれぞれ奥羽山脈，出羽丘陵の300～800ｍの山地がせまり，その西裾を雄物川が北流し，東裾はかつての役内川の跡と言われる低地が走る。

桐木田遺跡はこれによって平地中央部にできた自然堤防上に立地する。現況は水田と一部畑地で，雄物川からは東１㎞，国鉄奥羽本線横堀駅の北東1.1㎞の地点である。

第２節　歴史的環境

遺跡の所在する小野地区は，平安朝六歌仙の一人小野小町生誕の地の１つといわれ，これにまつわる多くの伝説が残っている。遺跡名ともなった桐木田井戸跡もその１つで，小町の庵の側にあり，小町が日常使用したものであるといわれ，地元有志により保存されている。そして昭和47年には井戸の研究者として知られる山本博氏に井戸の鑑定を依頼し，以下のような結果を得ている。（「雄勝町の歴史散歩」より）。

井戸構造年代鑑定書

１．秋田県雄勝郡雄勝町小野所在，石井年代について，その創掘を次の通り鑑定する。

イ．自然石（凝灰岩），乱石積，円形井筒

ロ．口径50～55㎝

ハ．口縁部より水面まで1.６ｍ

ニ．総深3.９ｍ

ホ．口縁部より約30～40㎝下において，直径を増し，径70～80㎝となり，そのままで底部にいたる。

ヘ．井壁の石積みは創掘当時のままと認める。

２．右の井筒構造は平安初期より現われたもので，小野の石積み井筒もその１つに当るものであると認める。

右の通り鑑定する。

昭和47年８月28日

大阪学院大学教授

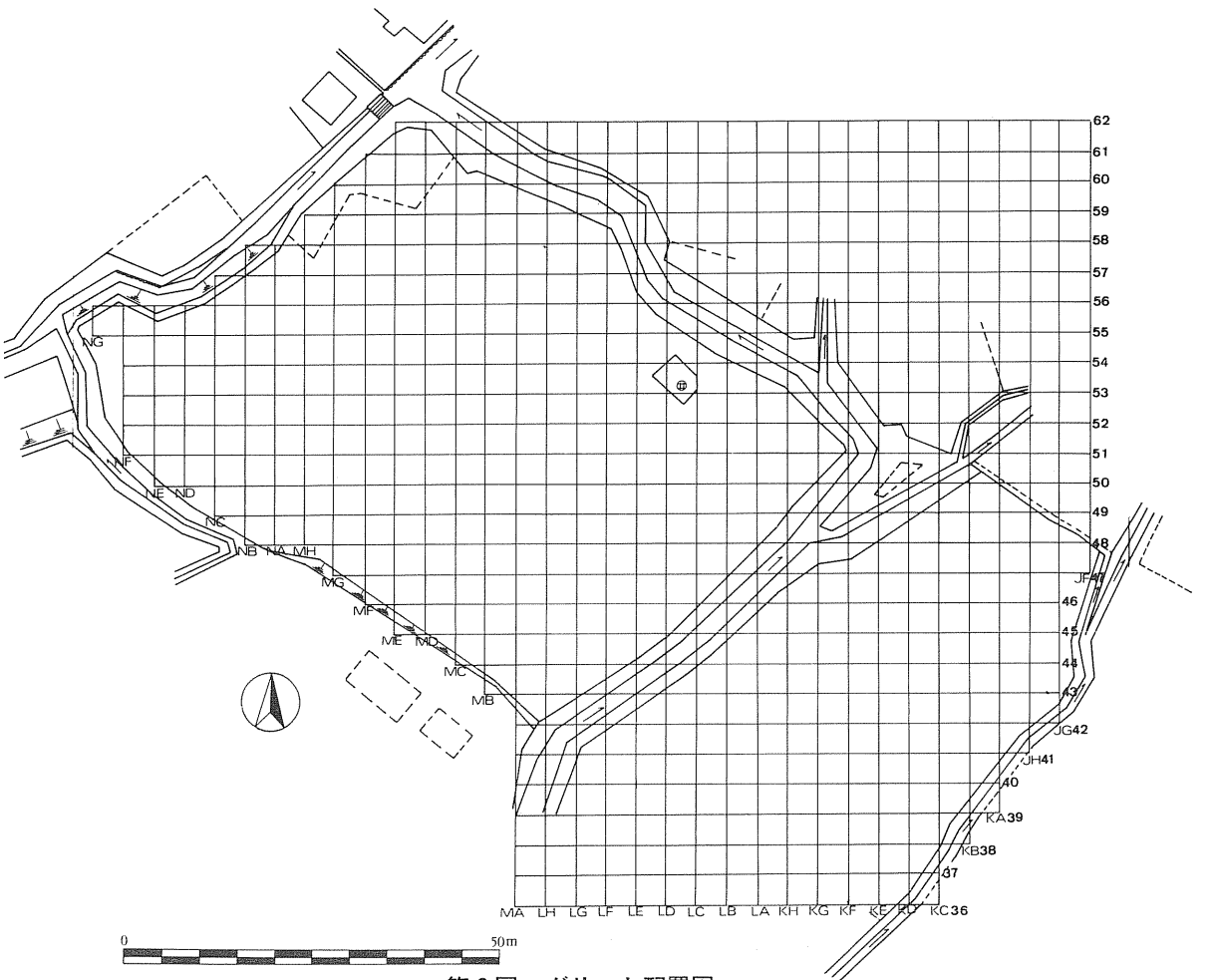
文学博士　山本　博

秋田県雄勝郡雄勝町小野遺跡　　保存会　御中

第３節　周辺遺跡

本遺跡の周辺に存在する遺跡のうち，中世に属すると思われるものは比較的多い。半径２km以内の城館では山城である小野城跡（１図５），御返事城跡（１図４），館跡（１図３）の他，平城である鵜沼城跡（１図２）があり，役内川下流から奥羽山脈西麓沿いには多くの板碑群が存在する。

しかし，近世に入ると調査例もほとんどなく，わずかに鵜沼城跡において，江戸時代前半のものと思われる掘立柱建物群や，井戸跡などが知られているにすぎない。



第２図　グリット配置図

第３章　　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

明治時代初期の地籍図を見ると，井戸跡の東方約50ｍに，長さ約50～60ｍで西に開くコの字形の堀跡らしきものがあるのがわかる。この堀跡はそのまま西に延びて遺跡全体を長方形に囲むようにも見えるが，中央部を南北に走る水路などによりかき消されている。遺跡はこの地籍図が作成された段階で既に水田であり，現在は水田と一部畑地となっている。

遺跡全体での高低差はほとんどないが，南西側がわずかに高く，中心部の標高は約136ｍを測る。

遺跡の層序は，第１層黒褐色耕作土（15～20cm），第２層黒褐色土（10～15cm），第３層暗褐色土（10～20cm），第４層褐色地山土となる。このうち，遺物は２，３層中にあり，遺構の明確なプランは，地山直上でわかる。

遺物は総じて少なく，主に遺構の覆土中から発見される。

遺構は堀跡及び溝の内側５ｍ前後の範囲には検出されず，Ｉ区中央西部に柱穴群が集中する。柱穴群中に土壙，竪穴遺構はほとんどなく，その縁辺に見られる。

第２節　調査の方法

発掘にあたり，４ｍ×４ｍグリッドによる調査方法をとることとし，座標軸にあたる東西の基線は２桁の数字，南北の基線はアルファベット２文字の組み合わせを用いた。すなわち，東西の場合，西に４ｍ行くごとに数字が１つずつ増す。（…38，39，40，41…）。南北の場合は南から北に４ｍ行くごとにアルファベット２文字のうち１桁目の文字がＡ～Ｈまで変わり，（…ＭＡ，ＭＢ，ＭＣ，ＭＧ，ＭＨ…），32ｍ行くと２桁目の文字が変わる（…ＭＧ，ＭＨ，ＮＡ，ＮＢ…ＮＨ，ＯＡ…）。

Ｉ区ほぼ中央部に任意の基準杭を打ち，これをＭＡ50とし，東西，南北の基線はこの点で磁北を求め，これに従った。それぞれのグリッドの名称は４ｍ×４ｍグリッドの南東隅の交点座標名をそのまま使用した（ＭＢ51，ＬＧ45…）。

第３節　調査経過

Ｉ区の発掘調査は，７月28日から９月22日まで実施した。

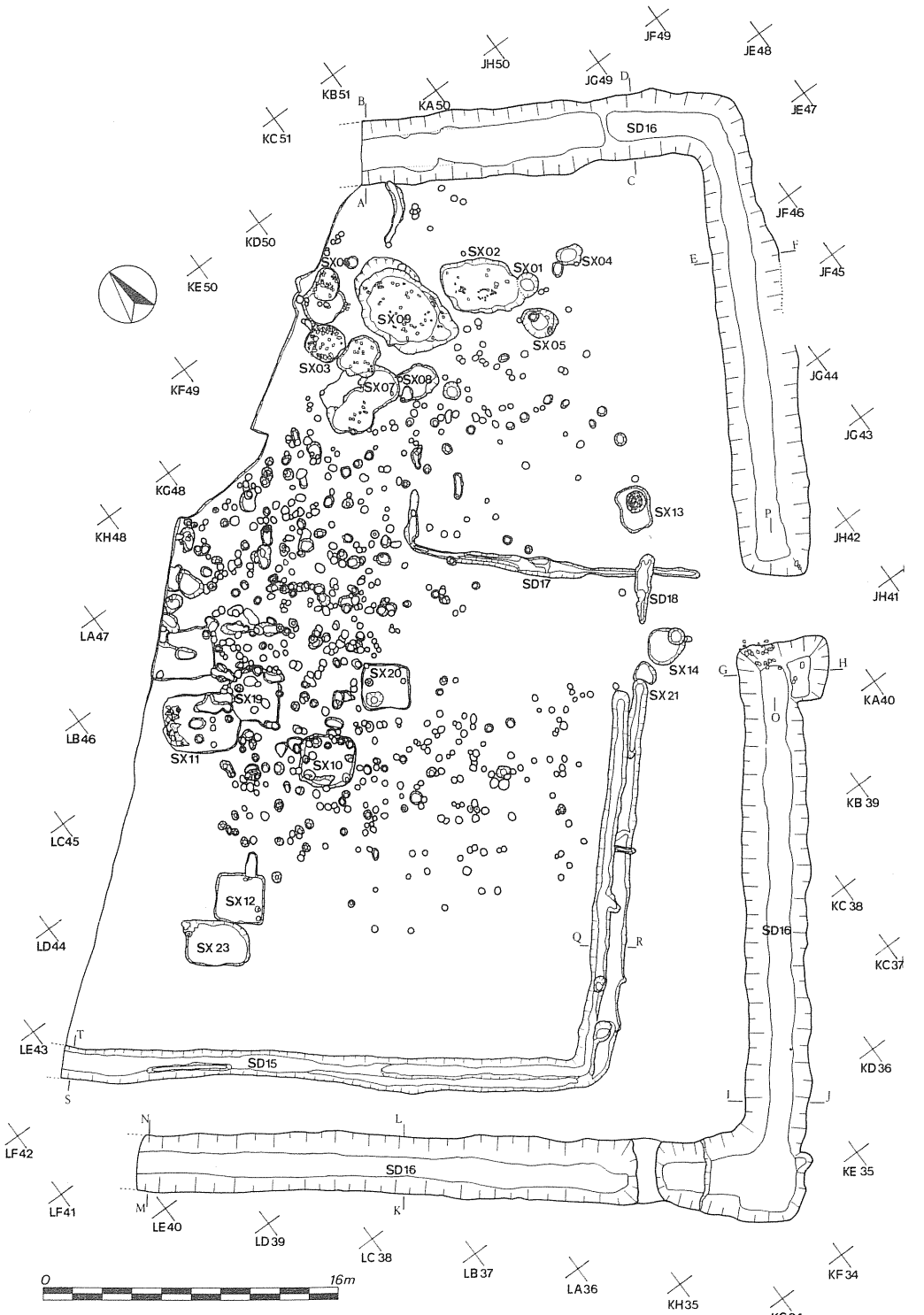
調査区はあらかじめ重機で表土を除去していたが，柱穴等の遺構が明確でないため，結局は地山直上まで全面を掘り下げることにした。７月30日，調査区中央部で方3.5ｍ前後の竪穴状

落ち込み，東部で幅４ｍの堀を検出。堀（ＳＤ16）はほぼ直線で，北北東―南南西の方向で続いている。８月１日，調査区北部でＳＫ01，02の土壙を検出。これらの土壙は，不定円形～楕円形を呈し，埋土中に挙大～半人頭大の河原石を多く含んでいたが，それほどまとまりのないものであった。２日からＳＸ03，06，ＳＫ07～09等の遺構を検出。ＳＸ03，06は集石遺構であった。４日ごろから調査区西部を中心にして径30cm前後の柱穴が現われ始めたが，これらは切り合いが激しい上に，東側ほどプランの確認が困難な状況にあった。

８月８日までに，ＳＤ16の北辺及び東辺を検出。北東部で直角に曲がっており，東辺は50ｍ以上続くことがわかった。また，調査区南部では，幅約２ｍの溝（ＳＤ15）がＳＤ16の東辺に直交するようにあり，ＳＤ16の手前約８ｍで北に直角に折れ曲っていることも判明した。このＳＤ15は断面の精査等で新旧２時期あることもわかった。19日からＳＤ15，16や柱穴，土壙等の覆土除去作業を開始。その結果，ＳＤ16東辺のほぼ中央部に上面幅約3.5ｍの土橋が存在することがわかった。

８月29日から残っている調査区南側の表土剝ぎ及び遺構の検出を行ない，ＳＤ16が，調査区東北隅屈折部から約60ｍ南南西で，西北西に直角に曲がることを確かめた。

９月に入り，柱穴の掘り上げ，堀，溝等の断面の実測，写真撮影を行なったが，作業の途中で，雄勝農林事務所から，９月いっぱいの調査を10月まで伸ばし，水路の西側も（これをII区とした），1,600㎡ほど調査してほしい旨の依頼があり，協議の結果，原因者負担分のみでこれを行うことになった。このため，９月10日からはII区の表土剝ぎも併行して行うこととし，Ｉ区の実測，写真撮影を完全に終了したのは９月20日であった。


JF49
JE48
JH50
JG49
KB51
KA50
JE47
KC51
SD16
JF46
KD50
SX02
SX01
SX04
JF45
KE50
SX06
SX09
SX05
SX03
SX07
SX08
JG44
KF49
JG43
KG48
SX13
KH48
JH42
SD17
SD18
JH41
LA47
SX14
SX20
SX21
KA40
SX19
LB46
SX11
SX10
KB39
LC45
SX12
KC38
SX23
LD44
SD16
KC37
LE43
SD15
KD36
LF42
SD16
KE35
LF41
LE40
LD39
LC38
LB37
LA36
KF34
KH35
KG34
0
16m

第3図　発見遺構全体図

第4章　調査の記録

第1節　発見遺構

今回の発掘調査で発見された遺構は堀1条，土橋1基，溝3条，竪穴状遺構5基，土壙9基，石組・集石遺構3基の他，柱穴多数である。柱穴は柱筋の通るものもわずかにあり，掘立柱建物になると思われるが，現在までのところ明確な建物として図示できるものはない。

ここでは堀とその内側に堀に沿って構築されている溝についてのみ報告したい。

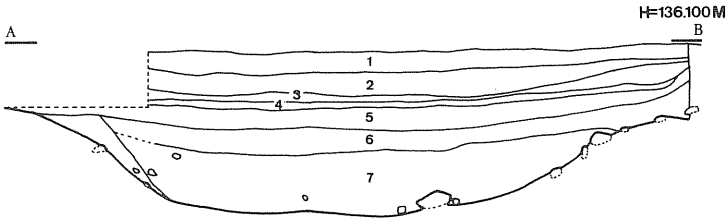
1）**ＳＤ16　堀跡**（第3，4，5，6図，図版1，2，3，4）

調査区の西辺を除く各辺の端で発見された堀跡である。北辺―東辺―南辺と西に開くコの字である。北辺で長さ20m，東辺で60m，南辺で36mほど確認された。上幅3～3.5m，下幅1.3～1.7m，深さ約1mを測る。4～6図に各部の断面図を示してある。東辺のほぼ中央に上幅3.6m，下幅6m，高さ1mの土橋がある。この部分，堀としては掘られないで，最初から土橋としてあるものである。堀の埋土中からは江戸時代初期と思われる染付，木製椀，櫛などがわずかに出土しているが，後者は遺存状態が良くなかった。

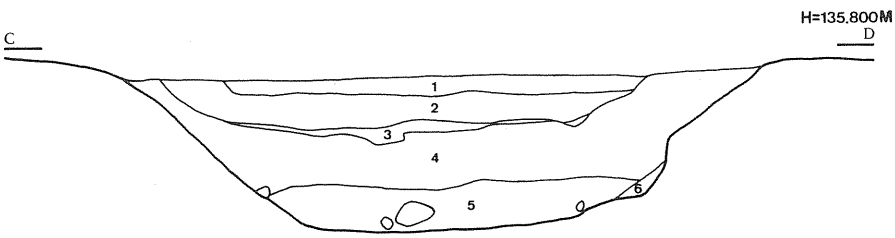
2）**ＳＤ15　溝**（第3，7図，図版5，6）

堀の内側に堀と並行するようにしてある溝である。堀との間隔は南辺で約3m，東辺で6mで，東辺のそれは土橋の前までしか掘られていない。南辺で30m，東辺で21.6m検出された。

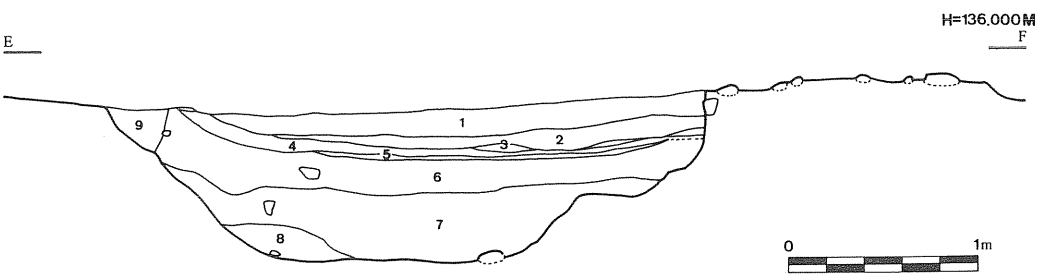
ＳＤ15はほぼ同じところに2度掘られている。Ａが新しくＢが古い。Ａは上幅1.5m，下幅0.5m，深さ約0.4mで，Ｂは上幅1.7m，下幅0.6m，深さ0.9mとＡよりも規模が大きい。埋土中からはわずかに染付などが出土している。



1層　黒褐色土（10YR3/2）　粒子が細かく，若干の粘性があり，センイ質を含んでいる一様な土質土色である。
2層　暗褐色土（7.5YR3/3）　粒子は第1層より粗く，粘性はない。1層より細かいセンイ質をう，遺物は含まれない。
3層　暗褐色土（10YR3/4）　粒子が粗く粘性は弱い，遺物は見られない。
4層　黒色土（10YR1/1）　非常に硬い金属の酸化質土壌と暗褐色土（7.5YR3/4）の粒子の粗い土とが混じり合っている。粘性はなく，遺物その他の包含物は認められない。
5層　暗褐色土（10YR3/3）　若干砂質性を帯び粘性がある。遺物は見られない。
6層　黒褐色土（7.5YR3/2）　砂質土壌で遺物は含まれないが，礫が混入している。
7層　黒褐色土（10YR3/1）　6層とほぼ同じ，礫はさらに多くなる。

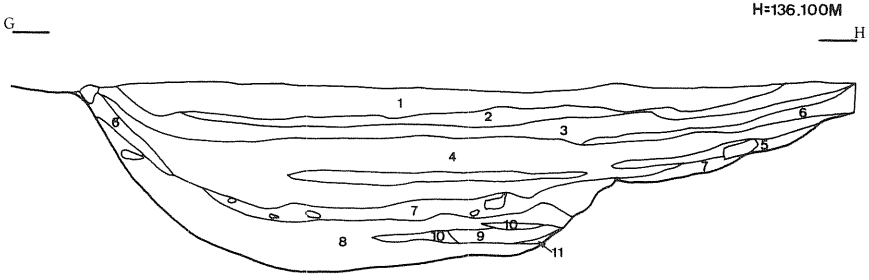


1層　暗褐色土（7.5YR3/3）　粒子が細かく粘質の土壌，少量の炭化物と小礫を含む。
2層　黒褐色土（7.5YR3/2）　1層より黒っぽくやわらかい，炭化物は含まれるが礫はほとんどない。
3層　暗褐色土（10YR3/4）　粒子の大きな砂質状の土壌，少量の炭化物を含む。
4層　黒褐色土（10YR3/2）　粒子が非常に細かくやわらかい粘土層，炭化物あり。木片（枝状のもの）が堆積したようになっている。
5層　黒色土（10YR3/1）　4層と同様，木片は少なくなり，大きな河原石が含まれる。

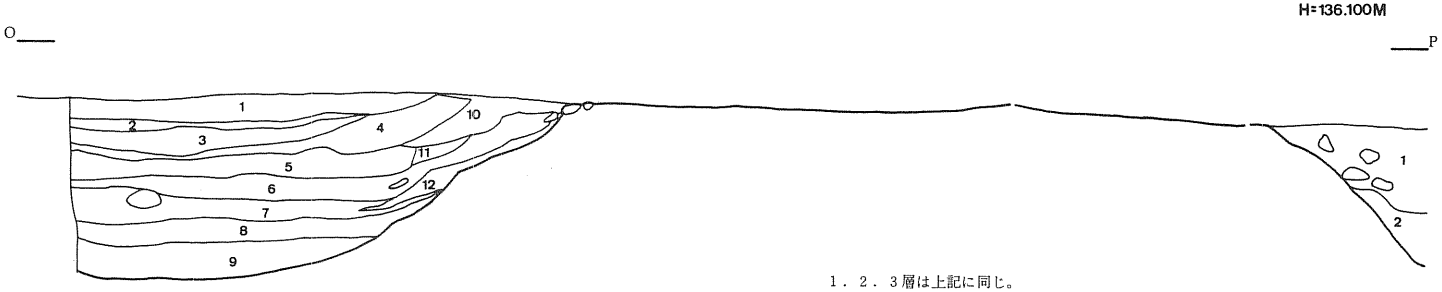


1層　黒褐色土（10YR3/1）　粒子が細かく，若干粘性がある。炭化物小礫を少量含む。
2層　黒褐色土（10YR3/2）　粒子は細い，炭化物はないが小礫を含む。
3層　暗褐色土（7.5YR3/3）　粒子が細く，砂が混り合っている。遺物はなし。
4層　黒褐色土（10YR3/2）粒子が　細かく，砂質土壌が混入している。
5層　黒色土（10YR2/2）　粒子が細く粘性がある，また植物センイ質が混じっている。炭化物等は見られない。
6層　黒色土（10YR3/1）　粒子が細く粘性が多少ある，またセンイ質が混入している。
7層　黒色土（7.5YR3/1）　粒子が細く粘性が強い，礫が混入している。遺物はない。
8層　黒褐色土（7.5YR3/1）　粒子が細く粘性がある。小礫が混入している。
9層　黒褐色土（7.5YR3/2）　粒子が粗く，砂質土壌である。若干炭化物を含んでいる。

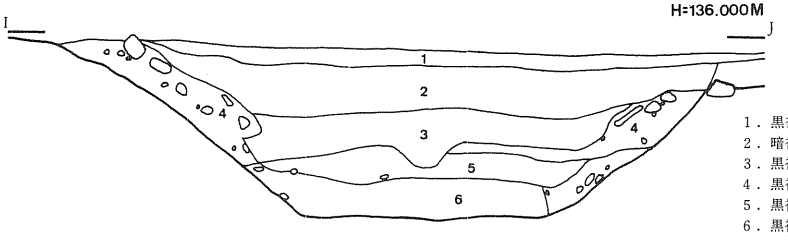
第4図　SD16堀跡断面図



1．黒褐色土（10YR3/2）　しまっていて粒子が細かい。小礫，炭化物を若干含む。
2．暗褐色土（10YR3/3）　砂と土とがまじり合っているが砂の方が多い。礫，遺物は見られない。
3．黒褐色土（10YR3/2）＋黒褐色土（10YR3/3）　第1層に類似する。
4．黒褐色土（10YR3/3）　粒子が比較的あらく小礫が含まれる。
5．黒褐色土（10YR3/2）砂質土。第1層に類似している。
6．黒褐色土（7.5YR3/2）　砂質土。粒子の大きさは一定でない。
7．暗褐色土（10YR3/4）　砂質土。小礫を含む。粒子はあらい。
8．黒褐色土（10YR3/2）　非常に粒子が細かく粘性がある。
9．褐色土（7.5YR4/4）　砂質土。小砂礫を含み木片等の遺物を含む。
10．黒色土（10YR2/1）　砂質土。粘質土が混入し，弱若粘性がある。
11．黒褐色土（7.5YR3/1）　非常に粒子の細かい粘質土。



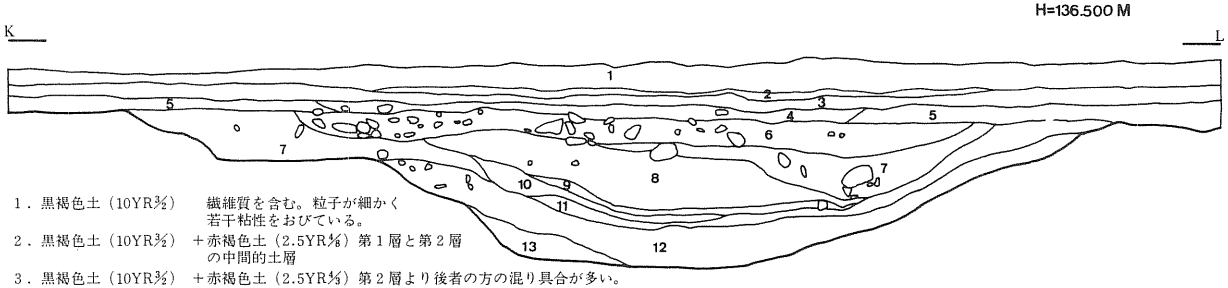
1．2．3層は上記に同じ。
4．褐色土（7.5YR4/4）　砂質土。粒子が大きくザラザラしている。
5．6．7．8．9．10層は，上記4．5．7．10．8．1層にそれぞれ同じ。
11．暗褐色土（10YR3/4）砂砂質土。粒子が大きく，しまりがない。
12．にぶい黄褐色土（10YR5/3）　砂質土。一様な土質。しまりがなくザラザラしている。



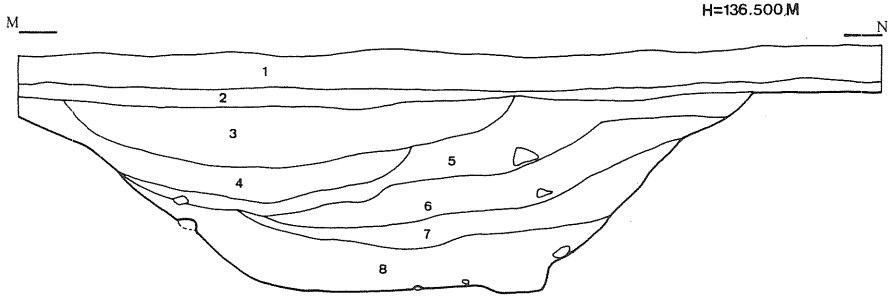
1．黒褐色土（10YR3/2）　粒子が比較的粗くぼろぼろする。炭化物を少々含む。
2．暗褐色土（10YR3/3）　1層より粒子が細かくなり粘性が増し柔かくなる。炭化物を少々含む。
3．黒褐色土（10YR3/2）　2層より粘性を増す。少々の炭化物及び礫を含む。
4．黒褐色土（10YR3/2）　2層程度の粘性に砂質状のものが混りざらざらしている。大小様々の多量の礫を含む。
5．黒褐色土（10YR3/2）　柔かい粘土層。少量の炭化物を含む。木片（枝状のもの）が堆積したようになっている。
6．黒褐色土（10YR3/2）　5層よりやや黒っぽい。

第5図　SD16堀跡断面図

0　1m



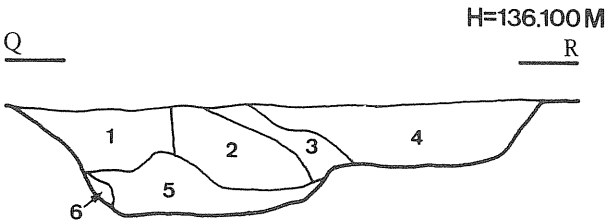
1．黒褐色土（10YR$\frac{3}{2}$）　繊維質を含む。粒子が細かく若干粘性をおびている。
2．黒褐色土（10YR$\frac{3}{2}$）＋赤褐色土（2.5YR$\frac{4}{6}$）第1層と第2層の中間的土層
3．黒褐色土（10YR$\frac{3}{2}$）＋赤褐色土（2.5YR$\frac{4}{4}$）第2層より後者の方の混り具合が多い。
4．暗褐色土（10YR$\frac{3}{4}$）　酸化物をかなり多く含んでいる。
5．暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{2}$）　酸化物を多少含み，砂質土である。
6．暗褐色土（10YR$\frac{3}{4}$）　砂質土。粒子はかなり大きく炭化物を含む。小石も多少含む。
7．暗褐色土（10YR$\frac{3}{4}$）　第6層よりも粒子は小さく粘性をおびている。
8．暗褐色土（10YR$\frac{3}{3}$）＋赤褐色土（2.5YR$\frac{4}{6}$）弱粘質土。酸化物，炭化物を含む。
9．黒褐色土（10YR$\frac{3}{2}$）　粘質土。粒子はかなり細かい。しまっていて酸化物を含む。
10．黒褐色土（10YR$\frac{3}{2}$）　粘質土。第9層よりも酸化物を多く含む。
11．黒褐色土（10YR$\frac{3}{2}$）　弱粘質土。酸化物，砂質土を多少含む。
12．暗褐色土（10YR$\frac{3}{3}$）　やや砂質。ぼそぼそする。所々に黄明褐色の砂質土が含まれる。
13．暗褐色土（10YR$\frac{3}{4}$）　弱粘質土。酸化物，炭化物を多く含む。



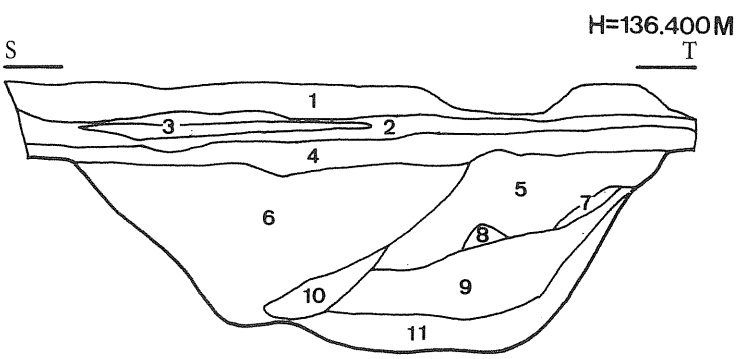
1．黒褐色土（7.5YR$\frac{3}{2}$）　硬いがぼろぼろとしてもろい。
2．黒褐色土（10YR$\frac{3}{2}$）　砂質土でサラサラしている。小さい礫や酸化物が混っている。
3．黒褐色土（7.5YR$\frac{3}{4}$）　砂質土と粘質土が混っている。大小の礫を比較的多く含み炭化物も多少含まれる。
4．暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{4}$）　砂質土，炭化物を含む。
5．暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）　粒子の小さな砂質土。しまりがなくサラサラしている。
6．黒褐色土（10YR$\frac{3}{2}$）　砂質土と粘質土が混り合っている。繊維質や酸化物，小礫などを含む。
7．黒褐色土（10YR$\frac{3}{2}$）　粘質土。酸化物を含む。
8．黒色土（10YR$\frac{3}{1}$）　粘質土。最下層に小礫を含む。しまっている。

第6図　SD16堀跡断面図

0　1m



1層	黒褐色土（7.5YR3/2）	ぼそぼそしてもろい。
2層	暗褐色土（7.5YR3/3）	上層はしまっているが，下層はやわらかい。
3層	褐色土（7.5YR4/6）	やや粘性をおびる。酸化鉄，砂質土などを含む。
4層	褐色土（7.5YR4/4）	弱粘質土，しまりがない。炭化物を少々含む。
5層	暗褐色土（7.5YR3/4）	しまりがよい。褐色砂質土が混っている。
6層		地山（黄褐色土＋明赤褐色土）と5層が混入している。



1層	耕作土　暗褐色土（10YR3/3）	
2層	明赤褐色土（5YR5/6）	しまりがよい。酸化鉄を多く含む。
3層	明赤褐色土＋暗褐色土	酸化鉄を多く含む。
4層	黒褐色土（10YR3/2）	酸化鉄の方の量が多い。
5層	黒褐色土（7.5YR3/2）	ぼそぼそしてもろい。
6層	暗褐色土（7.5YR3/3）	弱粘質土，酸化鉄を多量に含む。
7層	黒褐色土（7.5YR3/2）	砂質土を含む。
8層	黒褐色土（7.5YR3/2）	酸化鉄を少々含む。
9層	暗褐色土（7.5YR3/4）	しまりがよい。
10層	暗褐色土（7.5YR3/3）	しまりがよく，砂質土を含む，酸化鉄を含む。
11層	暗褐色土（7.5YR3/4）	9層よりしまりがよく，褐色土（砂質土）が混っている。

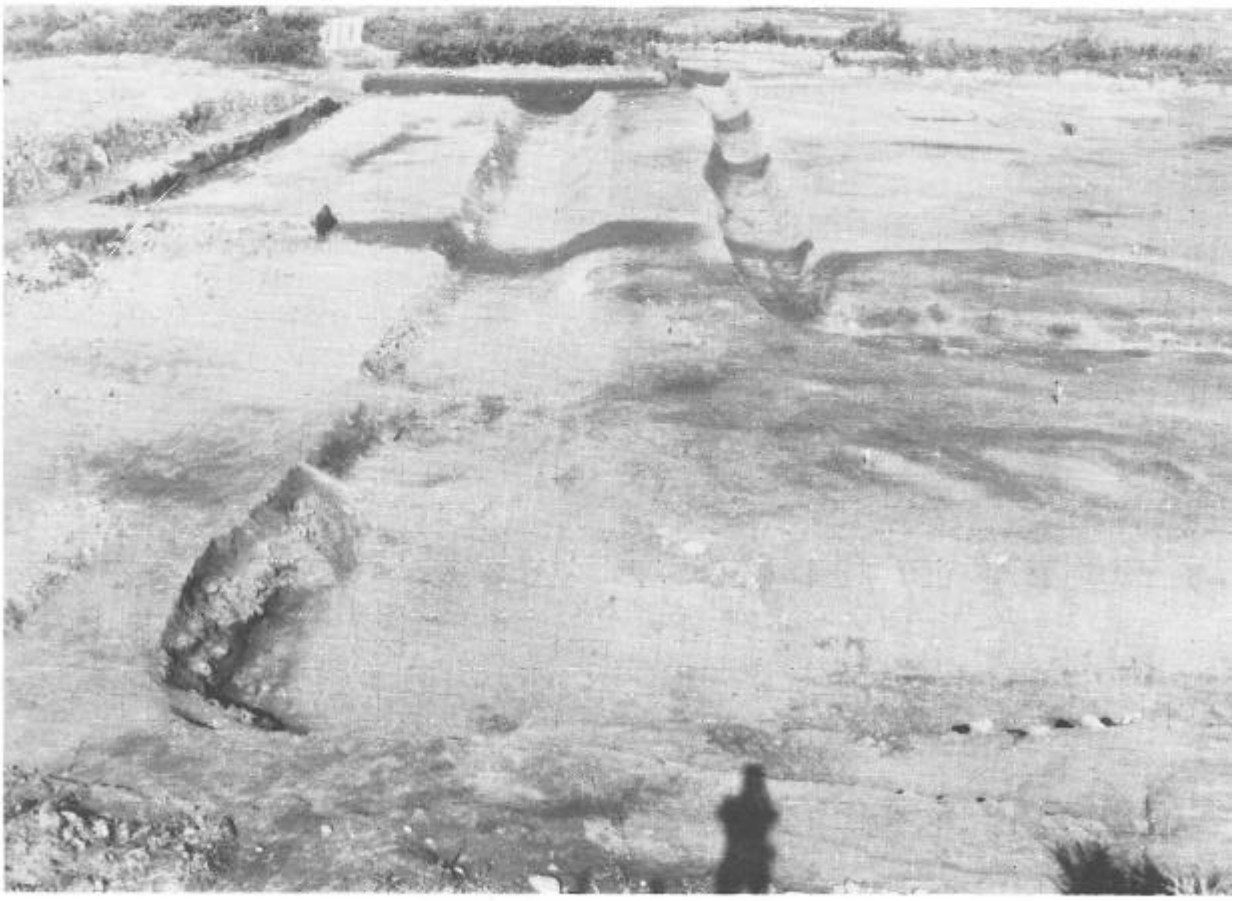
第7図　SD16溝跡断面図

第5章　ま　と　め

今回の調査は，最初Ⅰ区のみ2,900㎡の調査予定であったが，途中から変更になりⅡ区も調査することになった。このため，建物の精査等が十分でないまま，Ⅱ区に主力を注ぎ込まざるを得ないような状況であった。

Ⅱ区の調査の結果，Ⅰ区で発見した堀は１辺約50～60ｍの台形に巡ることが明らかとなった。堀の中には掘立柱建物をはじめ，竪穴状土壙，土壙などの遺構が，それぞれに切り合いながら多く分布していた。また，いわゆる「桐木田井戸」もこの堀の北西隅に位置することが判った。

堀をはじめ土壙，柱穴などの埋土中から発見される遺物はほんの一部に中世陶器と思われるものもあったが，大部分は江戸時代に入ってからのものであり，古代に属するものは皆無であった。従って，桐木田遺跡は中世での生活もあったかと思われるが，江戸時代初期の遺跡であるとするのが最も妥当と考えられ，少なくとも「桐木田井戸」が古代のものであるとする根拠は全く失われたことになる。



図版1　上　一区全景（南▶）

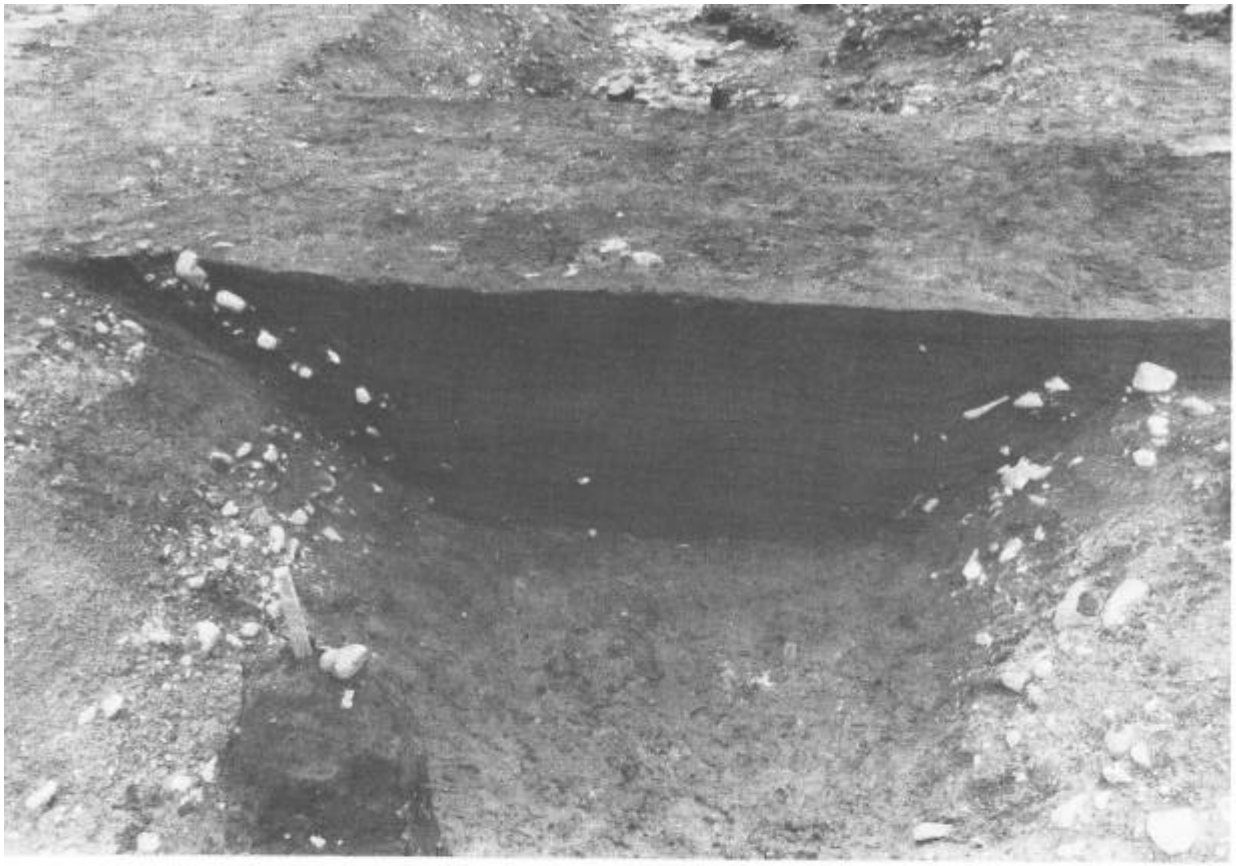
下　SD 16 堰（南東▶）

図版 2　上　SD 15, 16（北西▶）

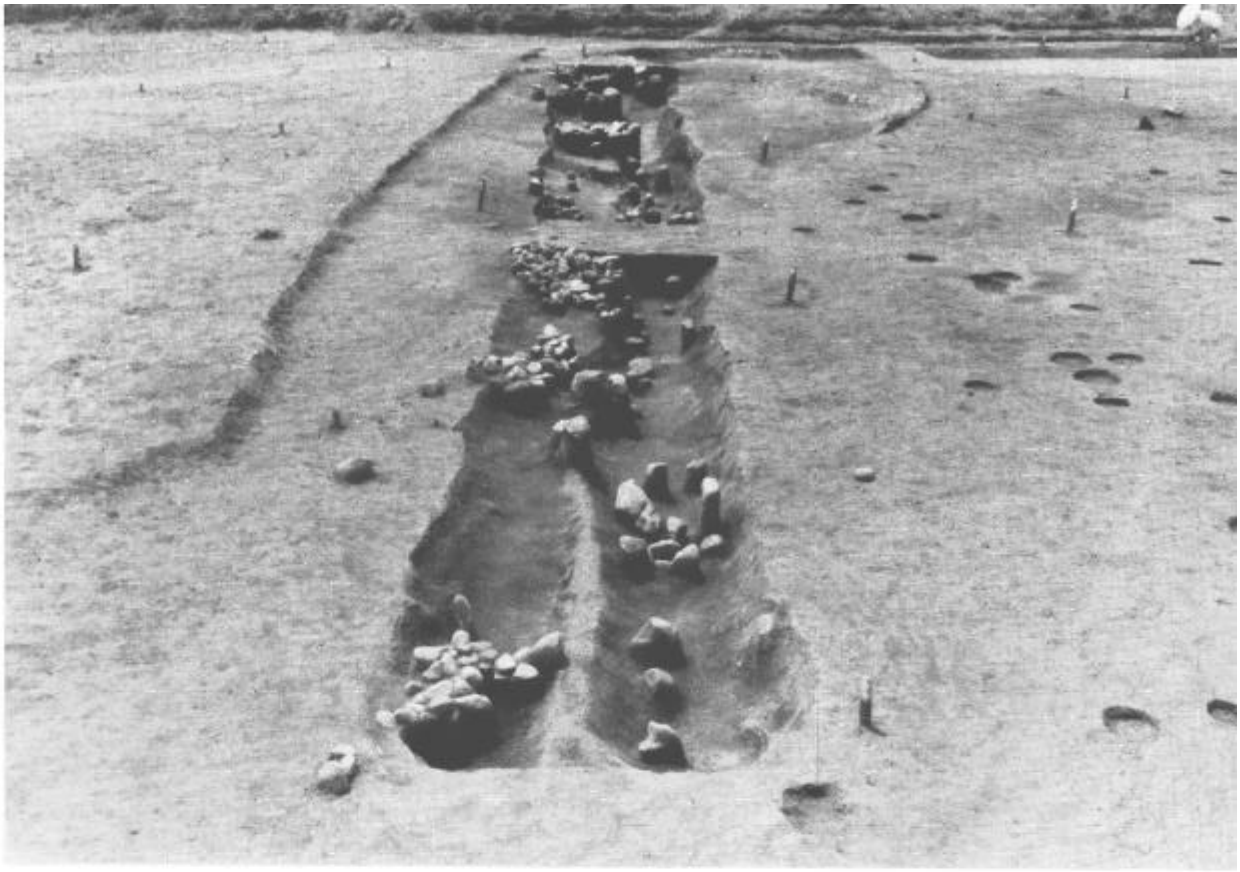
下　SD16 堀（南西▶）

図版 3　上　SD 16 堀断面

下　SD 16 堀（北東▶）



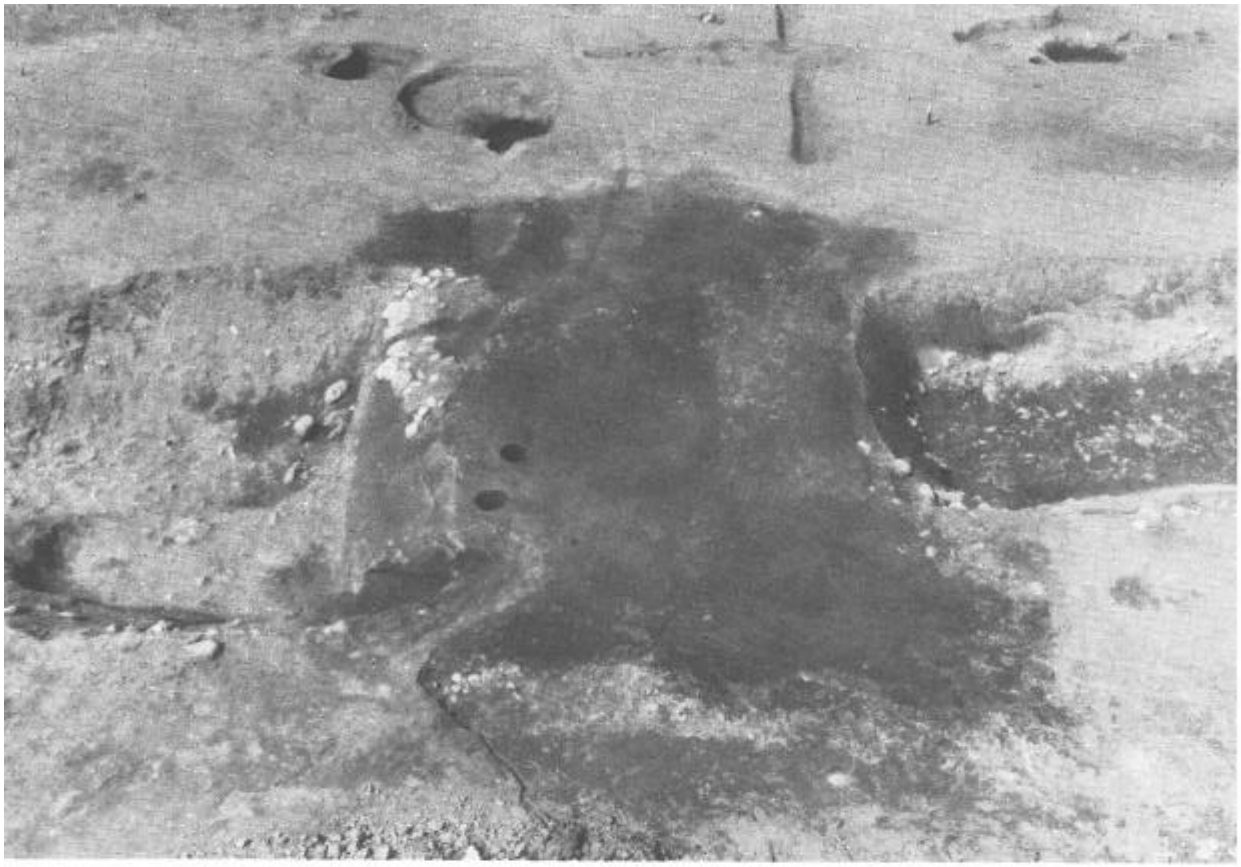
図版 4　上　SD 16 堀断面
中　同上
下　同上

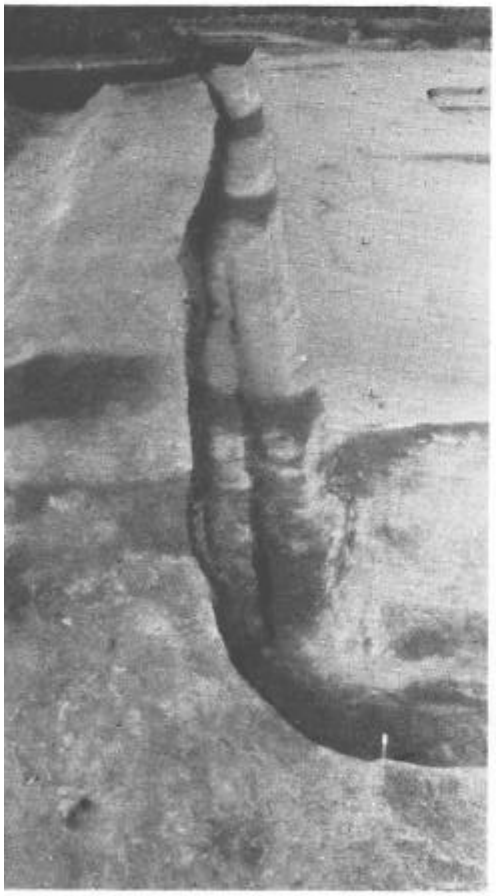


図版 5　上　SD 15　A B（北東▶）

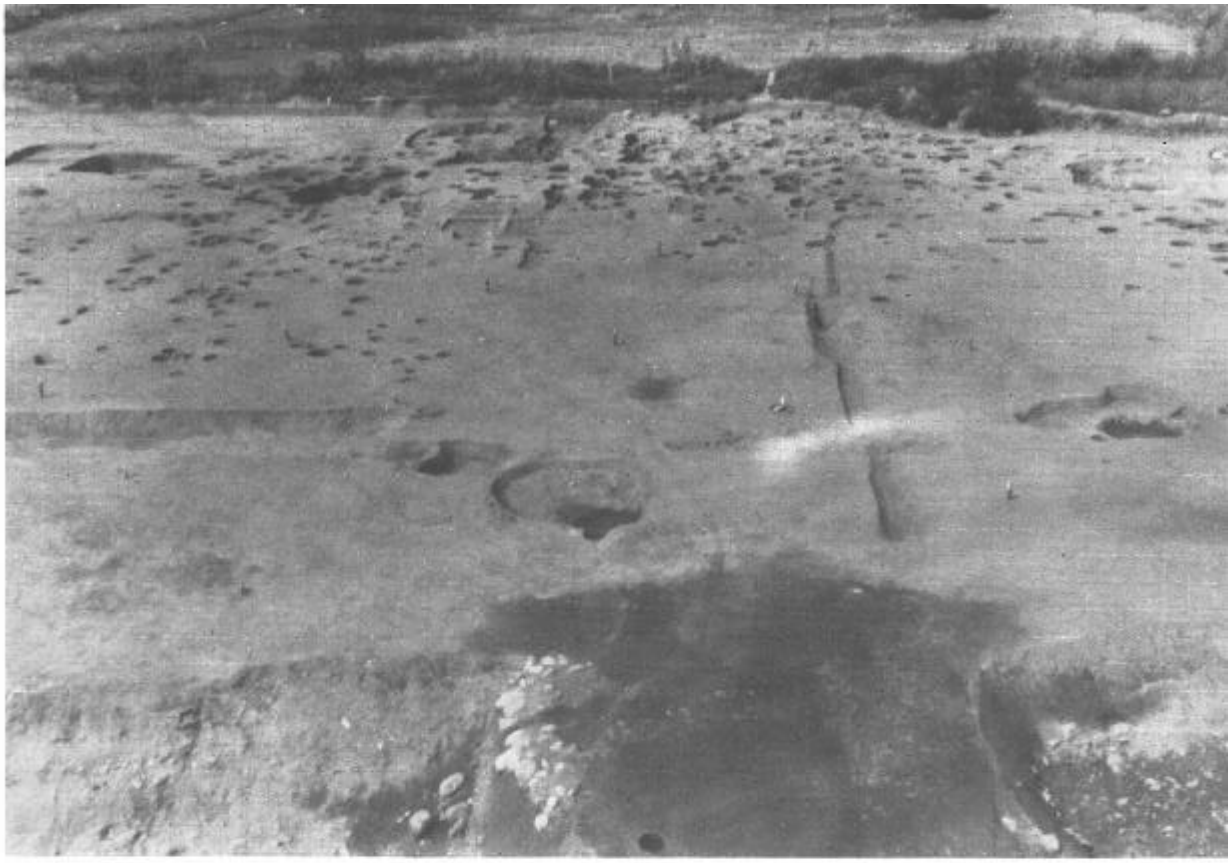
右　同上

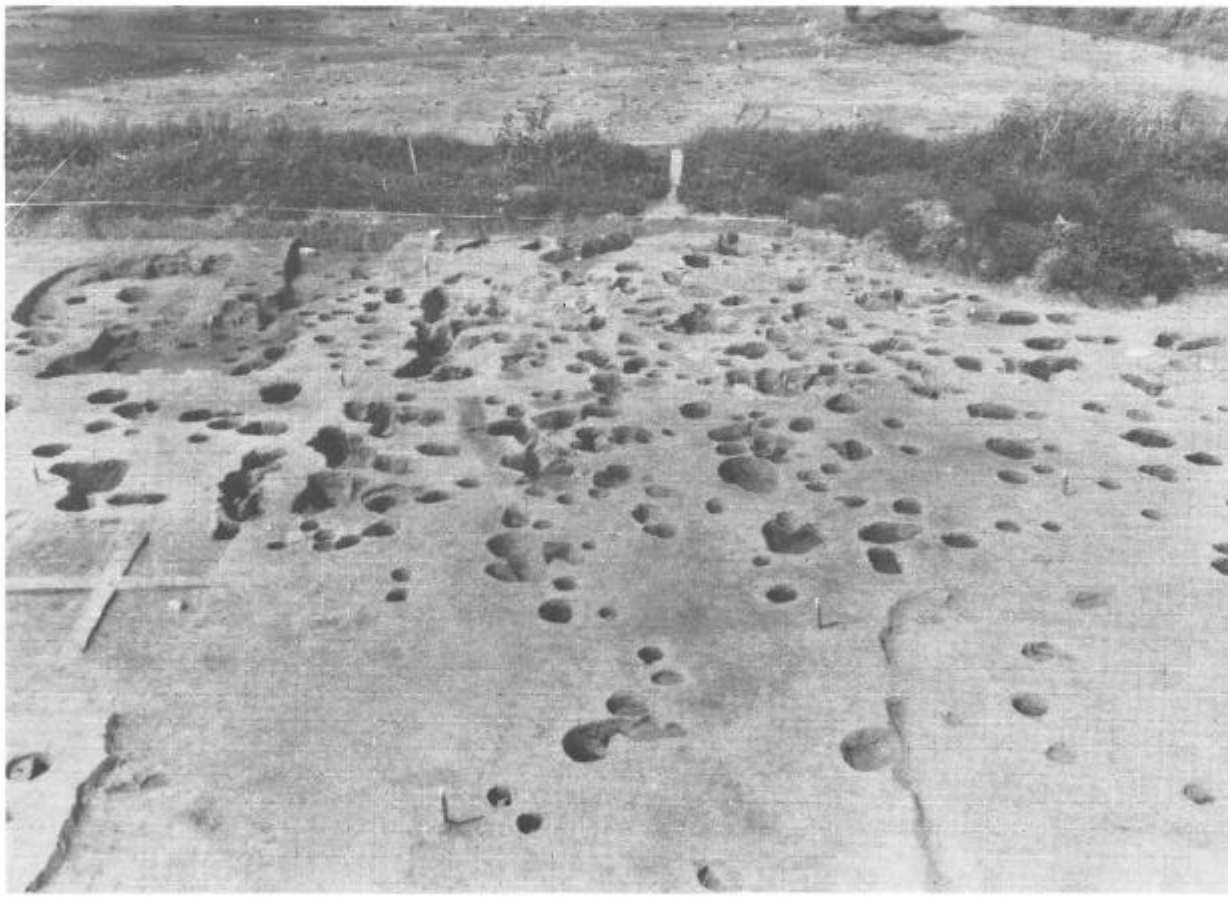
左　同上





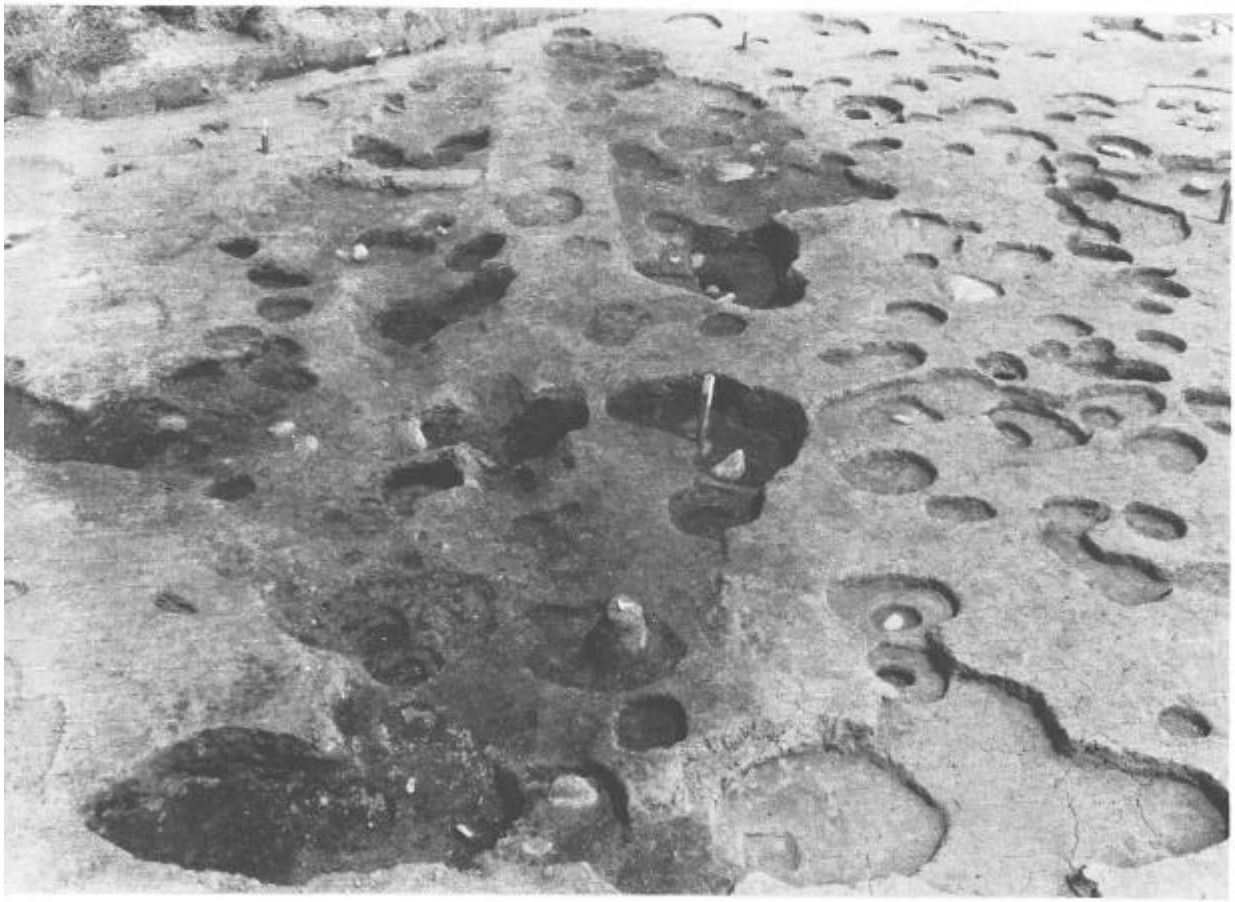
図版 6　上　SX 土橋（南東▶）
右　SD 15 断面
左　SD 15（南東▶）





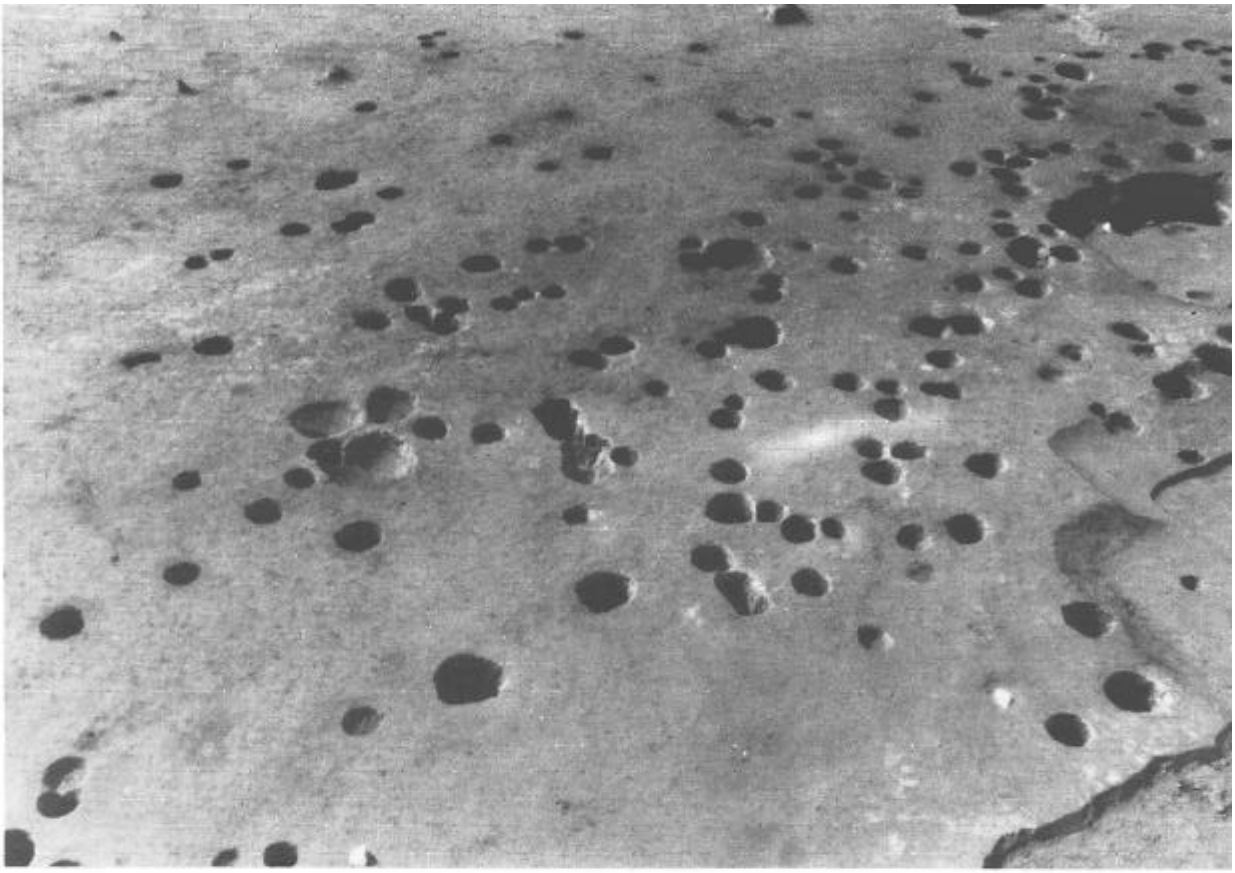
図版 7　上　柱穴群（南東▶）

下　柱穴群近景（南東▶）

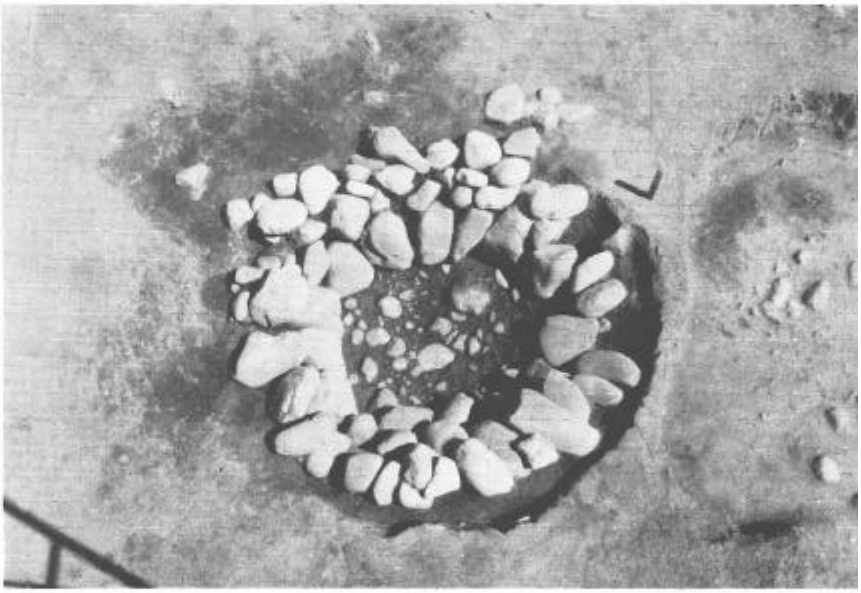


図版 8　上　柱穴群近景（南東▶）

下　同上（南西▶）



図版 9　上　柱穴群南東部
中　SX 03
下　同上

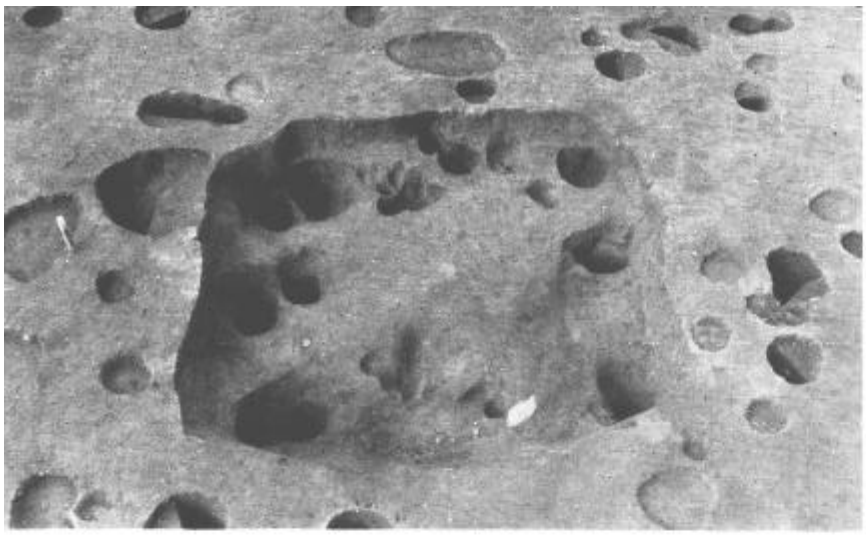


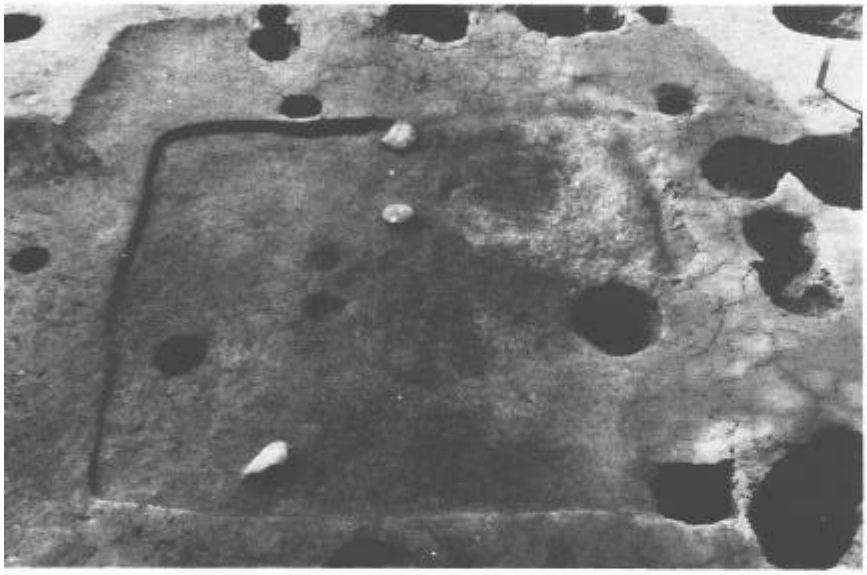
図版10　上　SX 03 石組遺構

中　同上

下　SX 06 石組遺構

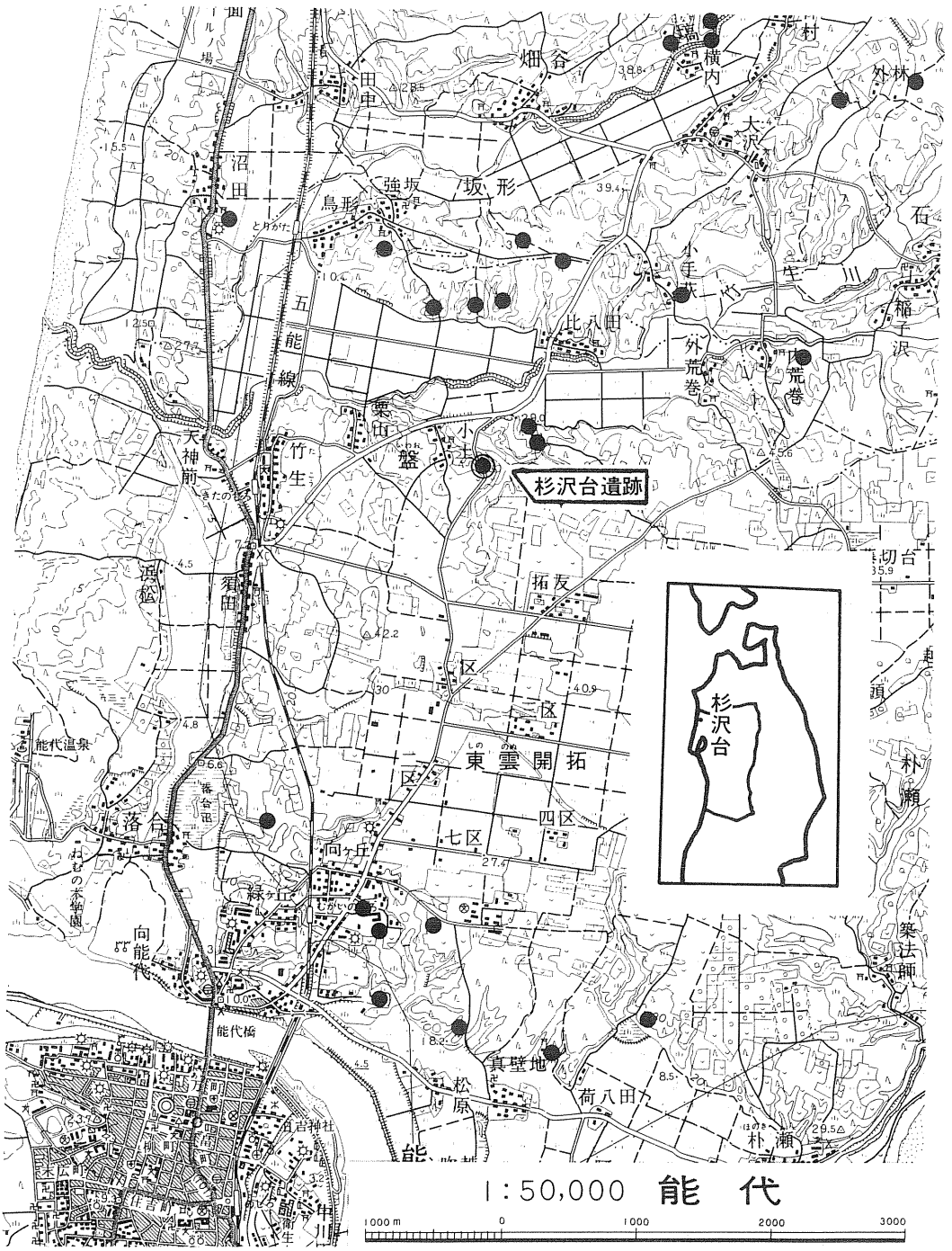
図版11　上　SX 13
中　SX 02
下　SK 11





図版12　上　SK 10
中　SK 20
下　SK 12

Ⅳ．杉沢台遺跡



第1図　杉沢台遺跡周辺地形図及び遺跡分布図

第1章　はじめに

1．発掘調査に至るまで

杉沢台遺跡は，「秋田県遺跡地図」に「杉沢野遺跡」として記載され，従来このように呼称されてきた。しかし，昨年の範囲確認調査で遺跡の広さが判明し，遺跡の所在する小字名を再吟味した結果，遺跡の大部分は杉沢台に所在することが確認された。そのため，今後は「杉沢台遺跡」と呼称していくことになったものである。

さて，昭和51年より東北農政局は米代川の右岸と左岸を対象とする国営総合農地開発事業を実施している。対象地域は，能代市・峰浜村・山本町・八竜町の4市町村におよび，その面積は3.671haである。この地域には周知の遺跡が73ヵ所存在する。昭和55年度の工事対象地区は北能代Ⅰ区であり，このⅠ区には，杉沢台・竹生・街道上の3遺跡が存在する。

杉沢台遺跡は，昨年の範囲確認調査で遺跡の広さが35,000㎡程であることが確認された。このうち，当工事で4,400㎡程遺跡が破壊される（工法で対応できない）ため，この部分の記録保存をはかることを目的に，発掘調査されることになった。

2．調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会		
調査期間	昭和55年4月14日～同年10月3日		
調査地	秋田県能代市磐字杉沢台		
発掘面積	4,672㎡		
調査員	永瀬　福男	秋田県教育庁文化課	社会教育主事
	熊谷　太郎	〃	文化財主事
補佐員	大高　博康		
補助員	佐々木金正		
事務局	秋田県教育庁文化課		
調査協力機関	東北農政局能代開拓建設事業所		
	能代市教育委員会		
	秋田県能代土地改良区		
調査協力機関	小土部落会		

第2章　遺跡の立地

杉沢台遺跡は，東径140°03′—140°04′・北緯40°15′—40°16′に位置する。

遺跡の北を遠望すると，青森県との県境をなす白神山地が東西に横走する。西方の日本海までの距離は，約3.3kmである。南方の米代川までの距離は約6kmである。

米代川の北には，約3,000haの広大な東雲大地が広がる。この台地は段丘群によって構成されている。遺跡は東雲台地の北縁に位置し，標高約35mを測る。沖積地との比高は約25mである。

遺跡の北側の沖積地には竹生川が流れ，日本海に注ぐ。また，東側には小沢があり，良質の湧水が流れている。

第3章　発掘調査の概要

1．遺跡の概観

昭和54年10月22日～11月1日の範囲確認調査（秋田県教育庁文化課実施）で，遺跡の範囲は約35,000m²であることが確認されている。

この遺跡は，東雲台地の北縁に位置する。

東雲台地は段丘群（白石・工藤ほか1,977）によって構成され，当遺跡は中位段丘に位置する。また，この中位段丘は，遺跡と周辺では2段になっている。上位は標高約35m，下位は約32mである。発掘調査区域は，標高約35mの上位の段丘面と下位の段丘面に移行する斜面である。標高約35mの段丘面は，南方約6kmにある米代川まで続き，広々としている。標高約32mの段丘面は狭く，北に約20mで急斜面になり，沖積地に至る。沖積地の標高は約11mである。

遺跡の東側には，小谷が入り込む。この小谷には，現在でも，良質で水量の豊富な湧泉がある。

遺跡下の沖積地には竹生川が流れ，日本海に注ぐ。

遺跡の現況は，畑地と水田である。水田部分は遺跡の南側の平坦地であるが，水田造成のさい，地山の上部を削っているため，遺構の一部の壁が破壊されていた。

当遺跡の地層は，Ⅰ層が黒褐色土層（20～30cm），Ⅱ層が暗褐色土層（10～20cm），Ⅲ層がローム層（1～1.2m）であり，この下はローム層＋砂層，砂層，礫層へと続く。

第２図　遺跡の地形と発掘調査区

2．調査の方法

発掘調査は，グリッド方式を採用した。グリッドの規模は４ｍ×４ｍ，，グリッドの南北方向は磁北方向に一致する。グリッドの名称は，南北にアルファベット，東西に算用数字を用い，これらの組合せで表現した。

遺構の実測は，遣り方測量で実施した。

遺構の記号は下記のとおりである。

ＳＩ…竪穴住居跡，ＳＫＩ…竪穴状遺構，ＳＫ…土壙，ＳＫＦ…フラスコ状ピット，ＳＤ…溝，そして，発見順にＳＫ01，ＳＫ02…のように通し番号を付した。

その他の略記号は，ＲＷ…土器，Ｓ…石

3．調査の経過

調査期間は昭和55年４月14日～同年10月３日である。

４月14日の午前中は，小土公民館において，作業員との打合せ会。調査の目的，発掘の仕方（スライド使用），勤務時間，賃金の支払い，諸注意等を話合う。午後は遺物の表面採集・グリッドのテープ張り，カヤその他の雑草の下刈り，発掘用具置き場の設置などの調査の諸準備15日，表土除去作業を開始。西側から東側に調査を進めることとし，表土除去作業を開始。西側には水田が一部あったが，転作作物が植えられていたため，７月以降に調査することとした。アゼを残しながら第Ⅰ層を除去すると歴史時代の土壙・溝・竪穴住居跡が確認。23日，縄文時代前期，晩期の土器・石器も検出されるようになる。25日，歴史時代の住居跡・溝・土壙の精査を始める。全体の表土除去作業を終了させ，遺構の重複関係を把握してから精査にとりかかればよいのであるが，遺構確認面を長期間放置しておくと，乾燥による地割れ，埋土層の堅固化が進むため精査を開始した。

５月１日，ＳＩ01の精査でカマド付近に多量の土師器杯が検出。２日，ＳＩ02と重複しているフラスコ状ピットの精査開始。７日，長軸が15ｍ以上もある遺構（ＳＩ06）らしきもの確認。地面が凹んだ自然地形なのか，それとも遺構なのか，判断に迷いながら８日に精査。中軸線上で地床炉確認。大型住居跡であることが判明。

５月中旬頃になると縄文時代前期の小型・中型住居跡も数棟精査終了。調査は標高35ｍラインに沿って東方に進行し，調査予定区域のほぼ中央部で，楕円形に近い環状溝を確認，精査開始。調査予定地の西半分の精査ほぼ終了。しかし，ＳＩ06大型住居跡の北側は，東西約30ｍ，南北約９ｍにわたって地山が出現しない。もしかしたら，30ｍを越す超大型住居跡ではないかという期待が持たれはじめる。そして，歴史時代の溝であるＳＤ11・14・16の精査過程で，床

面・壁の一部を確認したため，30ｍを越える大型住居跡である確信を持った。21日，ＳＩ07として精査を開始。

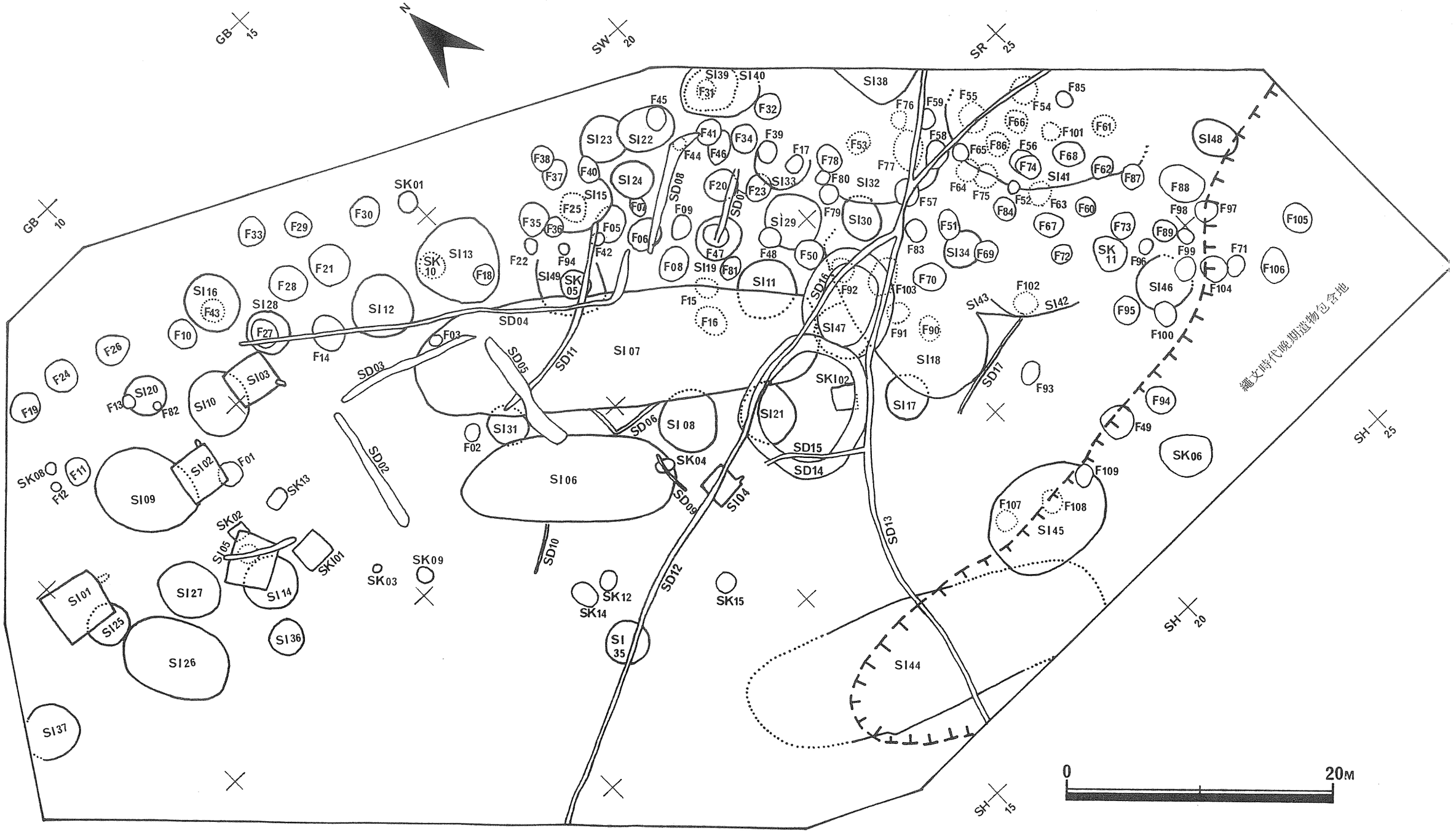
５月末になると，発掘区の西側の北斜面にフラスコ状ピットが群集することが判明した。そして，このフラスコ状ピット群は，標高35ｍラインの北側斜面に広く分布することが予想されたため，斜面の表土除去作業を開始。30日，ＳＫＦ08の精査，埋土層中から土器とともに，貝層（ヤマトシジミ中心）が検出される。

６月３日，竹生小学校児童来跡。５日，ＳＫＦ18の精査で縄文時代後期の深鉢型土器（完形品）が床面に倒立した状態で検出。今後，後期の遺構も検出されることが予想される。６月末まで北側斜面と東側の表土除去作業が継続。

７月中旬までに，竪穴住居跡33棟，フラスコ状ピット70基を確認し，精査を継続。10日，遺構の平面実測のための遣り方測量の杭打ちを開始。また，水田部分の転作作物の検査が終了したため，南側の表土除去作業も開始。21日，高校生・大学生が調査に参加。遺構の実測を担当してもらう。23日，竹生遺跡の調査開始。30日，大潟村公民館一行来跡。

８月４日，能代市中央公民館チビッ子教室一行来跡。由利高校生21名，６日までの予定で調査に参加。調査区南東隅に分布する縄文時代晩期の遺物包含層の精査開始。５日，能代市東部公民館チビッ子教室一行来跡。８日，秋田県立博物館教室一行来跡。８月末までに，竪穴住居跡40棟，フラスコ状ピット84基，土壙15基，溝13条，竪穴状遺構２棟検出。

９月２日，向能代小学校４年生来跡。５日，晩期の遺物出土状況の記録終了，遺物の取り上げ開始。６日，遺跡の保存問題について小土部落会・農政局・文化課の話合いを現場事務所で行う。12日，保存についての再度の話合いを持ち，農政局・地権者・文化課参加。保存は困難であるという意見が多し。９月中旬までに北側斜面のフラスコ状ピットは100基近くになる。ＳＫＦ98・99からも貝層が検出され，貝層出土のフラスコ状ピットは全部で６基となる。９月中旬からは，フラスコ状ピットの精査と遺構の実測に全力投入。24日，古池裕子氏（東大総合資料研究所）貝のサンプリングのため来跡。27日，午後１時から発掘調査を一般公開。26日で遺構の精査をほぼ終了し，10月３日までは，遺構の実測と写真撮影のほか，発掘器材の撤去作業。


N
GB 15
SW 20
SR 25
GB 10
SH 25
SH 20
SH 15
0
20M
縄文時代晩期遺物包含地
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK08
SK09
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK101
SK102
SI01
SI02
SI03
SI04
SI05
SI06
SI07
SI08
SI09
SI10
SI11
SI12
SI13
SI14
SI15
SI16
SI17
SI18
SI20
SI21
SI22
SI23
SI24
SI25
SI26
SI27
SI28
SI29
SI30
SI31
SI32
SI33
SI34
SI35
SI36
SI37
SI38
SI39
SI40
SI41
SI42
SI43
SI44
SI45
SI46
SI47
SI48
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17

第３図　遺構配置図

第4章　調査の記録

1．縄文時代前期

① 竪穴住居跡

44軒の竪穴住居跡が検出された。これらの住居跡はその規模から大型・中型・小型に3分類される。

大型住居跡は4軒検出され，外プランは小判形を呈し，床面は2段構造である。柱穴はベンチ状床面と土間状床面の段境にあり，中軸線に対象的に配置されている。炉は地床炉であり，長軸線上に数ヵ所存在する。それぞれの外プランの規模は，ＳＩ07が長軸推定約31ｍ（30ｍまでは確認できる）・短軸約8.8ｍ，ＳＩ44が長軸推定約28ｍ・短軸９ｍ，ＳＩ06は長軸約16ｍ・短軸約6.6ｍ，ＳＩ18が長軸15ｍ・短軸約７ｍである。なお，ＳＩ07の面積は222㎡である。

中型の住居跡（ＳＩ09・26・32・41・45）は，長軸８～13ｍ程の楕円形を呈する。ＳＩ09を除き，床面が2段構造である点や，炉・柱穴の配置など大型住居跡と類似する。ＳＩ09は狭いベンチ状床面を持ち，炉は埋甕炉である。

小型の住居跡は，径2.5～５ｍ程の円形プランを呈する。炉は使用度が低かったのか判然としない。柱穴の配置・本数には大型・中型住居跡とは異なり，規格性に乏しい。

② フラスコ状ピット

フラスコ状ピットは，口縁部が狭く，胴部の広い典型的なフラスコ状を示すものと，口縁部が広く，底部に溝を有するものの2種類存在する。これらフラスコ状ピットのうち，土器のほか貝類を投げ捨てたものが6基検出された。フラスコ状ピットが廃棄され，凹地になったところを捨て場として再利用したと考えられる。貝の種類はヤマトシジミ・カワシンジュガイ・カワニナ・オオタニシ・ハマグリであり，ヤマトシジミが圧倒的に多い。

2．縄文時代後期

後期に属する遺構は，フラスコ状ピット１基のみである。このフラスコ状ピットからは，深鉢形土器の完形品が倒立した状態で検出された。住居跡は，今回の調査では検出されなかった。

3．縄文時代晩期

発掘調査区の南東に晩期の遺物包含層があり，多数の遺物が検出された。遺物は土製品（土器・土偶など）・石製品（岩偶・石棒・石鏃・石匙・石錘など）である。遺構は土壙（風倒木

痕の可能性もある）１基のみであり，住居跡は検出されなかった。

４．平安時代

① 竪穴住居跡

５軒検出された。１辺2.5～４ｍ程の方形プランを呈する。カマドは東か西側の壁に構築されている。ＳＩ05のカマドは保存状態がよく，袖部に石を置き周辺を粘土で構築している。ＳＩ01には「間切り」と考えられる柱穴があり，床面も２段になっている。

② 竪穴状遺構

２軒検出された。１辺約２ｍの方形を呈し，カマドは付設されていない。作業小屋として使用されたものと考えられる。

③ 溝状遺構

10数条の溝が検出された。このうち，ＳＤ14とＳＤ16が注目される。ＳＤ14とＳＤ16は重複しているが，ＳＤ16が古い。いずれも，幅約180㎝・底面幅約70㎝・深さ約70㎝で，断面は逆台形を呈する周溝である。周溝のプランは楕円形であり，ＳＤ14の長軸約10ｍ・短軸約９ｍ，ＳＤ16の長軸約８ｍ・短軸約6.5ｍを測る。

第５章　　ま　　と　　め

縄文時代前期の遺構は，前述のとおり竪穴住居跡とフラスコ状ピットである。これら遺構は，台地の縁から北側の斜面で検出され，台地縁から南に離れると検出されなかった。したがって，前期の集落は台地縁に沿って形成されていたものと考えられる。

大型竪穴住居跡の検出された位置は，この台地縁のなかで最も標高の高いところである。そして，遺構の分布と地形から考えて，集落の中心にあたる場所であると理解される。

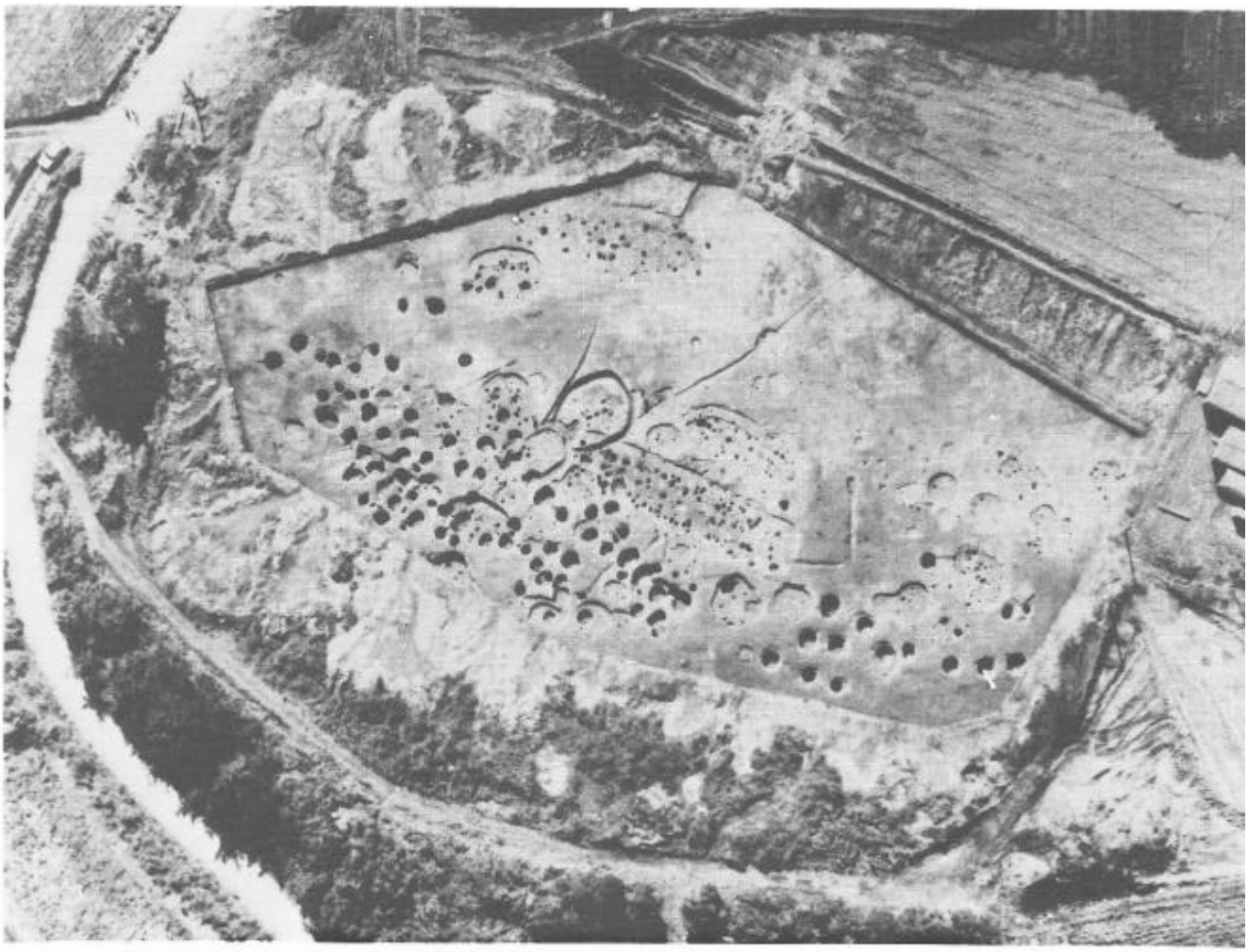
中型・小型の住居跡は，台地縁と北側斜面に，フラスコ状ピットは北側斜面に分布する。

近年，各地で大型竪穴住居跡の資料が増加してきた。資料の多くは中期以降のものであるが，杉沢台遺跡の大型住居跡は前期に属する。縄文時代前期のイメージを大きく変えなければならないだろう。大型住居を作る作業には多人数を要したはずであり，その労働量は膨大であったと考えられる。

なぜ，このような大型の施設を必要としたのだろうか。この施設の性格を考えることは，縄文時代の社会構造を考えることであると思われる。それゆえに貴重な資料であると考えられる。

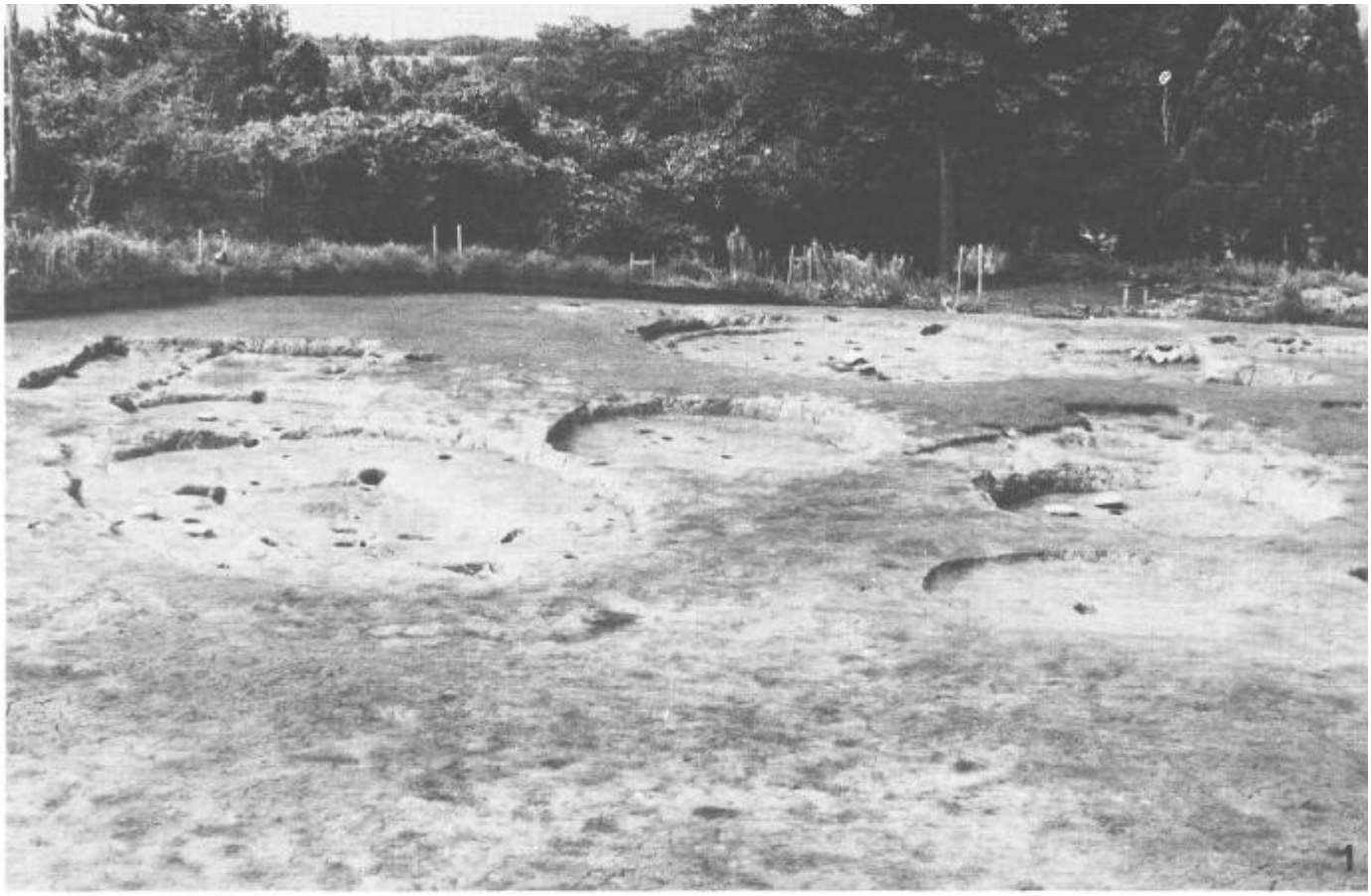
フラスコ状ピット内に捨てられていた貝類は，縄文時代前期の環境を知る手掛りを与えてくれるものと考えられる。ヤマトシジミを主体とする貝類は，遺跡下で採取されたものと考えられ，縄文海進は杉沢台遺跡の近くまで及んでいたことが理解される。

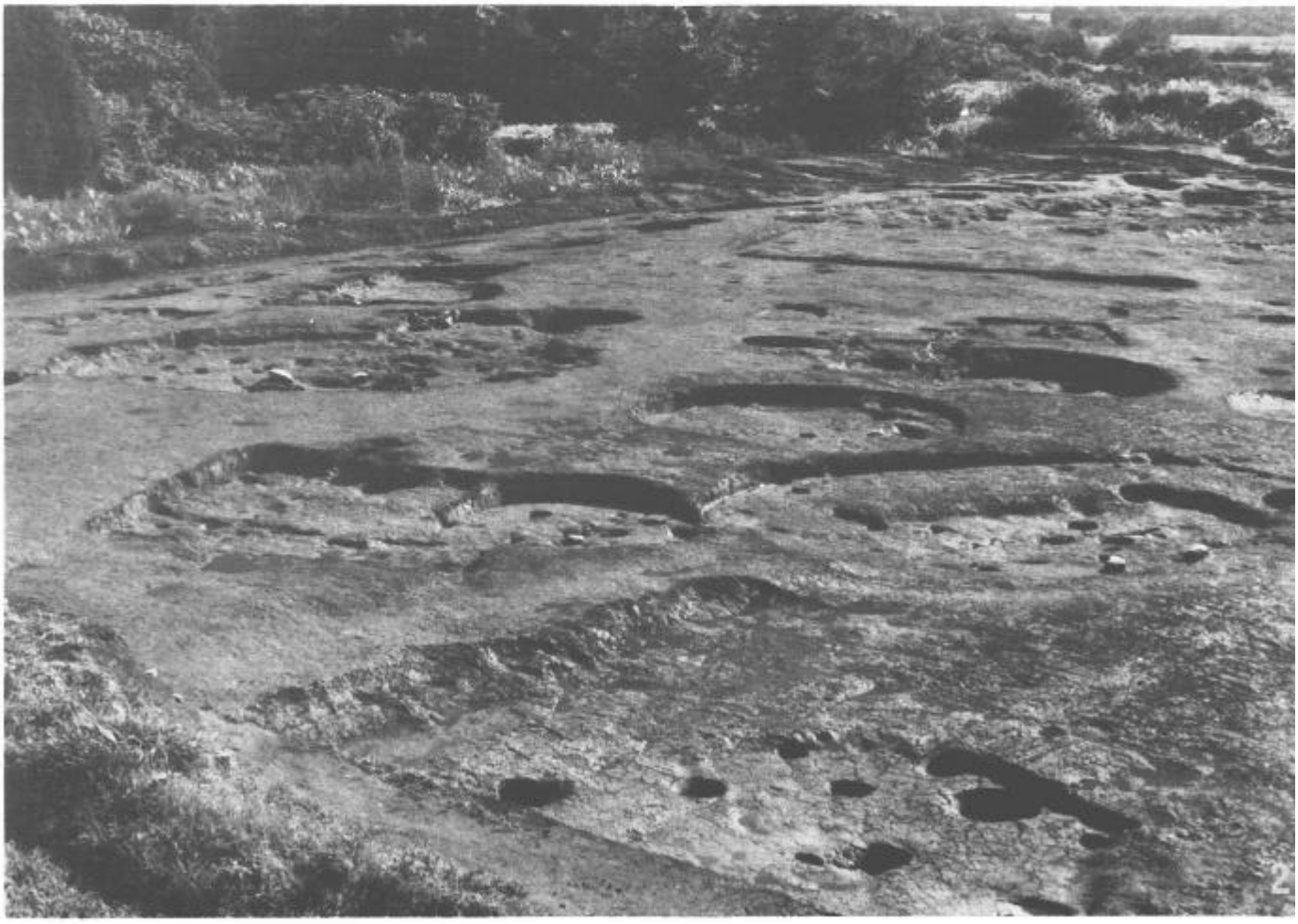
以上のように杉沢台遺跡は複合遺跡であるが，なかでも縄文時代前期の集落の様子がかなり把握できる。とりわけ，超大型住居跡の検出は，縄文世界を考える上で看過できない資料となるであろう。



図版 1　発掘調査全景（航空写真）

図版 2　(1) 発掘調査前　(2) 発掘風景



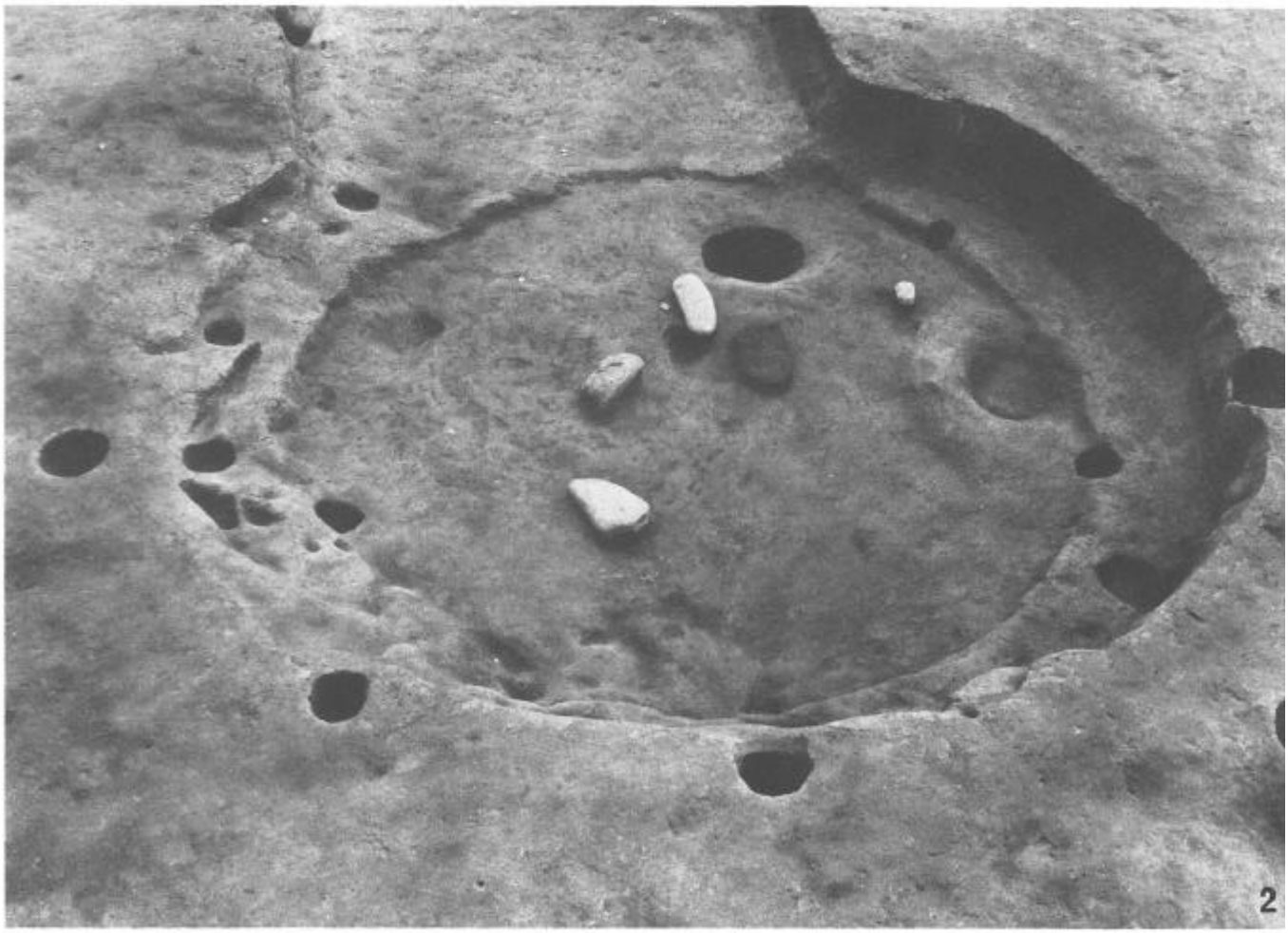


図版 3　(1) 調査区西側（南▶北）　(2) 調査区西側（西▶東）

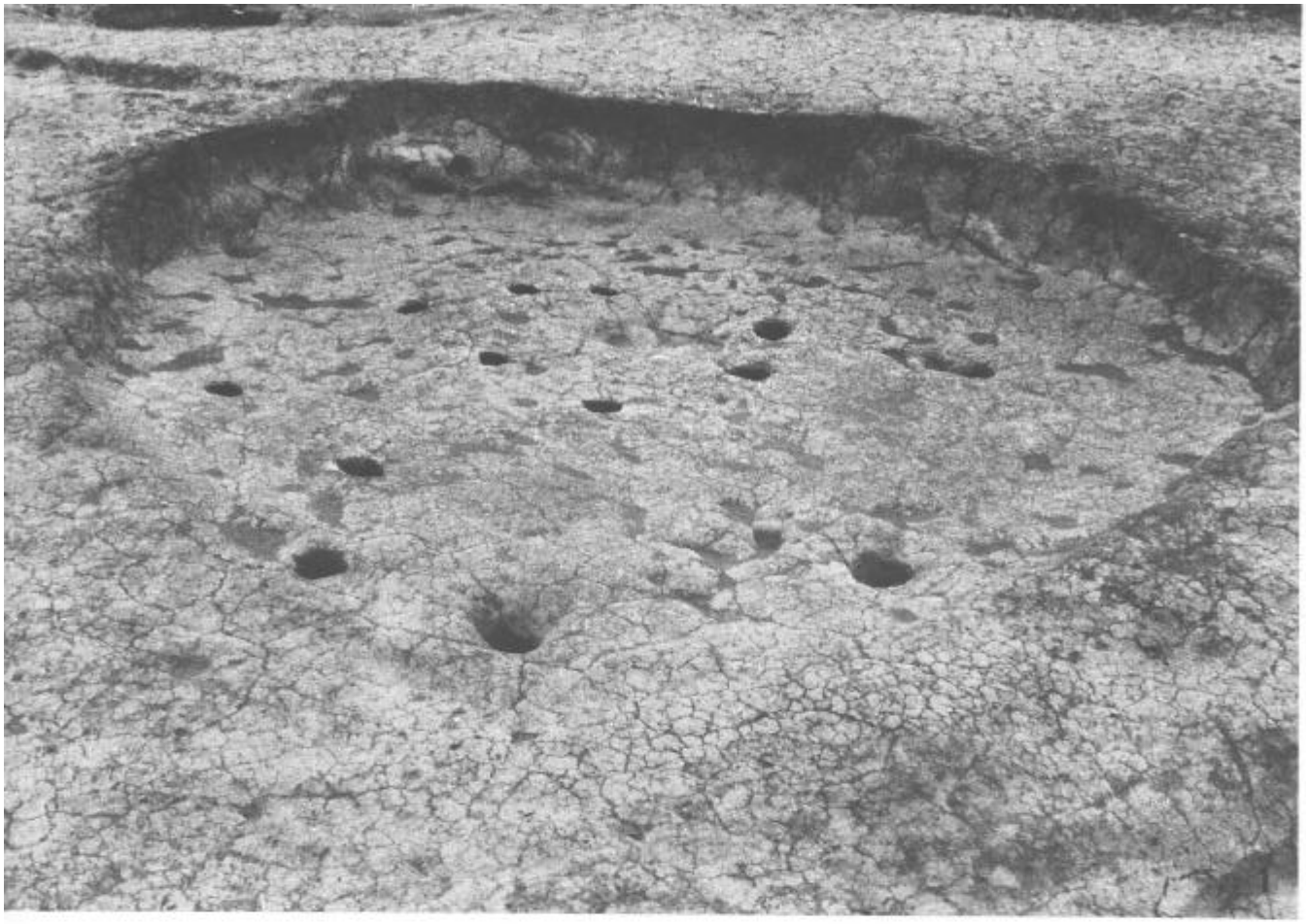
図版 4　(1), (2) 北側斜面のフラスコ状ピット群（西▶東）

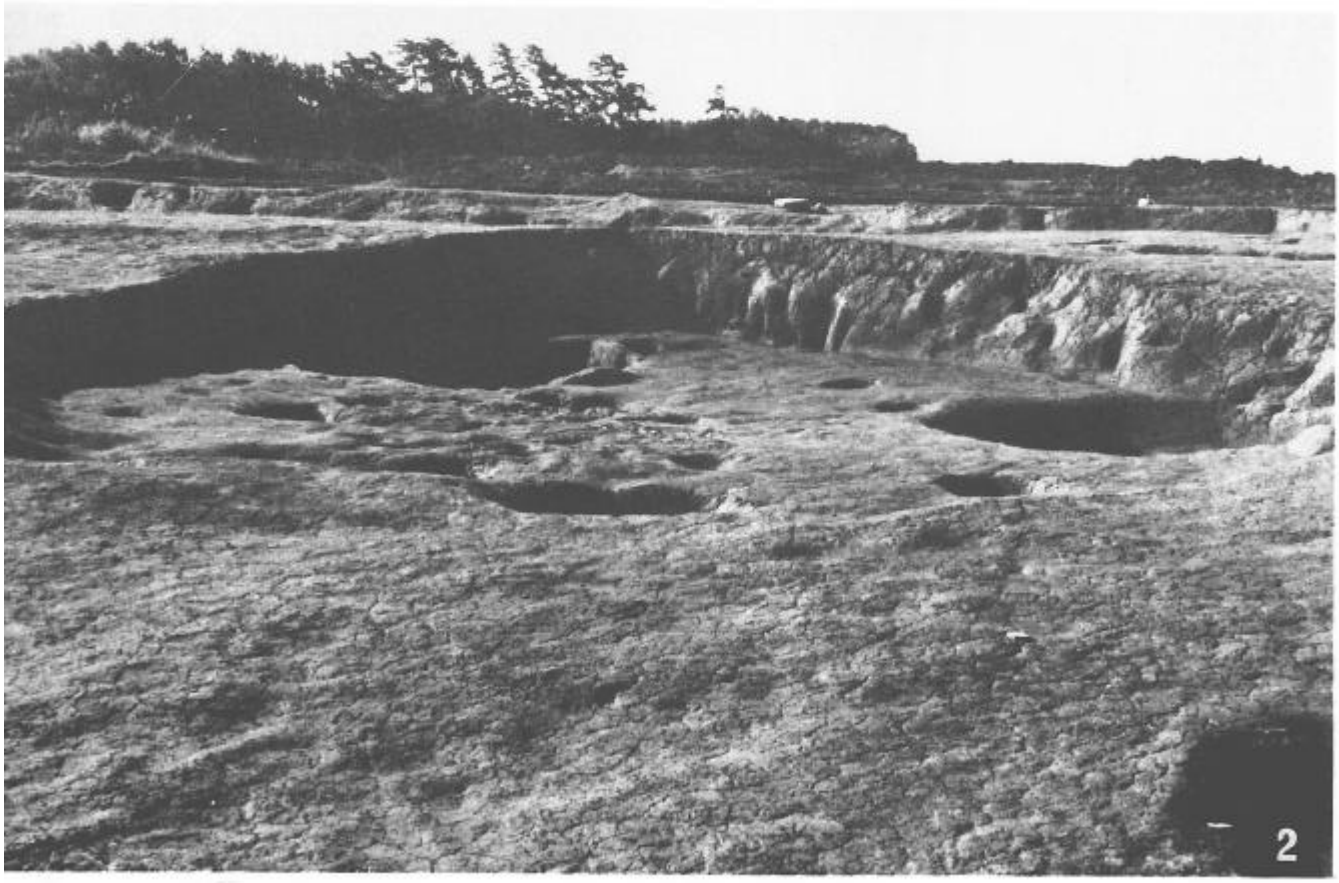
図版 5　(1) SI 07（西▶東）　(2) SI 07（東▶西）

図版 6　(1) SI 06（東▶西）　(2) SI 08（北▶南）



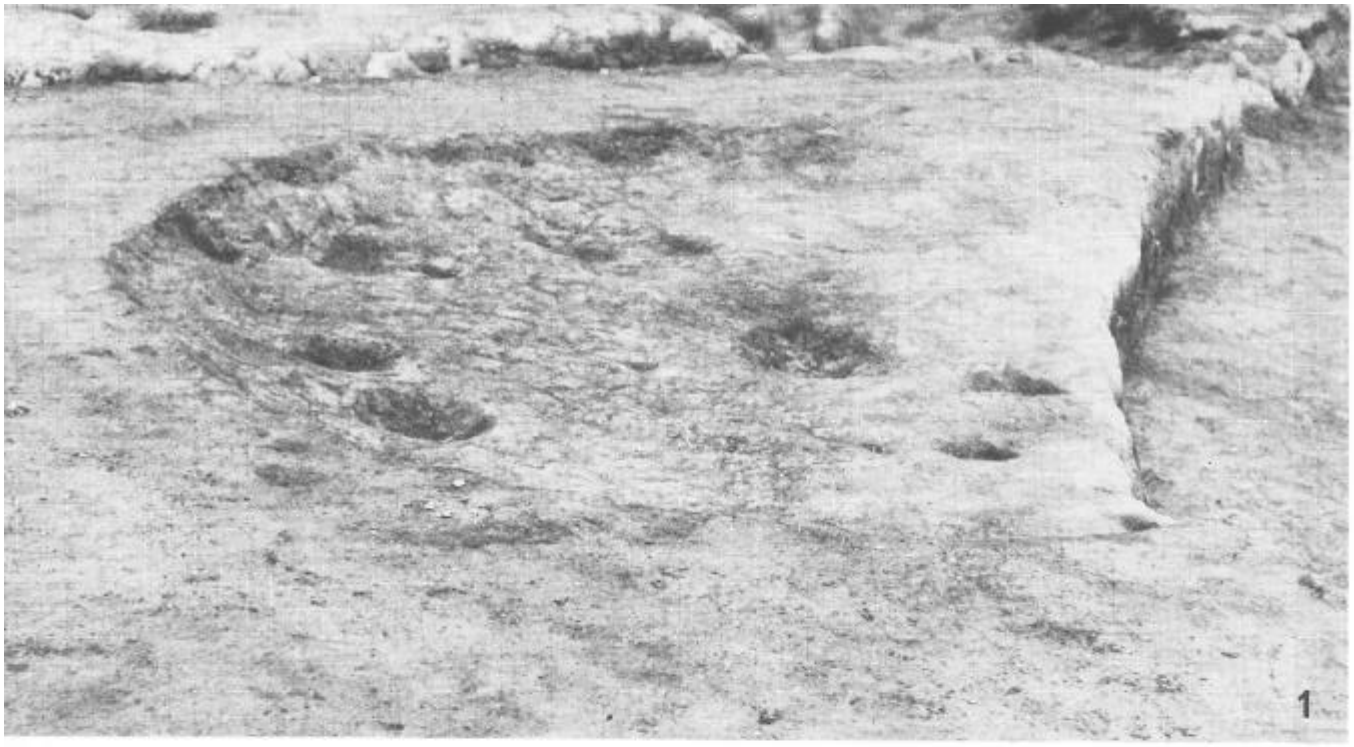
図版 7　(1) SI 09（南▶北）　(2) SI 10（西▶東）





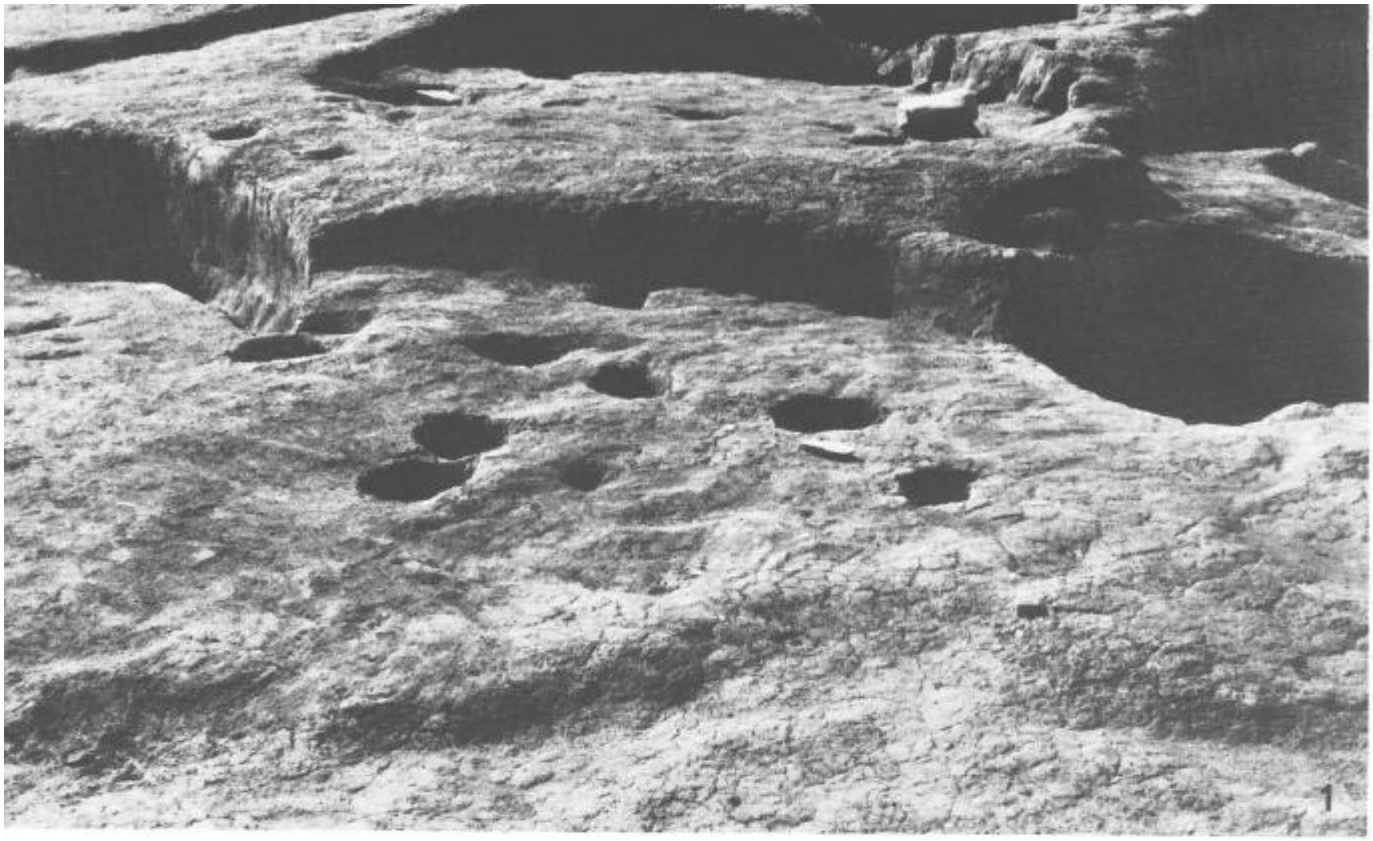
図版 8　(1) SI 12（北▶南）　(2) SI 13（北▶南）

図版 9　(1) SI 14（南▶北）　(2) SI 15（南▶北）

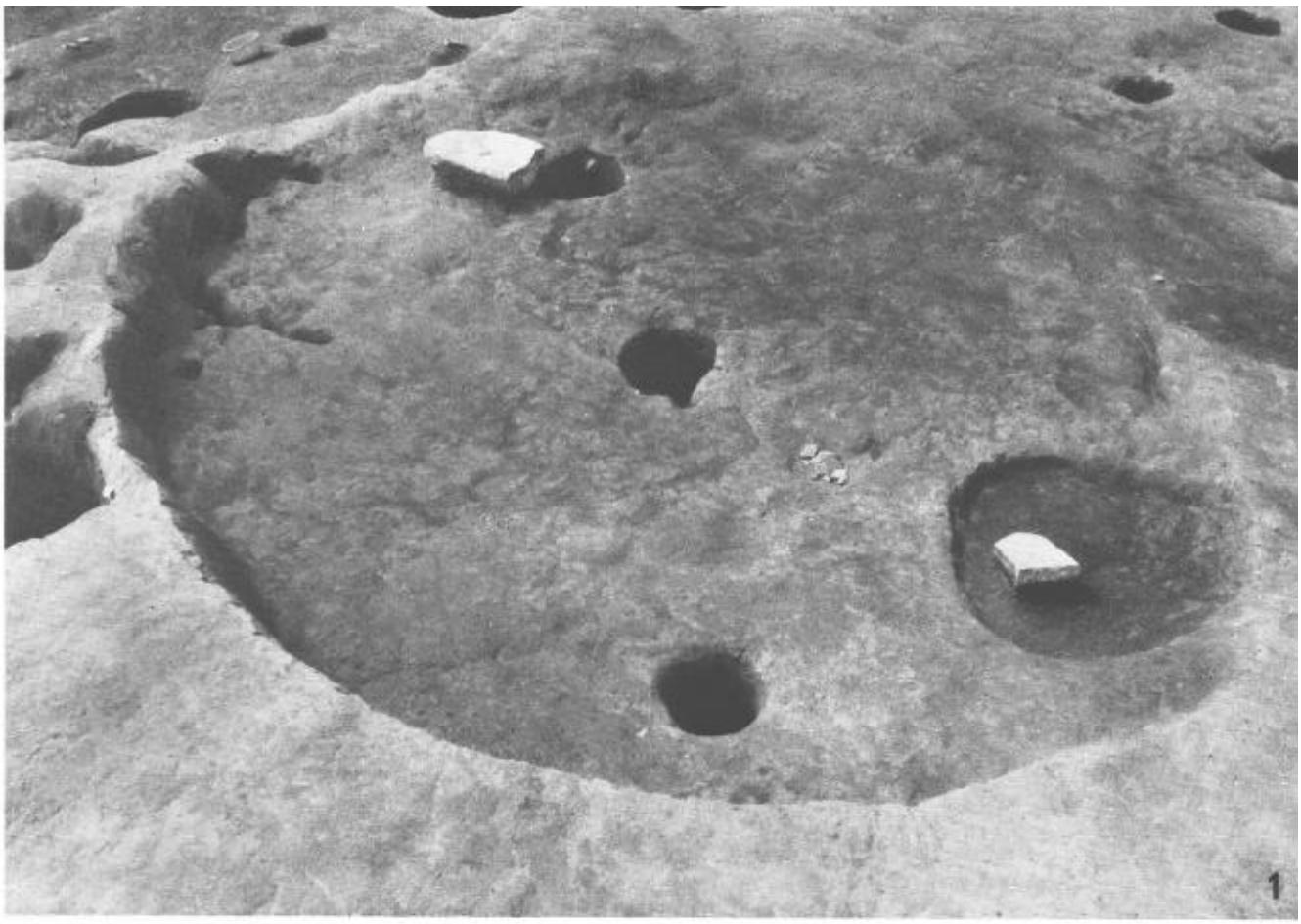


図版10　(1) SI 17（南▶北）　(2) SI 18（南▶北）

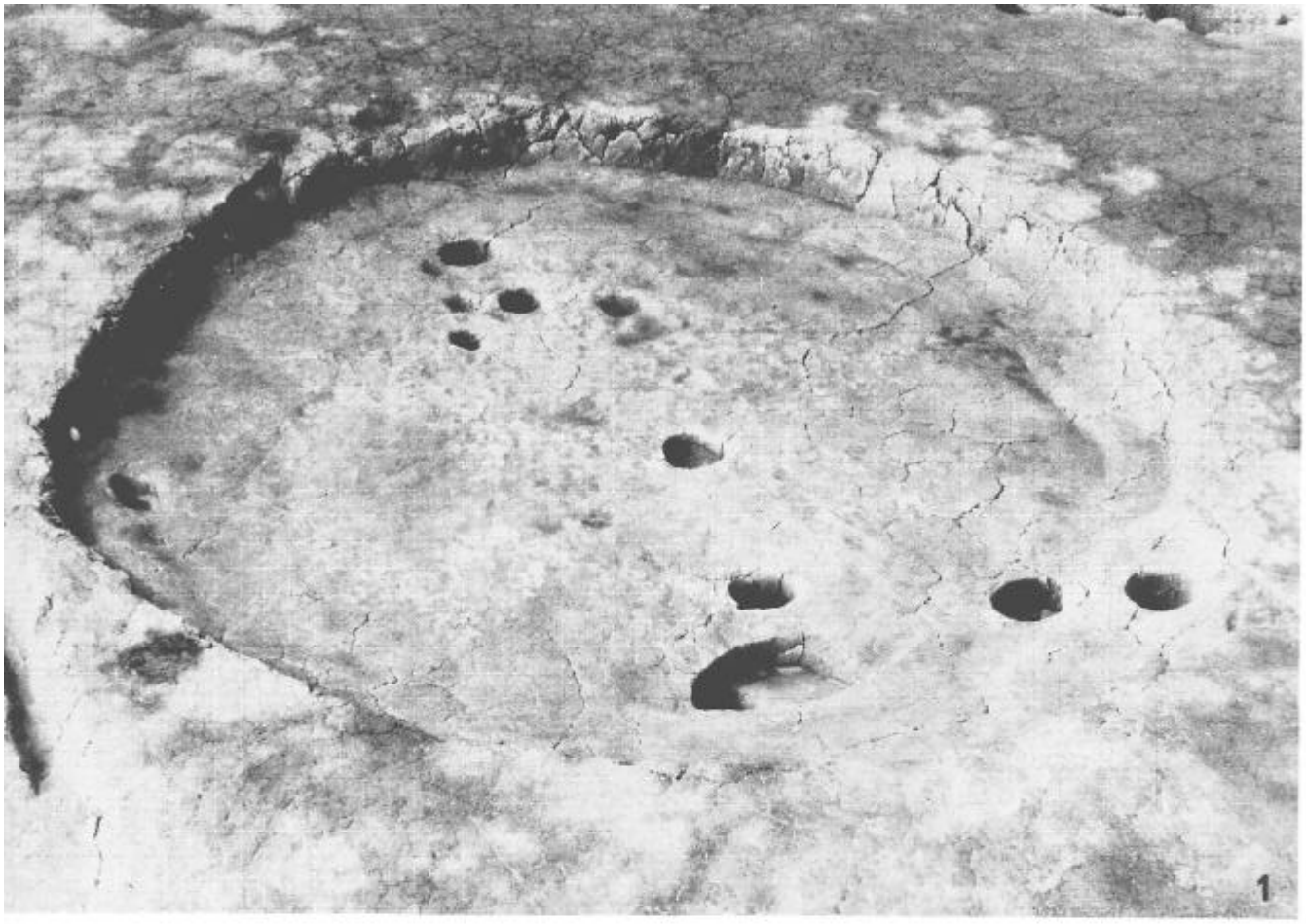
図版11　(1) SI 20（北▶南）　(2) SI 22, SKF 45（北▶南）
SKF 13, 82

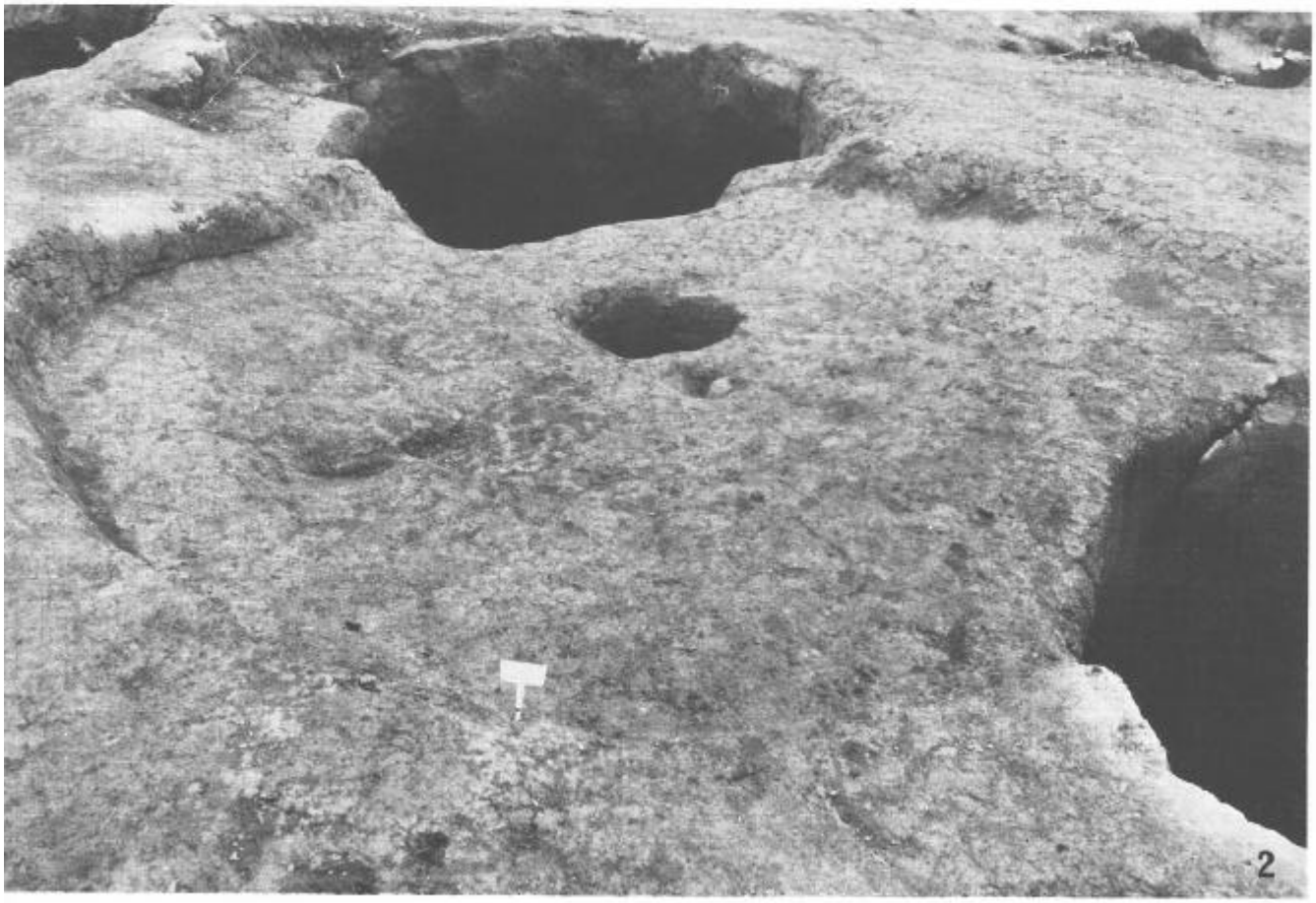


図版12　(1) SI 22（北▶南）　(2) SI 23（北▶南）

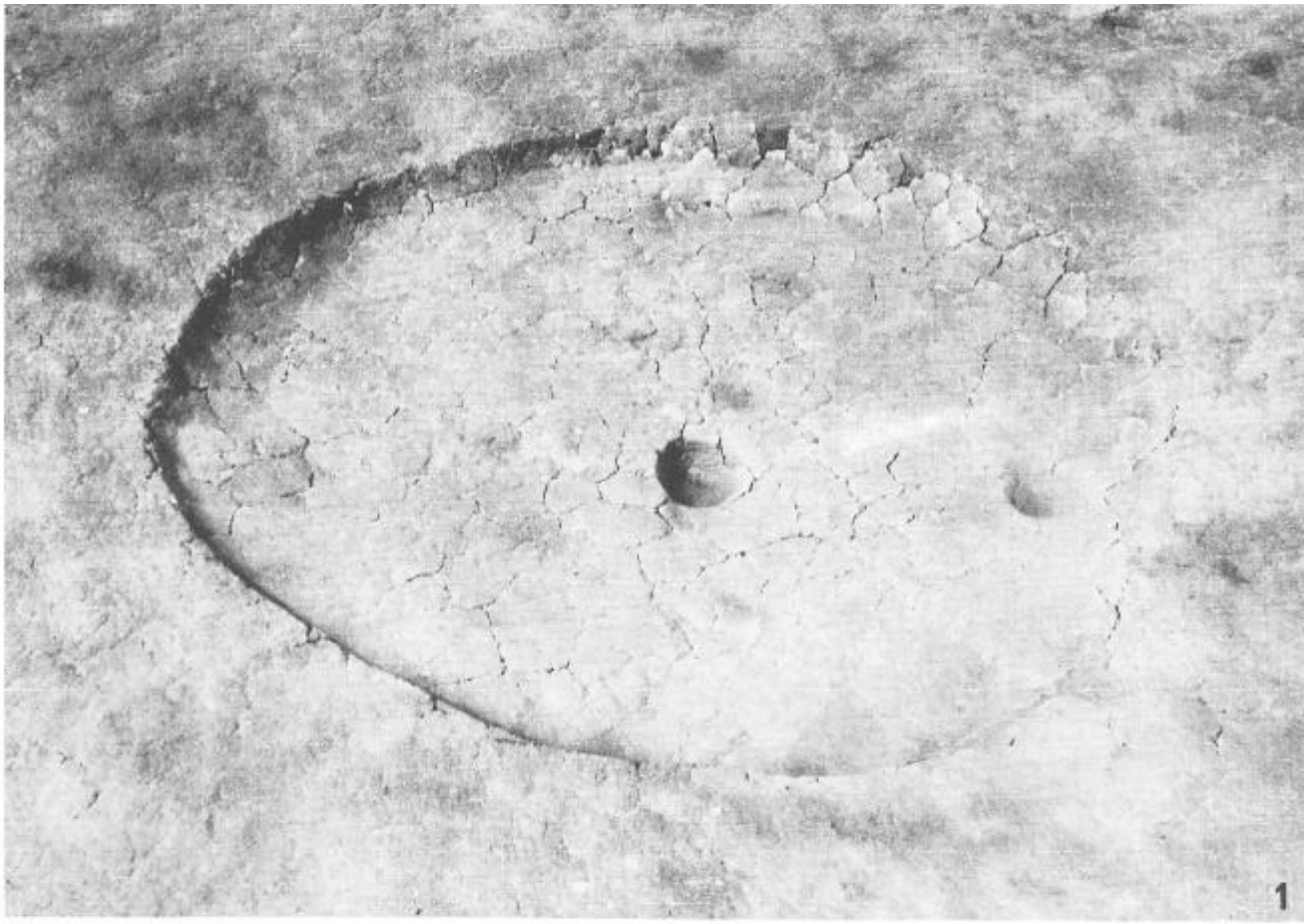


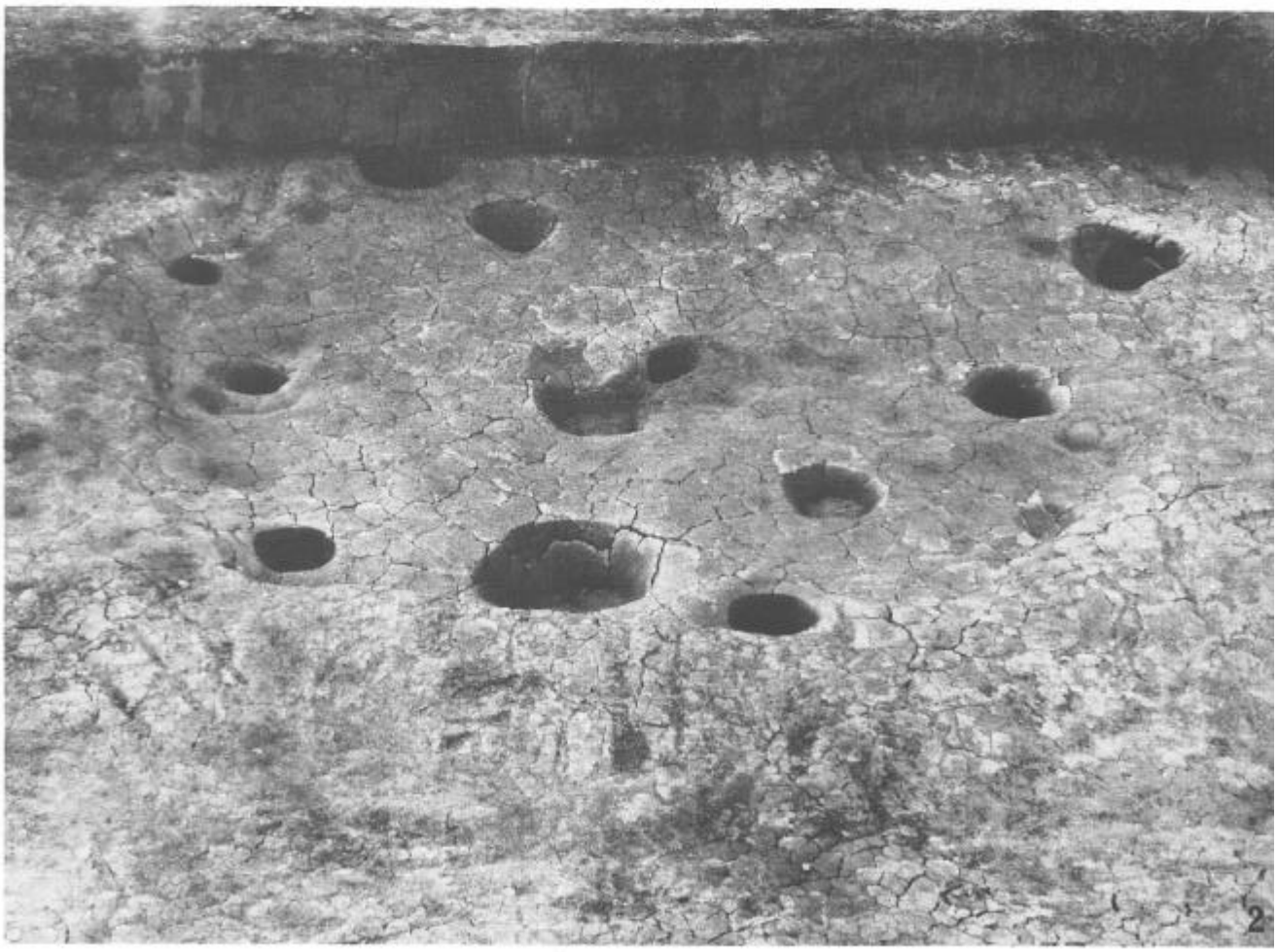
図版13　(1) SI 24（東▶西）　(2) SI 26（東▶西）



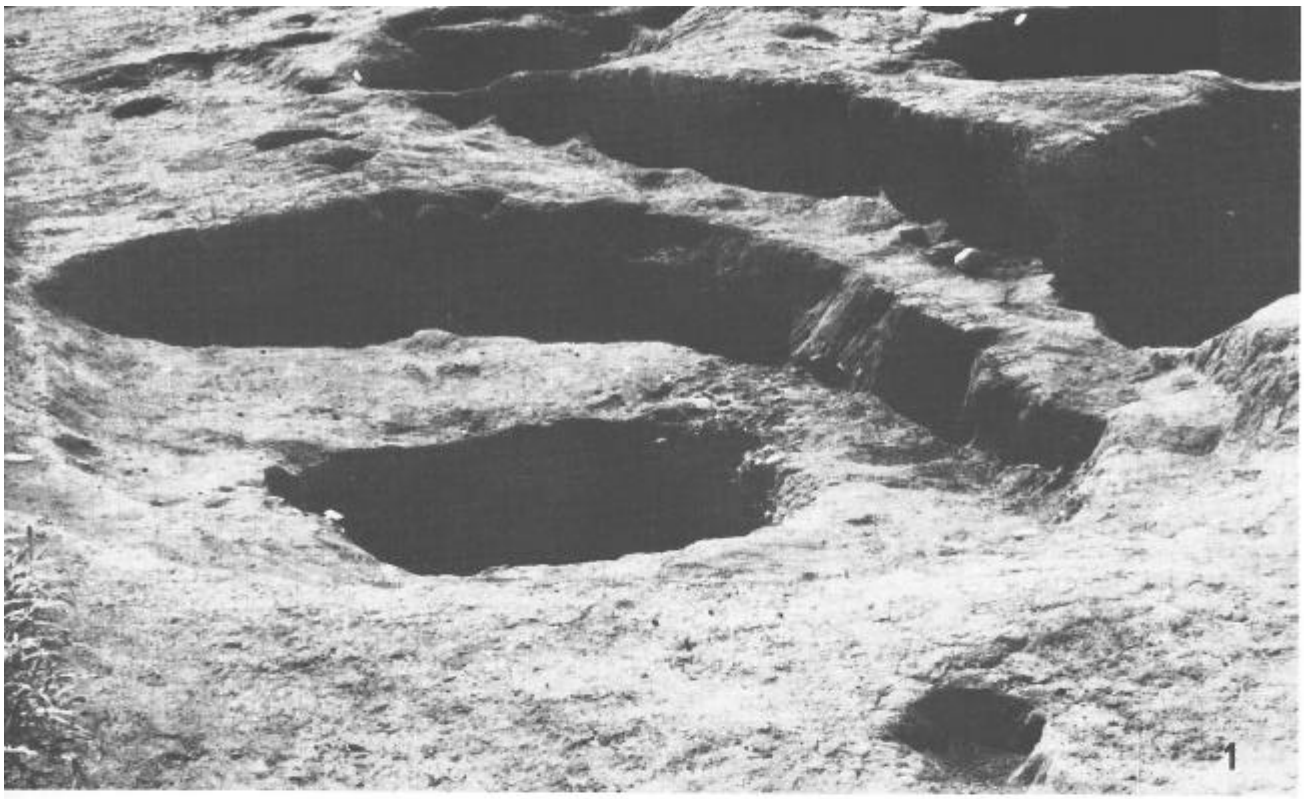


図版14　(1)SI 27（東▶西）　(2) SI 34, SKF 51, 69（南▶北）

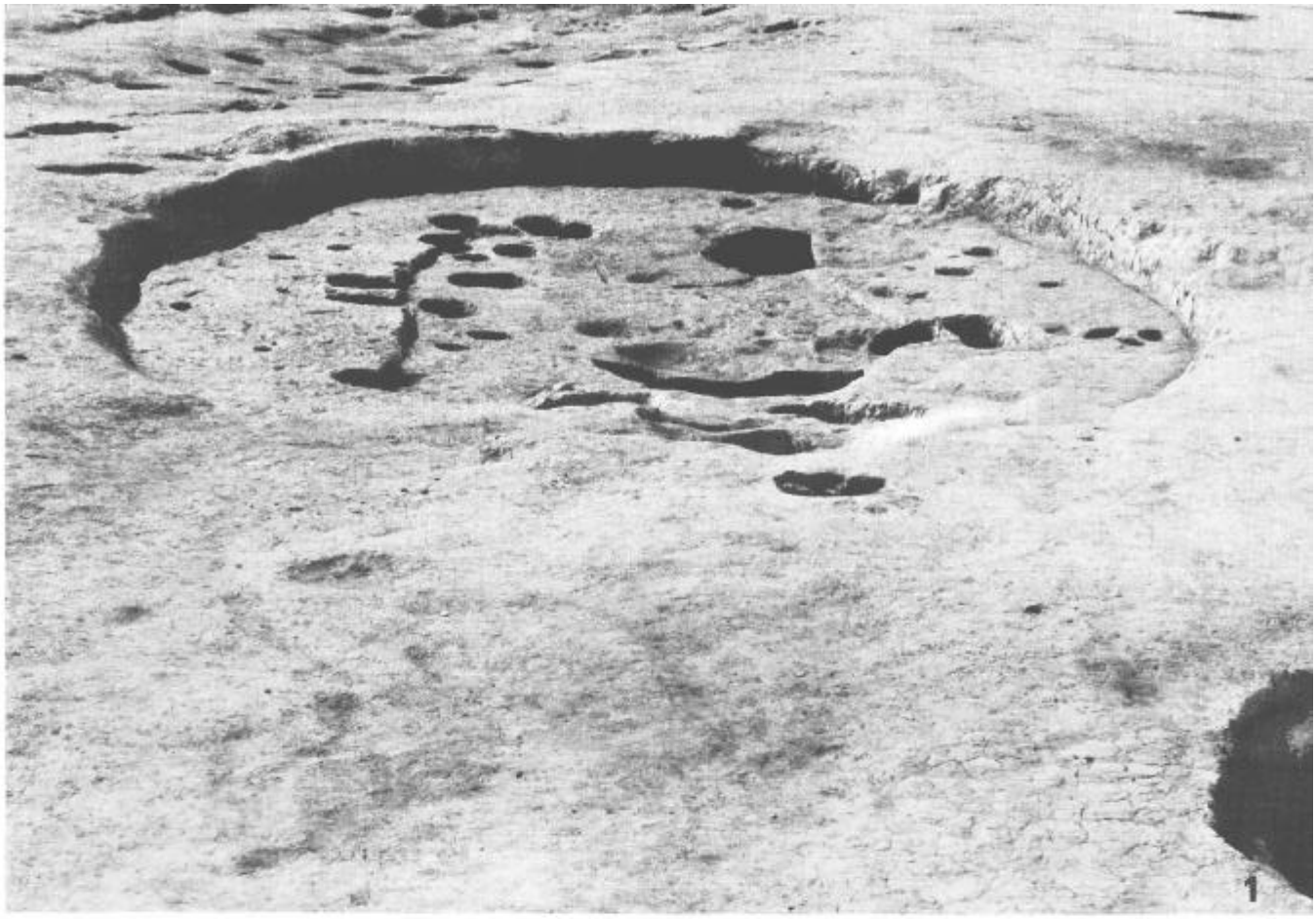


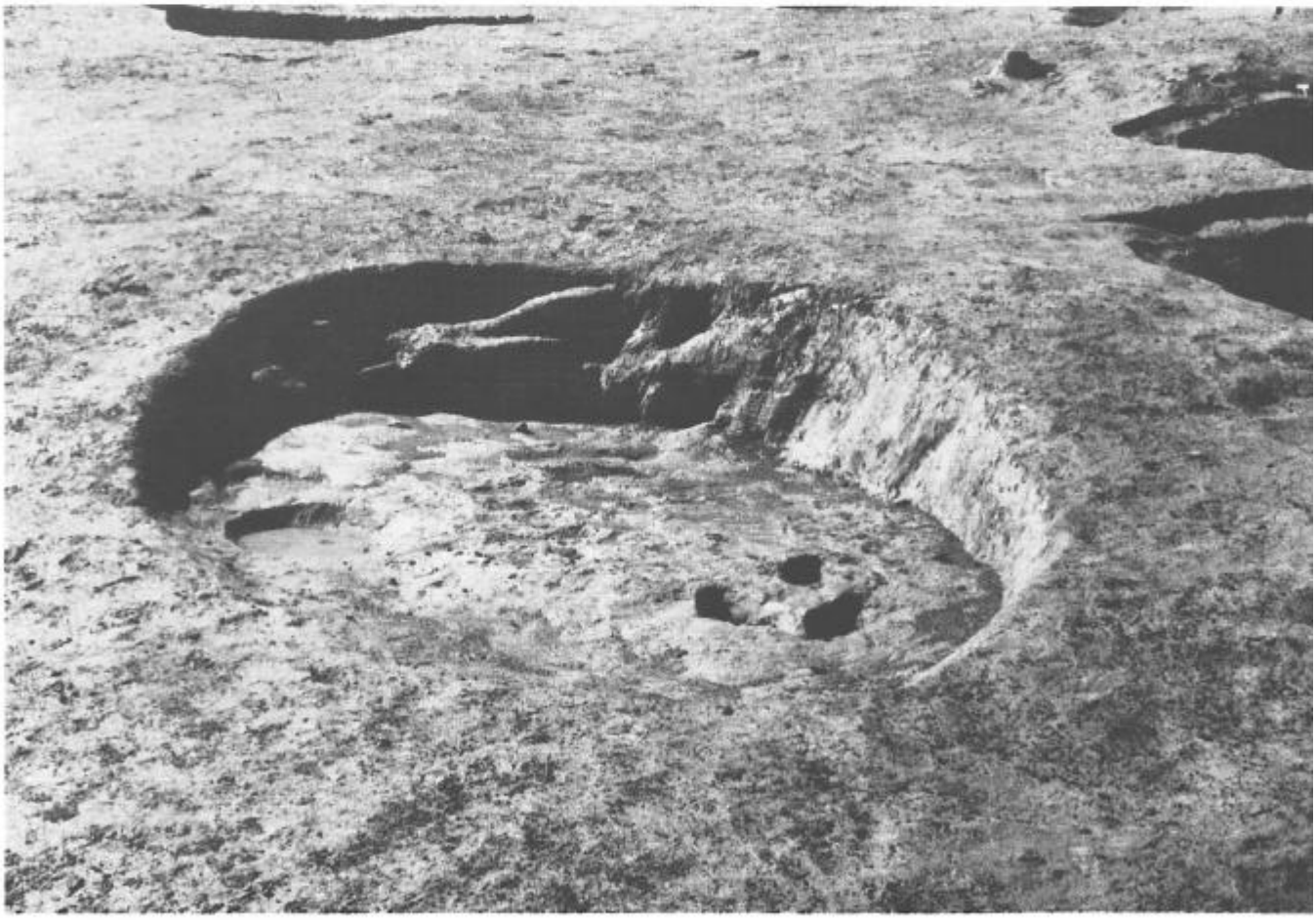


図版15　(1) SI 36（南▶北）　(2) SI 37（東▶西）

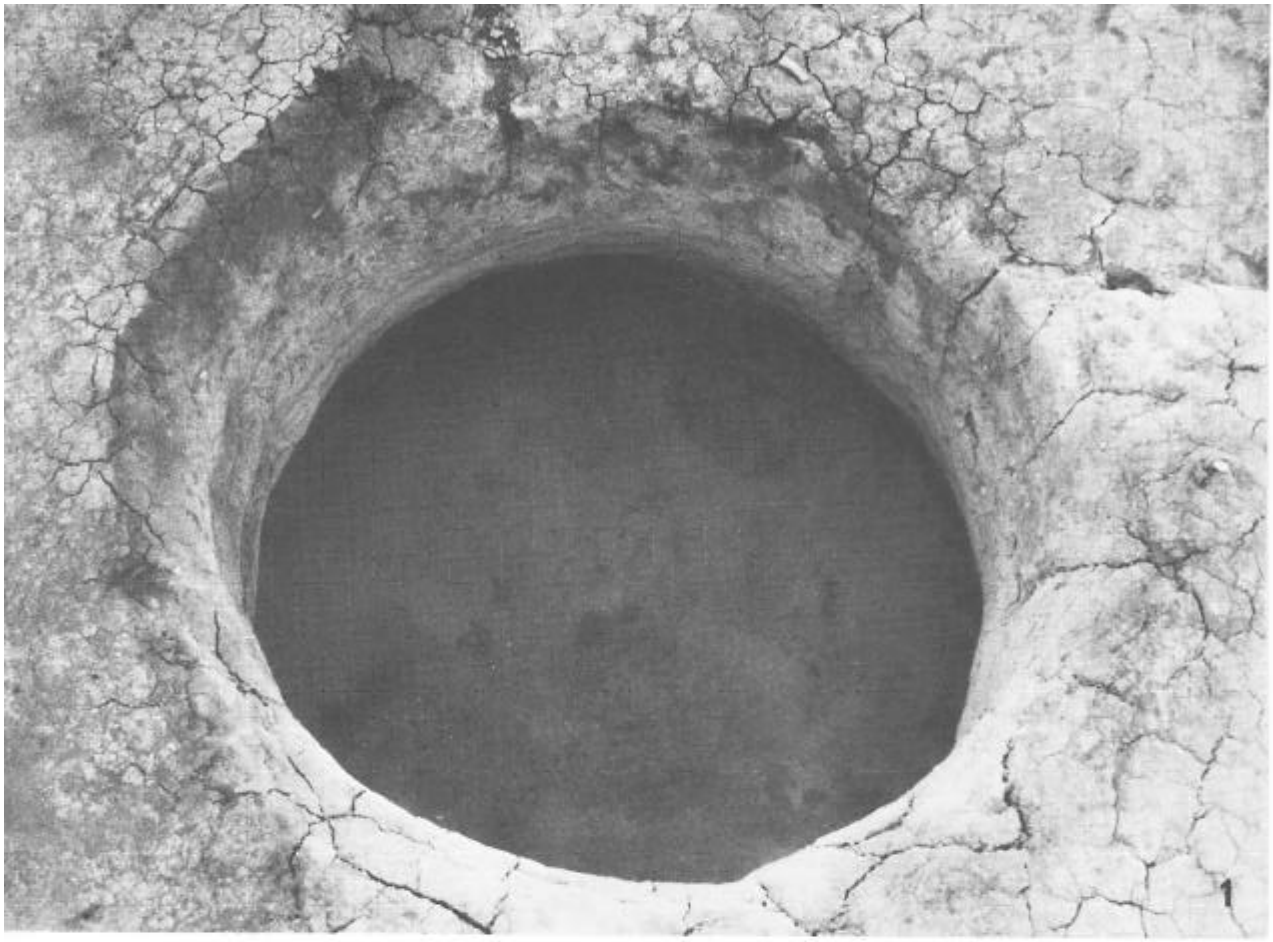


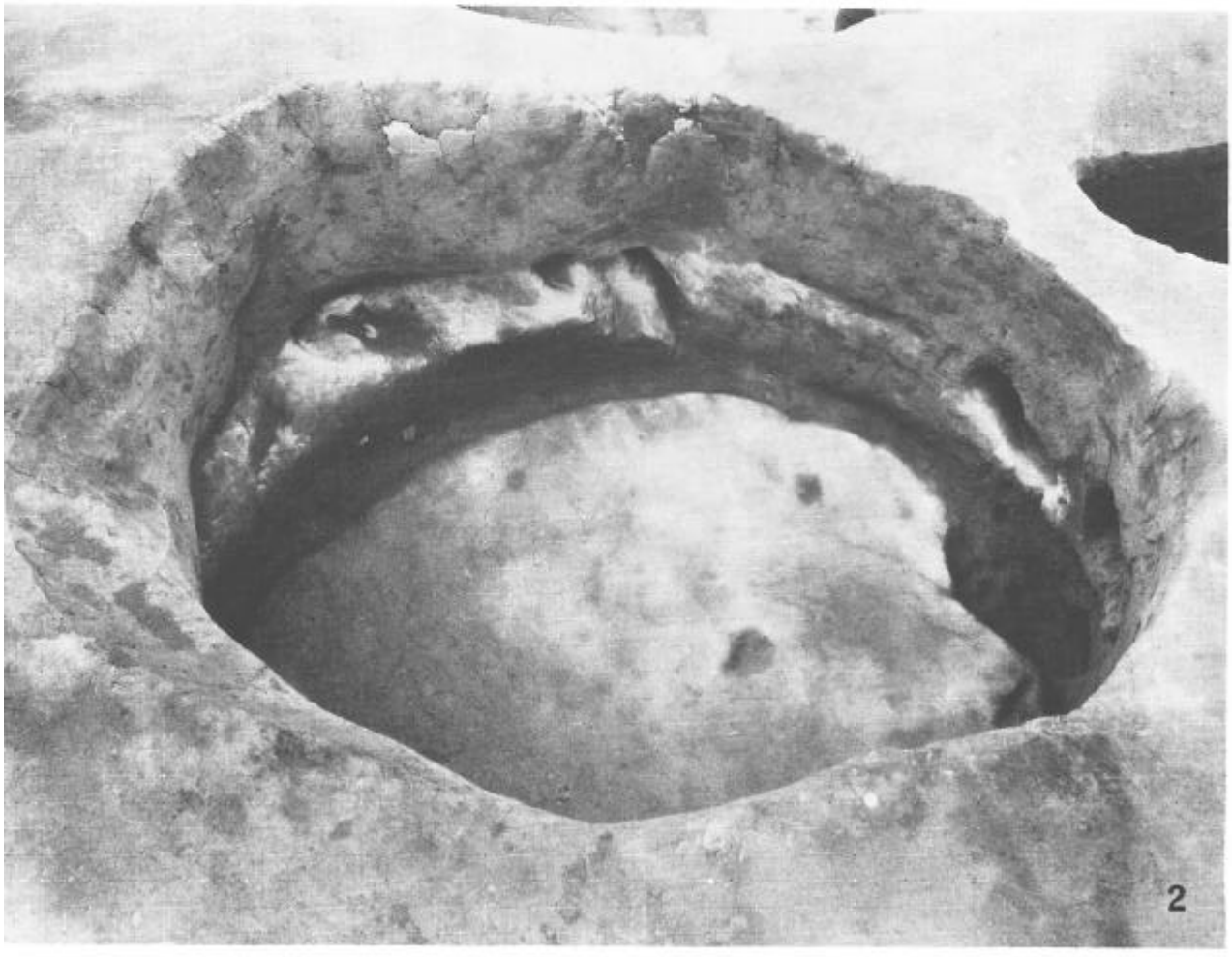
図版16　(1) SI 39, 40（北▶南）　(2) SI 44（東▶西）



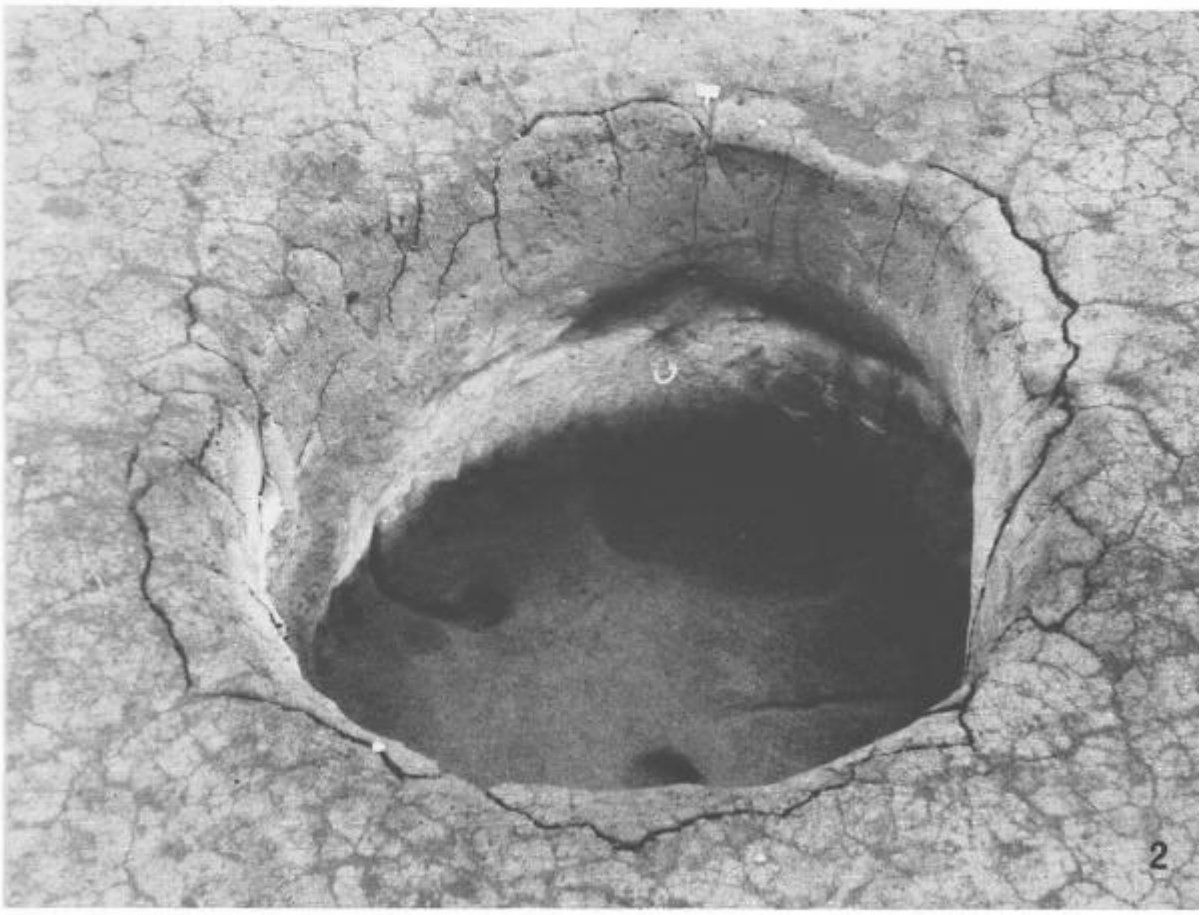


図版17　(1) SI 45（西▶東）　(2) SI 48（東▶西）

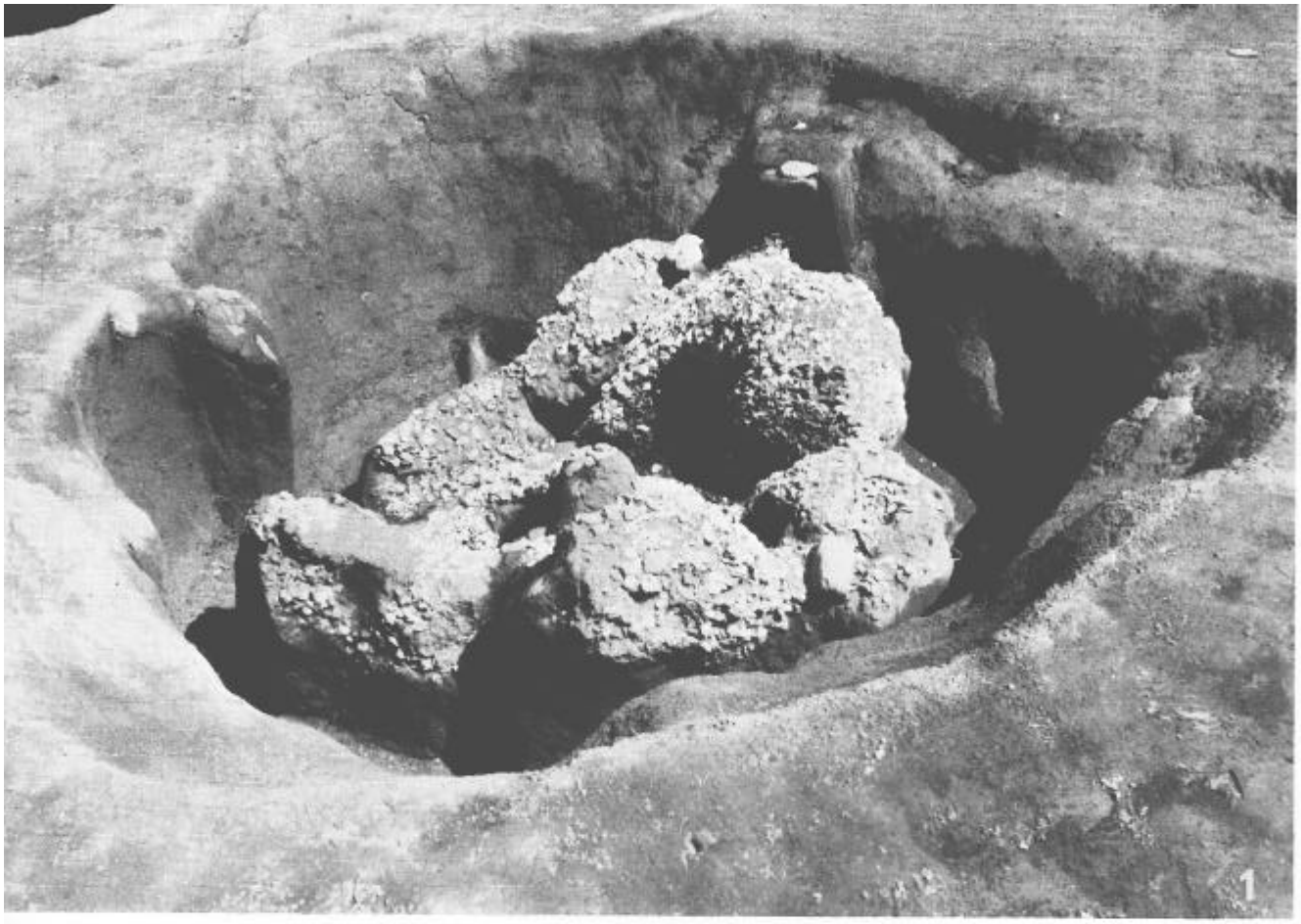


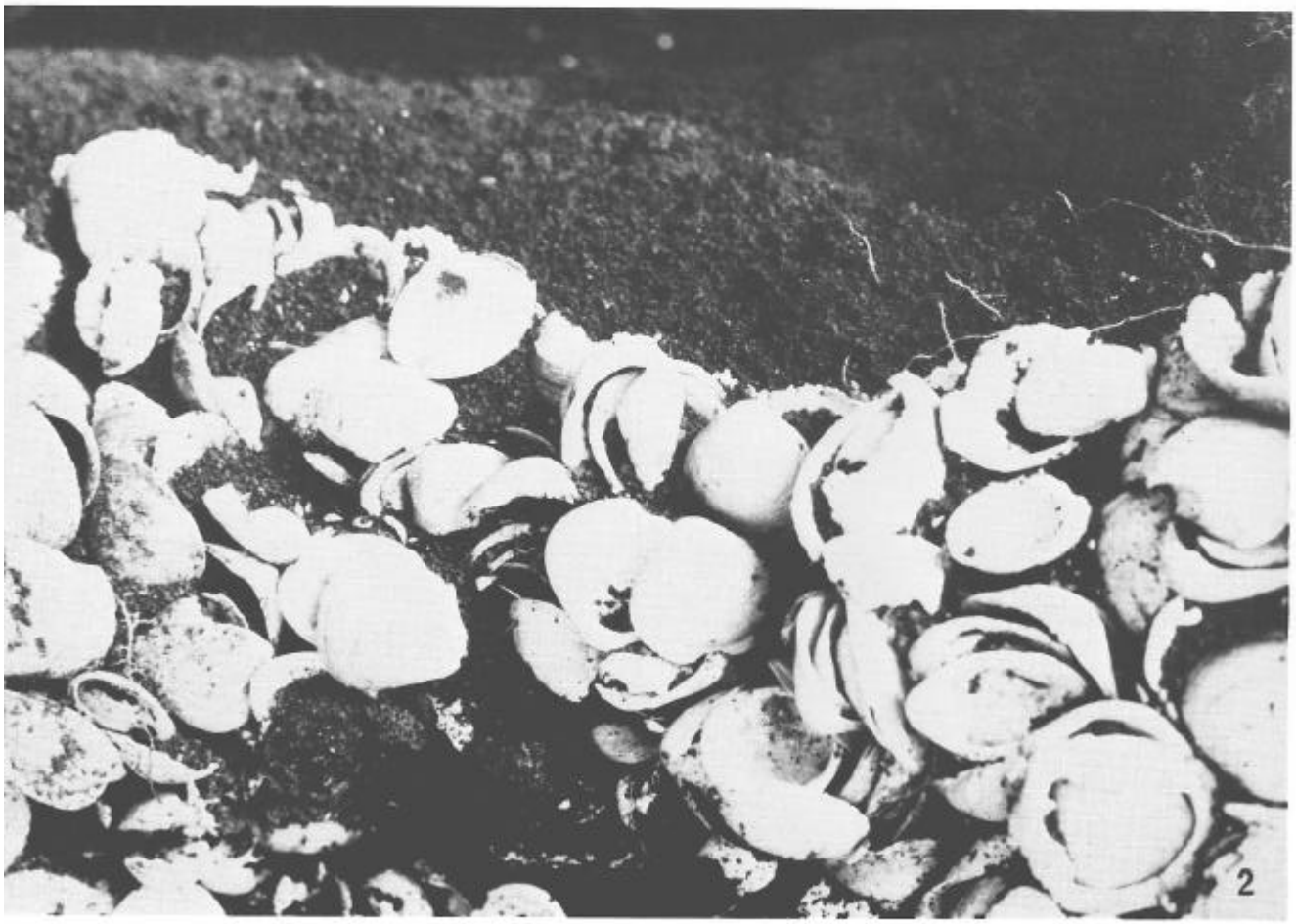


図版18　(1) SKF 01　(2) SKF 06



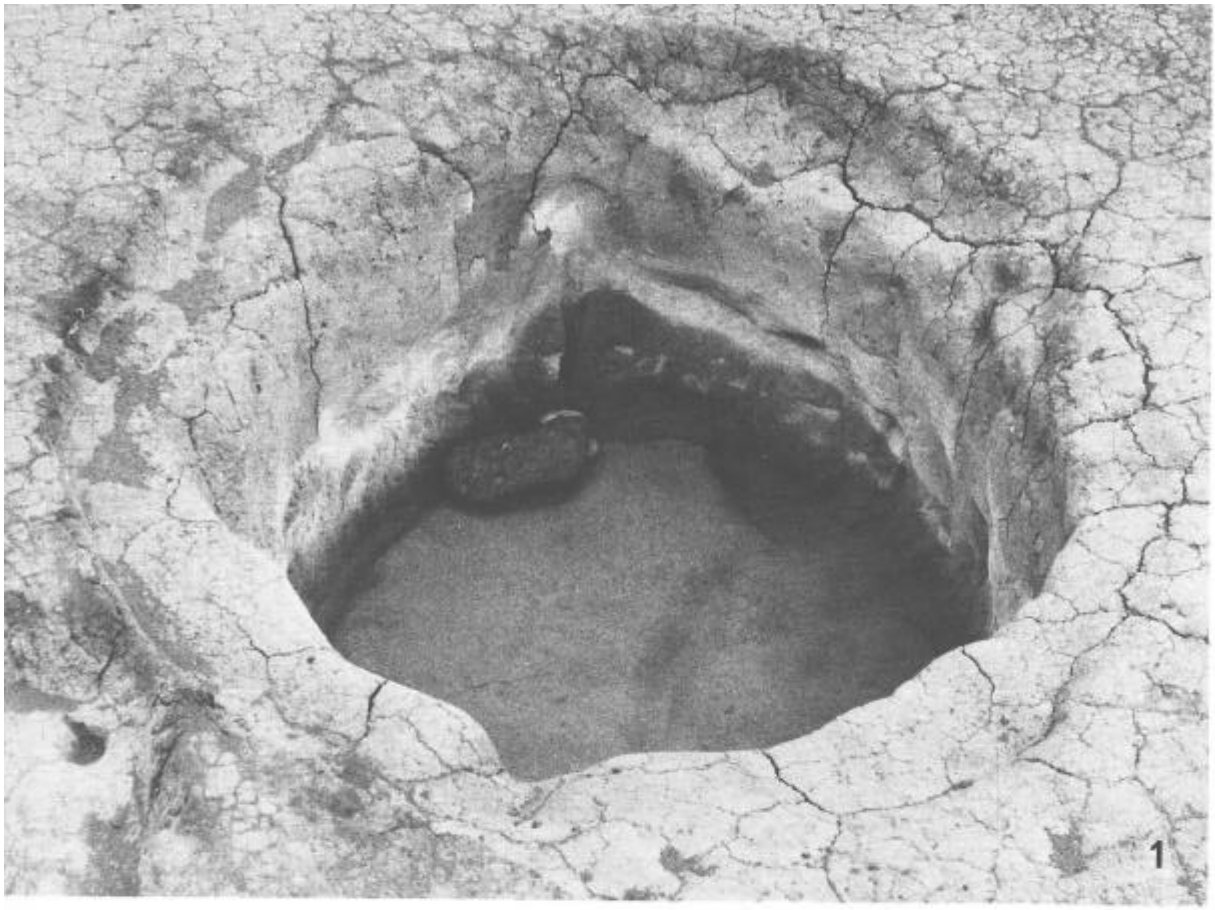
図版19　(1) SKF 08　(2) SKF 14

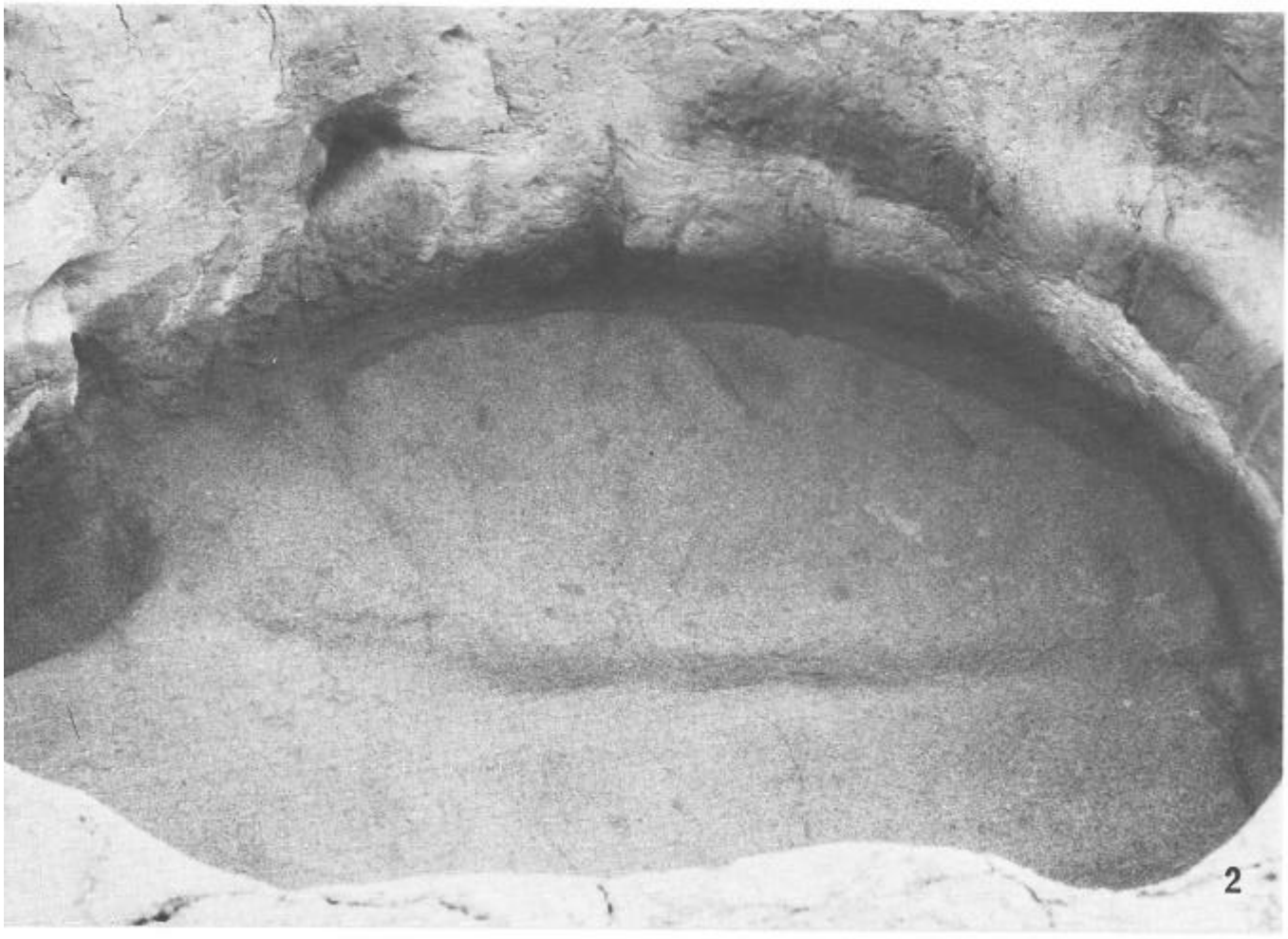




図版20　(1) SKF 20　(2) 同貝層

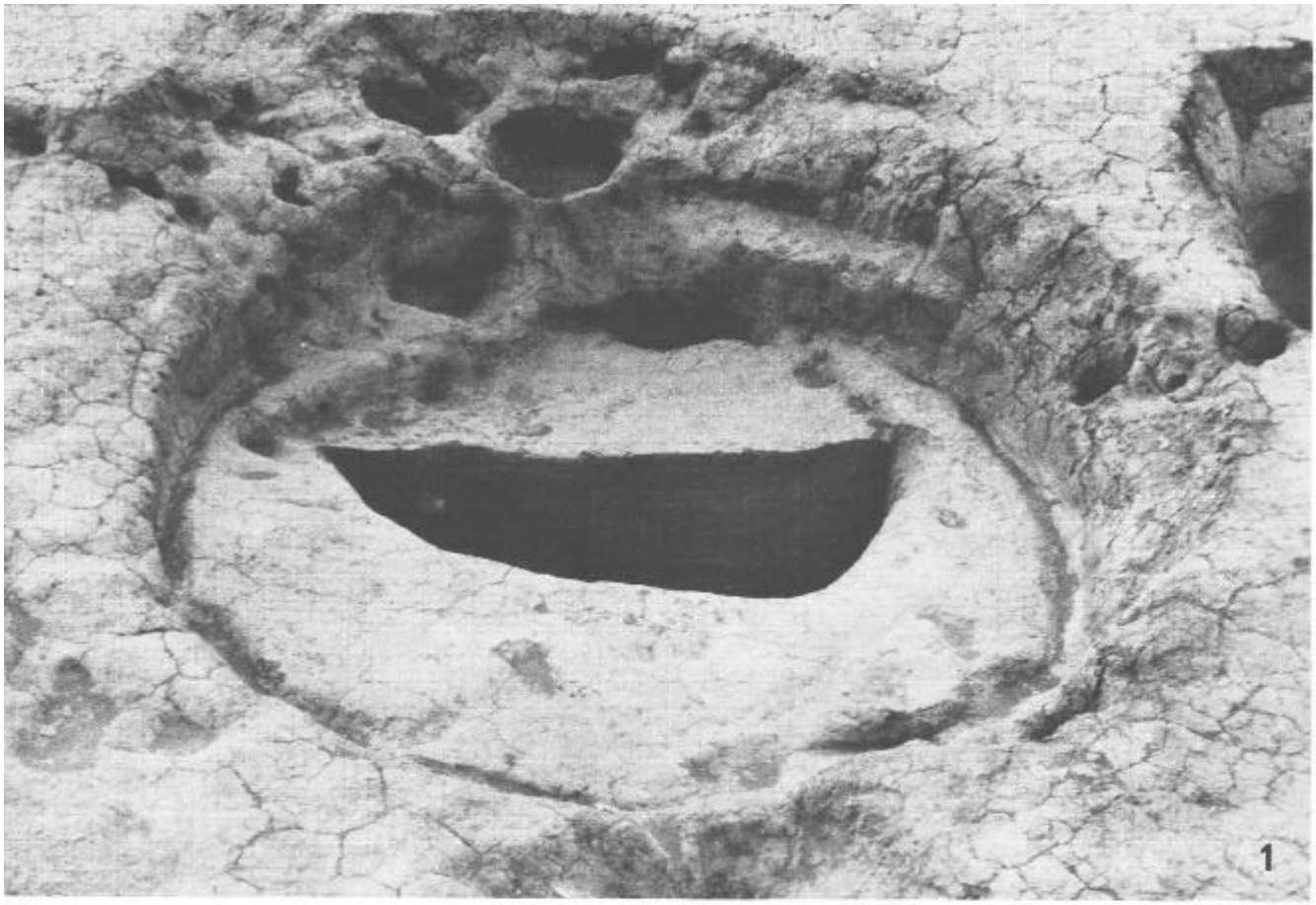
図版21　(1) SKF 21　(2) SKF 22

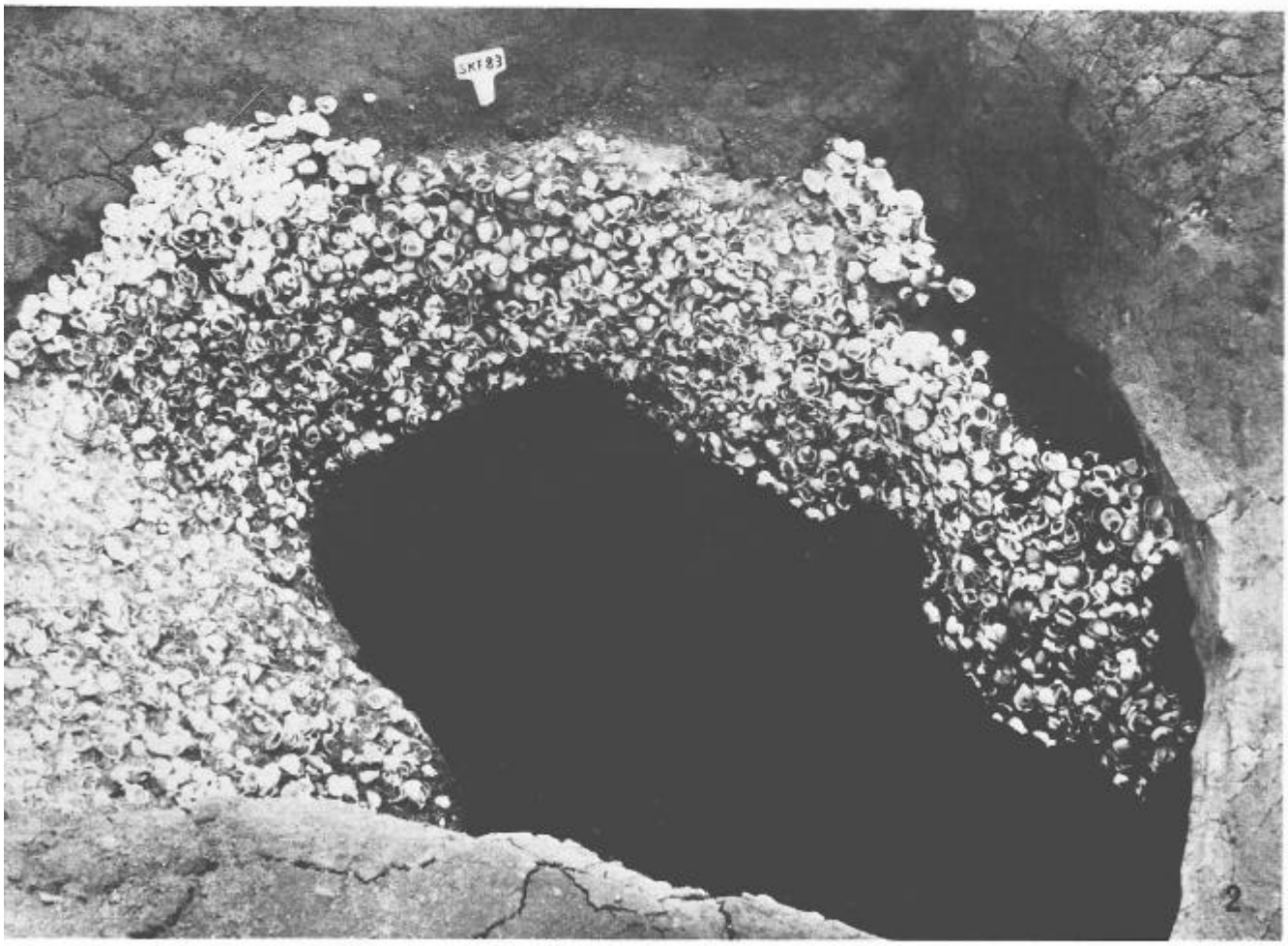




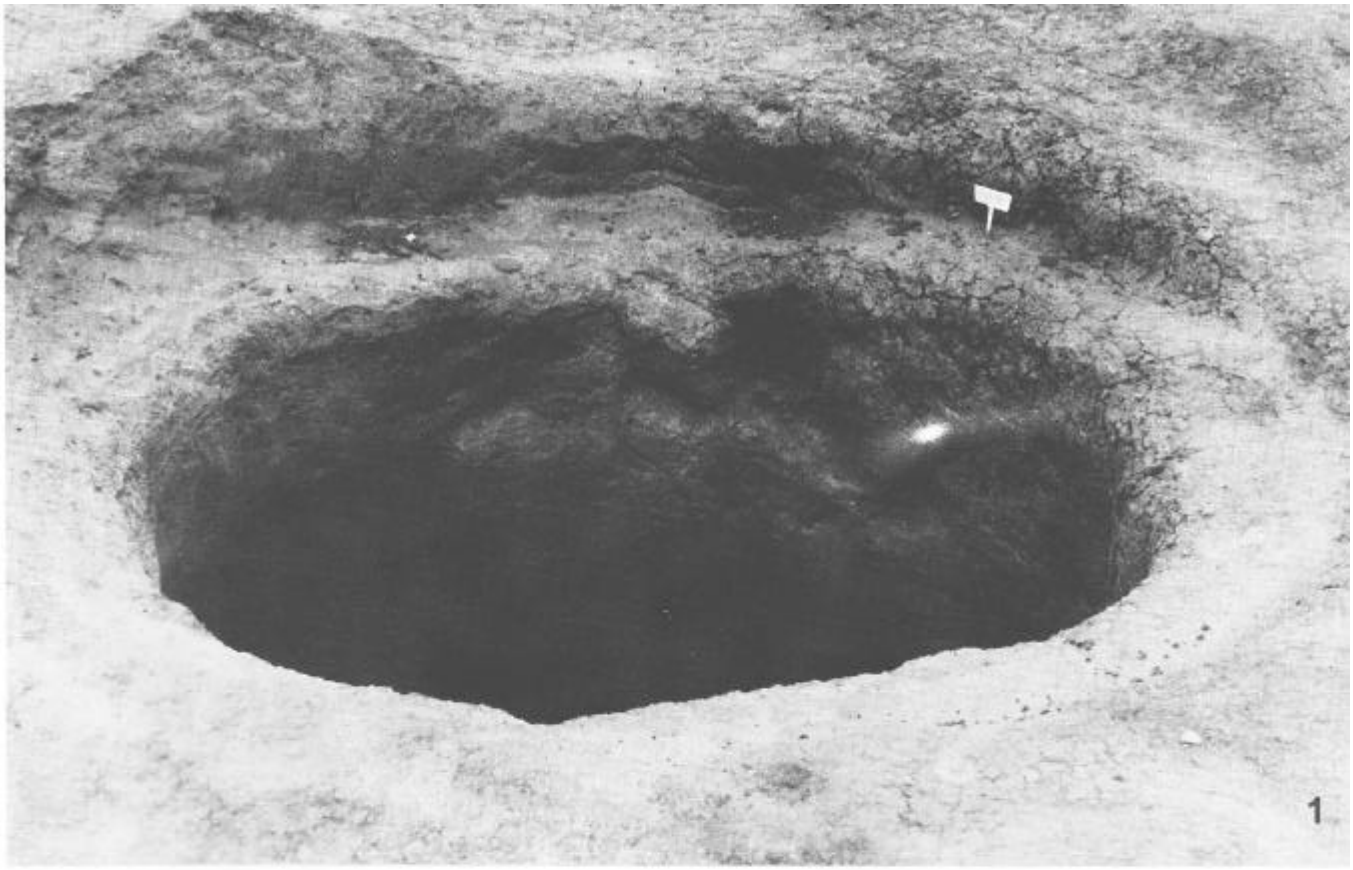
図版22　(1) SKF 27, SI 26　(2) SKF 27

図版23　(1) SKF 28　(2) SKF 29





図版24　(1) SKF 43　(2) SKF 83



図版25　(1) SKF 95　(2) SKF 98

図版26　縄文時代前期の土器 (1)

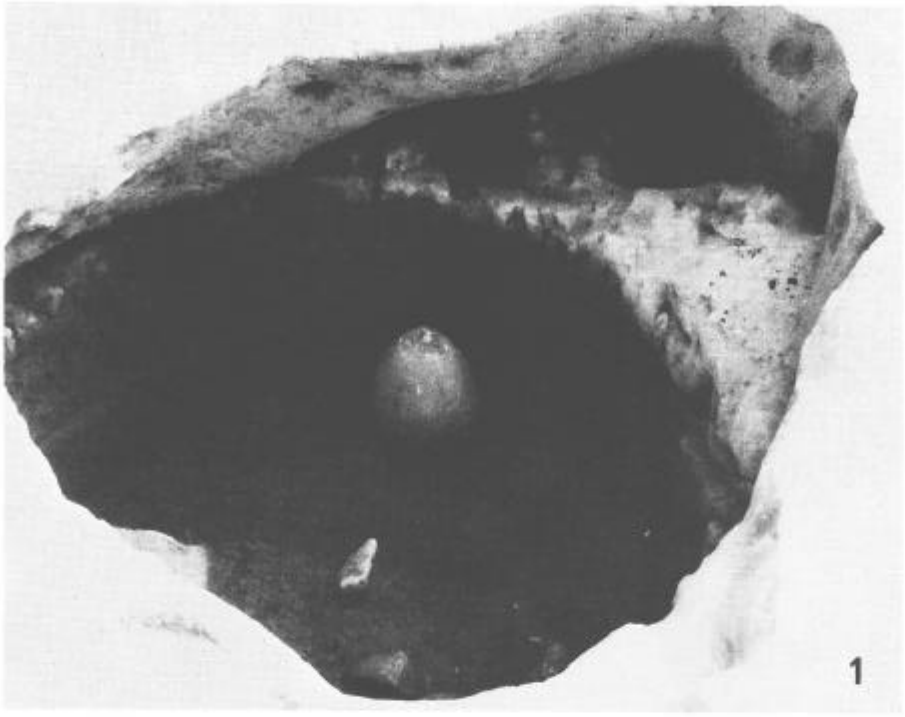
1

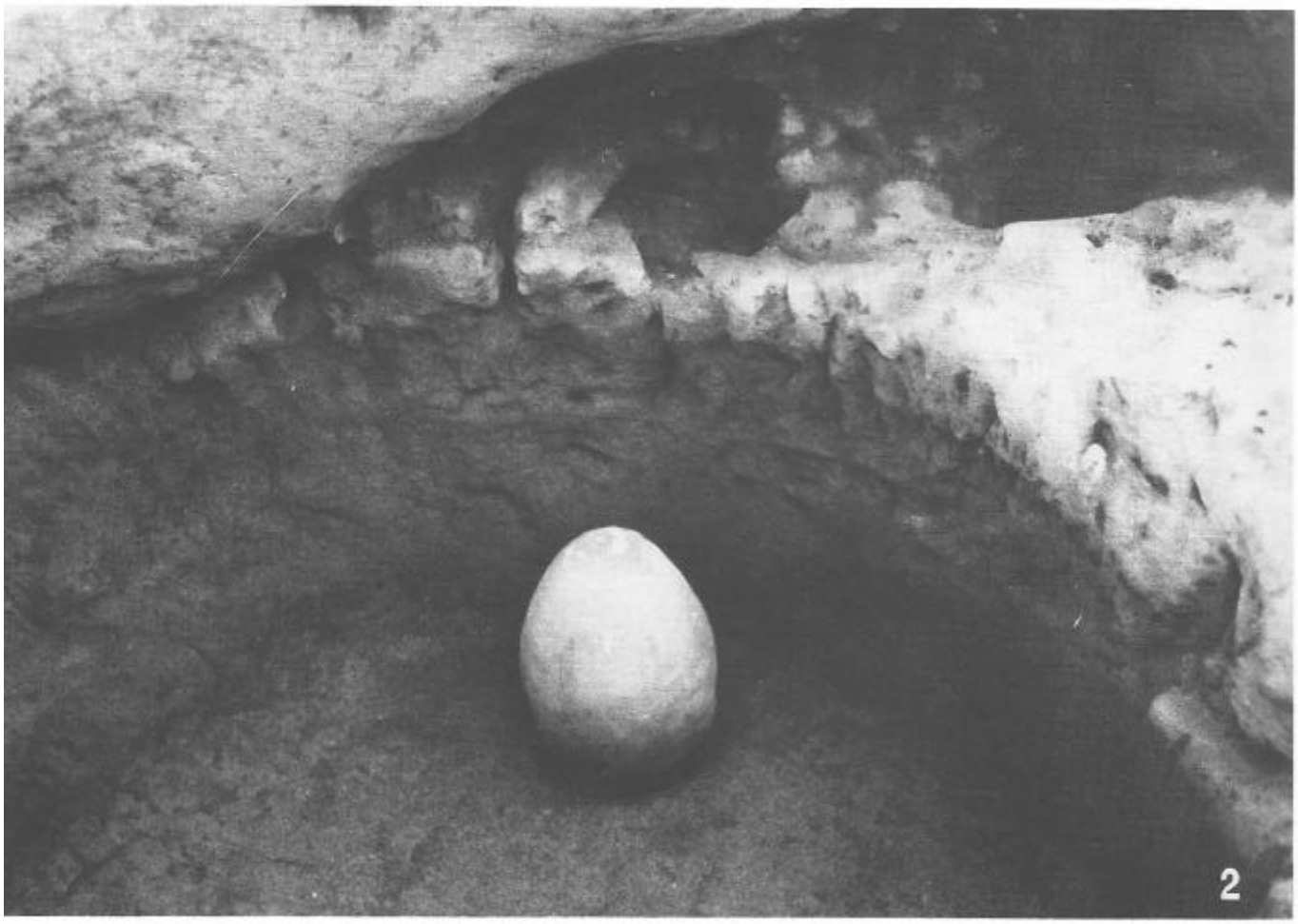
2

3

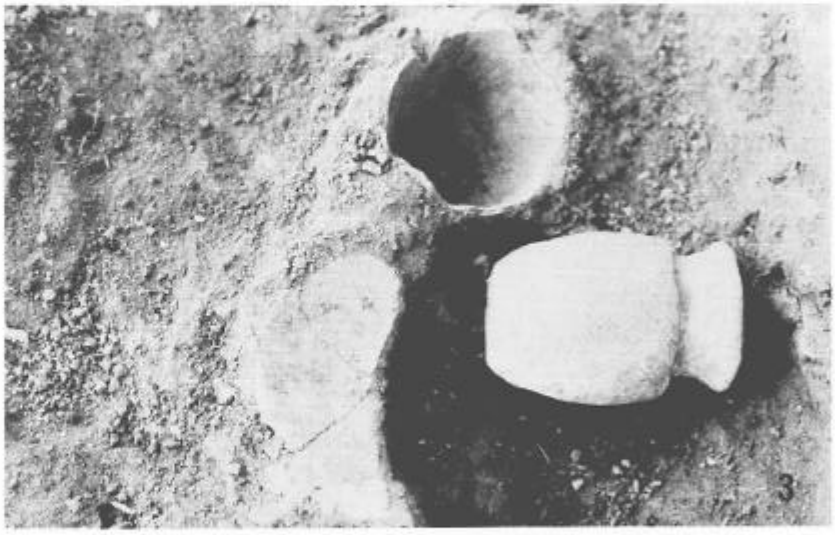
4

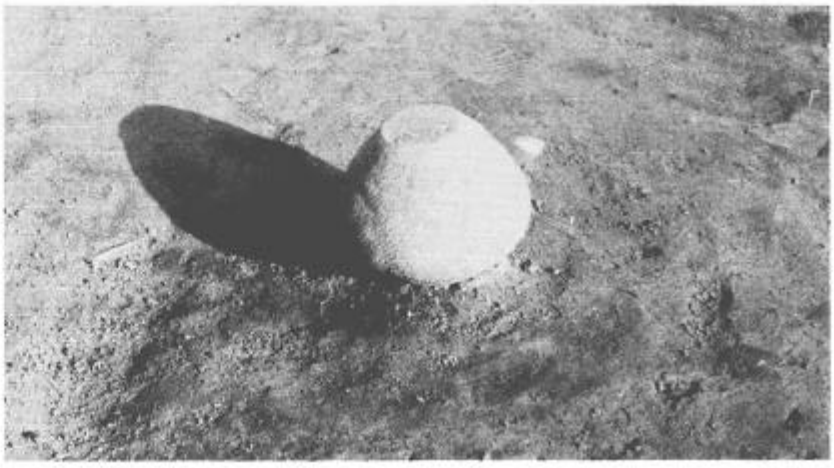
図版27　縄文時代前期の土器 (2)





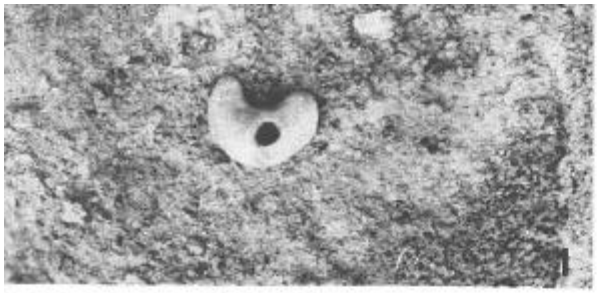
図版28　(1) SKF 18　(2) SKF18の土器（縄文時代後期）
出土状態

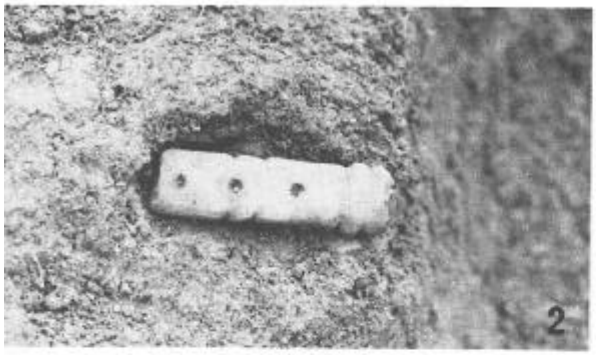


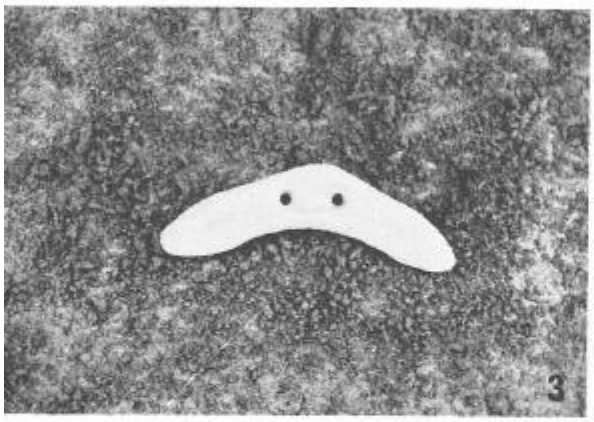


図版29

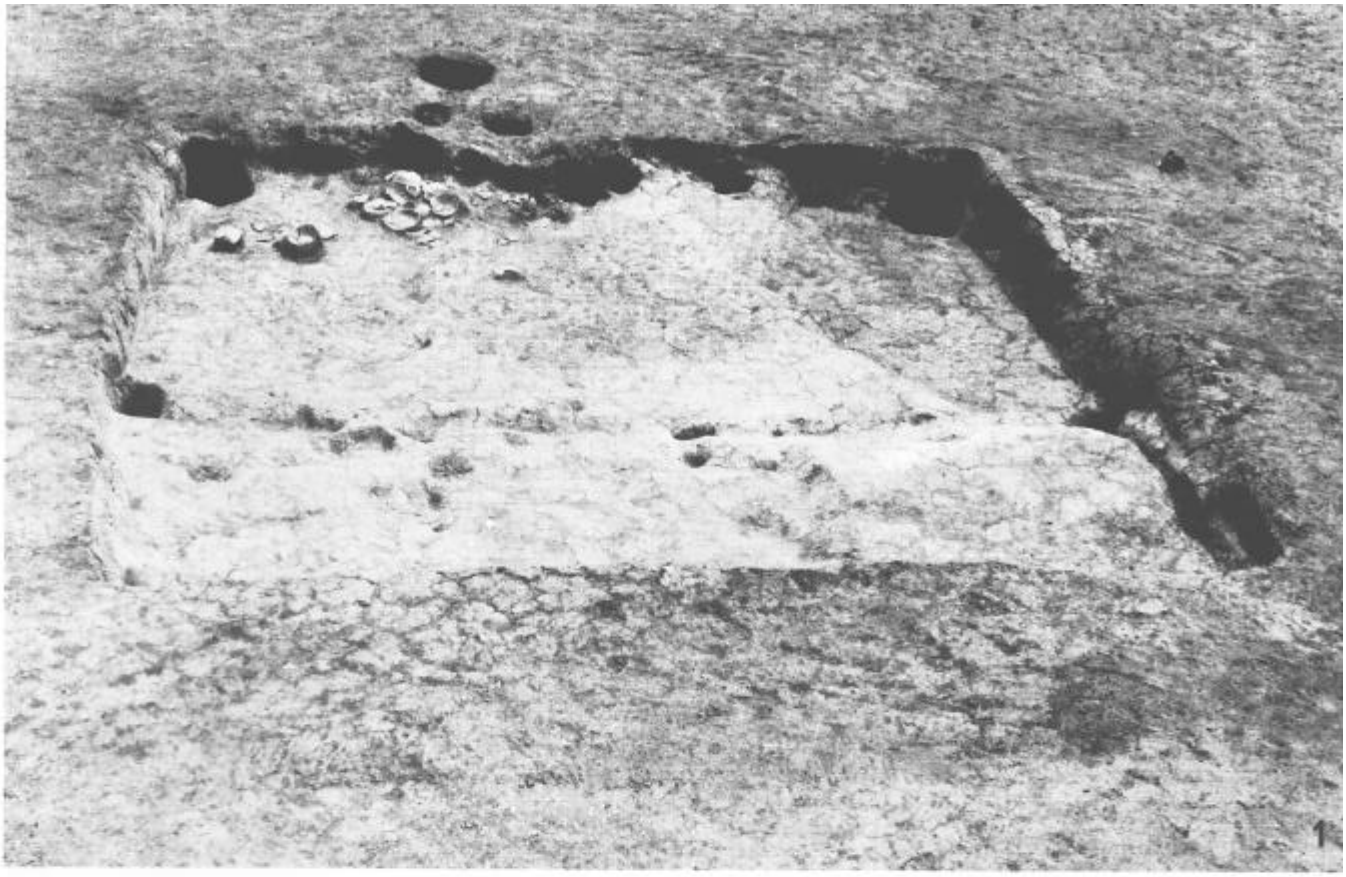
縄文時代晩期の
土器出土状態

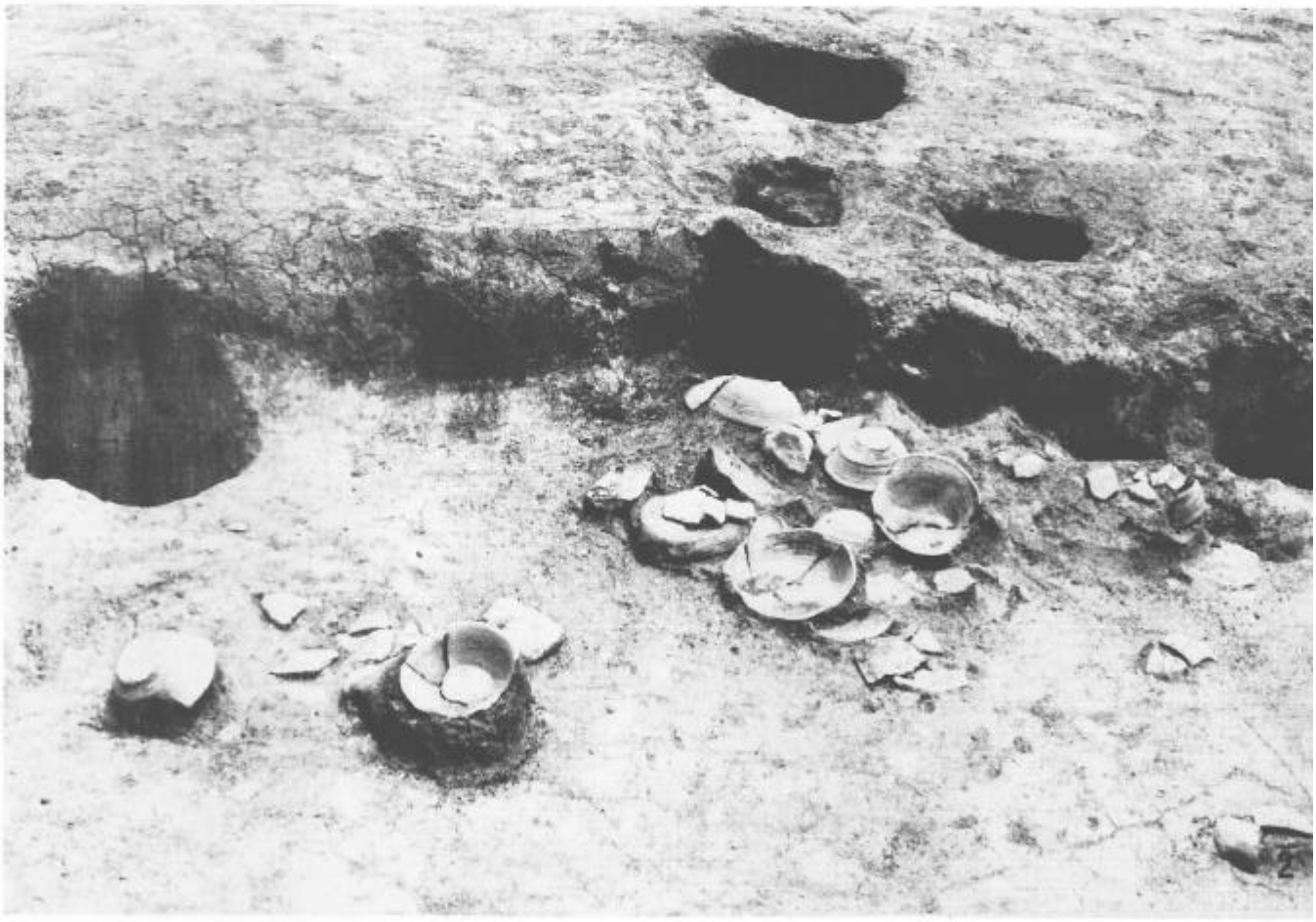




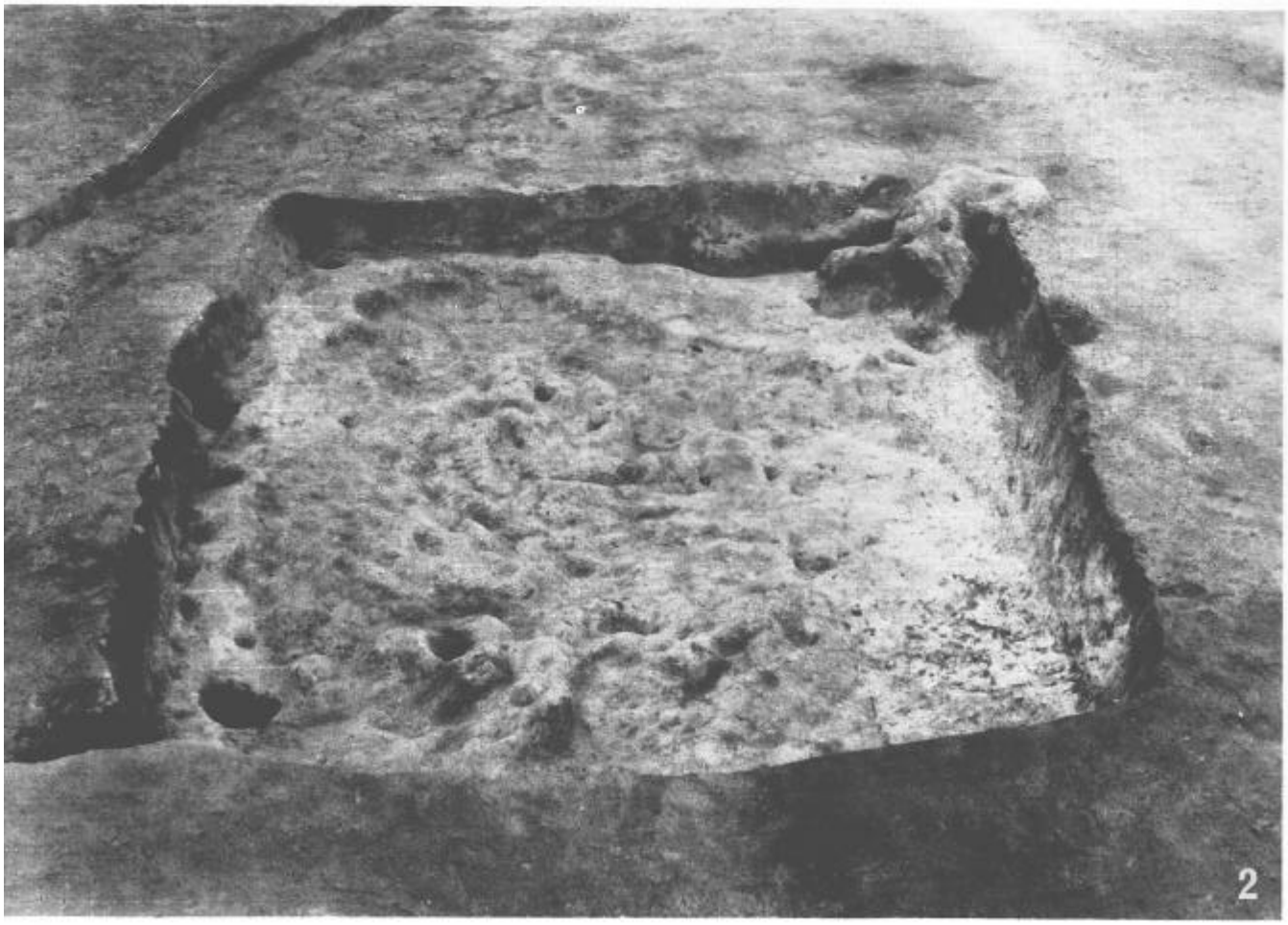


図版30 (1)～(9) 縄文時代晩期の土製品・石製品の出土状態

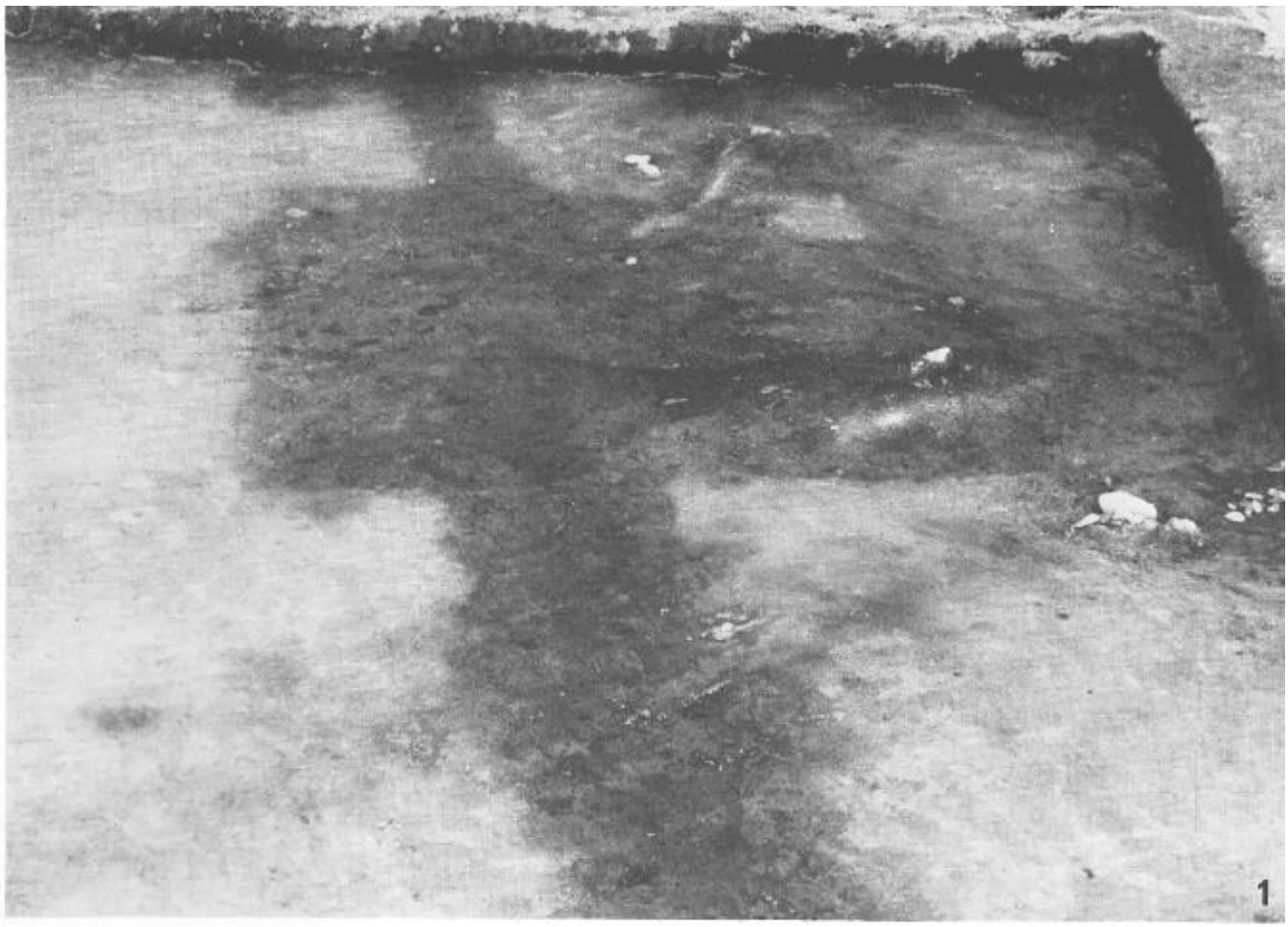




図版31　(1) SI 01（西▶東）　(2) SI 01 カマド付近の
土師器出土状態



図版32　(1) SI 02（南▶北）　(2) SI 03（西▶東）



図版33　(1) SI 05 / SD 12 の確認面　(2) SI 05（西▶東）

図版34　(1) SD 03, 04（西▶東）
(2) SD 14, 16（南▶北）

V. 竹生遺跡

第1章　はじめに

1．発掘調査に至るまで

当地域は，国営能代開拓建設事業の対象区となっているが，導水路工事計画が具体化したため，記録保存を目的に事前調査したものである。

2．調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会
調査期間	昭和55年７月23日～８月30日
調査地	秋田県能代市竹生字竹生
発掘面積	2,000㎡
調査協力機関	東北農政局能代開拓建設事業所

第2章　遺跡の立地と環境

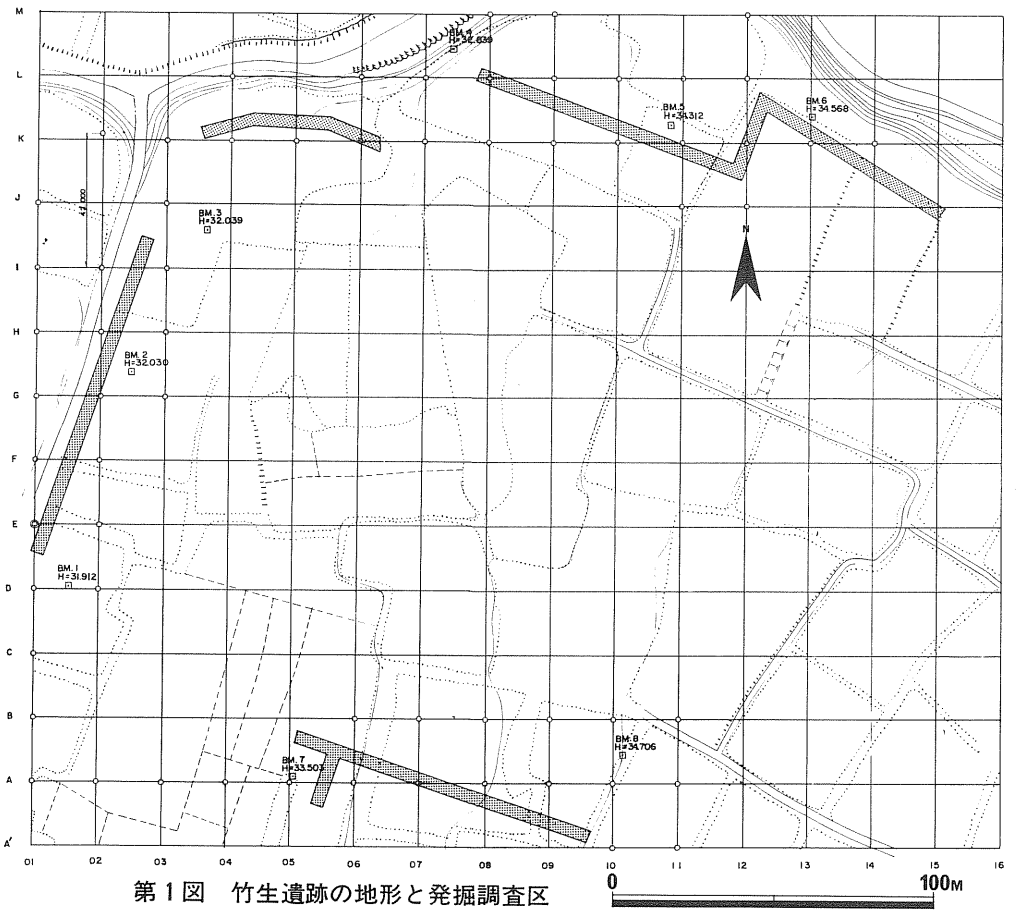
本遺跡は，昭和54年度に秋田県教育委員会が実施した，国営能代開拓建設事業関係遺跡分布調査により，面積約53,000㎡と確認されている。

遺跡は南に広がる台地の北縁部に位置し，標高約30ｍ。西方は約２㎞先に日本海を望み，隣接して掘られている。最も大きい土壙は，その壁面を掘りくぼんでカマドを構築しており，小鍛治作業における槌打場，火床と思われる。出土土器は，土師器・須恵器。年代は平安時代と思われる。

第3章　調査の記録

土壙

41基検出。直径１ｍ～１ｍ50㎝で，平面プランは円形もしくは楕円形を呈し，浅く掘られているものが多い。しかし埋土状況は，焼土を多量に含むものと，比較的少ないものがある。前



第１図　竹生遺跡の地形と発掘調査区

者中ＳＫ31は，焼土と共に多量の鉄滓，及び羽口も出土しており，鍛治湯と考えられる。出土土器は，土師器・須恵器。年代は平安時代と思われる。

溝

21基検出。底面は皿状を呈するものが多く，かつ大半は20～35cmと浅い。出土土器は，土師器・須恵器である。年代は平安時代が主体となろう。

カマド状遺構

17基検出。一部を除き，遺構に伴う事なく単体で検出。ＳＸＦ04は比較的保存状態が良い。カマドは煙道部を持たず，残存する側壁は熱化により内外面共赤褐色を呈す。燃焼部内，埋土下層には黒斑現象のみられない赤褐色の土師器を有す。この事から本遺構は，土師器焼成がまと思われる。

南方約４kmには米代川が位置する。台地上には多くの遺跡が散在し，周辺の主なものとして，西側に杉沢台遺跡（縄文），南西に落合遺跡（縄文）等がある。

遺跡の地層は，１層～３層に分かれ，暗褐色土を主体とする。４層はローム層である。

竪穴住居址

１基検出。平面プランはほぼ円形を呈し，中央に地床炉を付設する。年代は縄文時代であるが，出土土器は磨耗が激しく時期はうかがえない。

竪穴状遺構

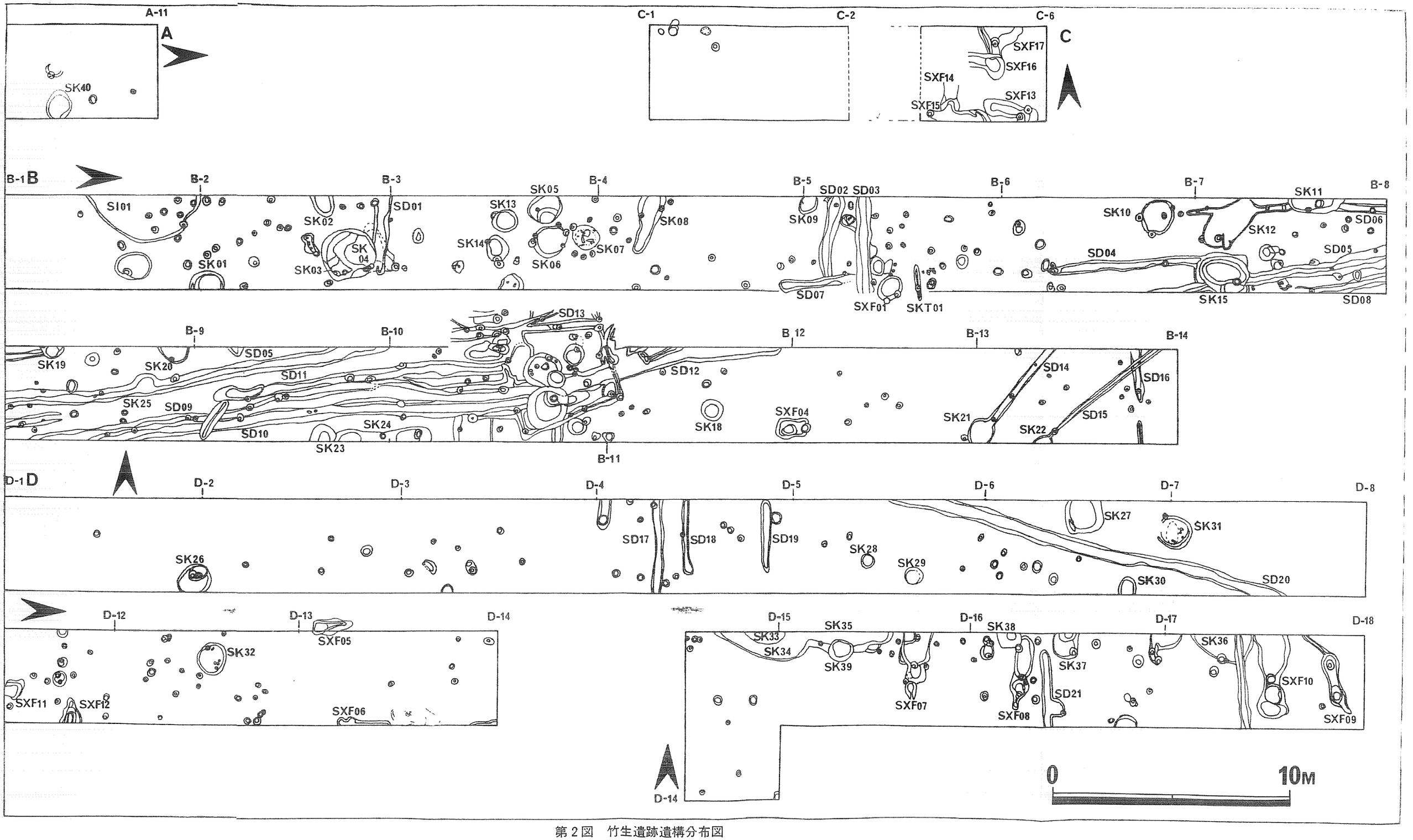
平面プランは，１辺が480㎝の方形を呈し，南寄りにカマドを持つ。遺構内部には３基の土壙と，土壙に付属する１基のカマド，及び小規模な製鉄炉，鉄滓ピットを備えている。製鉄炉はその形態上から，ボール炉と思われ，上部構造は崩壊し残存しないが，周囲に多量のスサ入り粘土を検出する。付属するピットには鉄滓が充満し，その多くは精練滓である。土壙は３基。

出土遺物

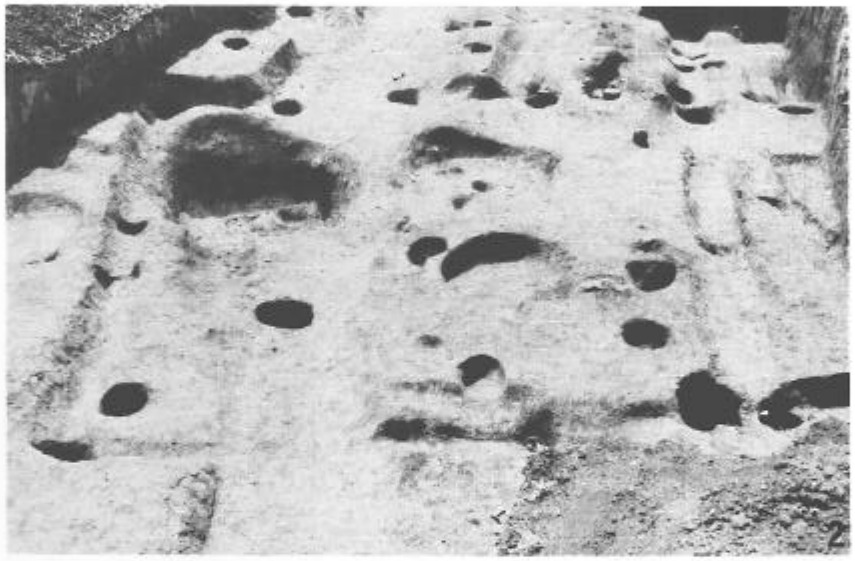
遺物は，縄文土器，土師器，須恵器，土錘，羽口，土製脚柱部，鍬先，釘である。土師器は杯の場合，無調整で回転糸切りによる。

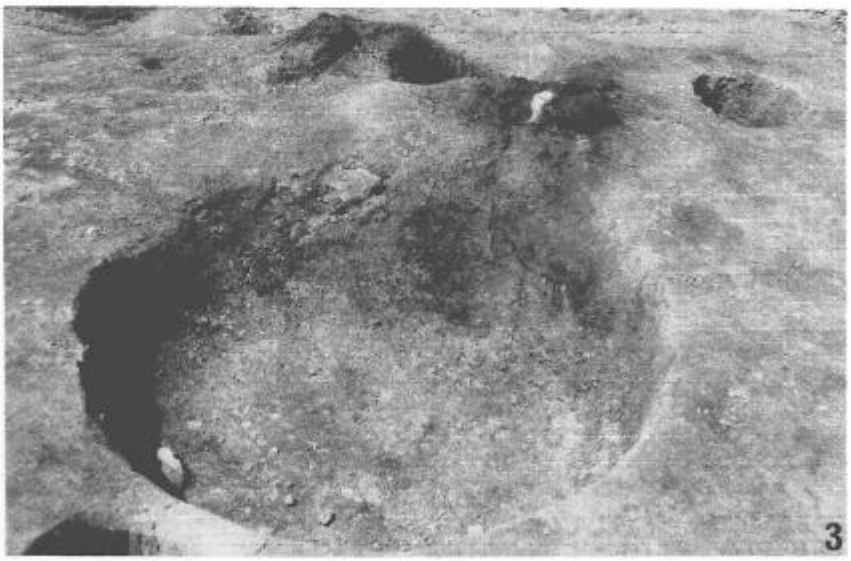
第4章　ま　と　め

年代は，出土遺物等から平安時代，10世紀後半を中心とした時代と考える。遺跡の性格としては，生産を主体としたものと思われる。特にＳＫＩ01において，小規模ながら製鉄がおこなわれ，同時に小鍛治もなされていた事は，同時代，地方における鉄製品の生産過程を知る上で，考えるべき事を含んでいる。

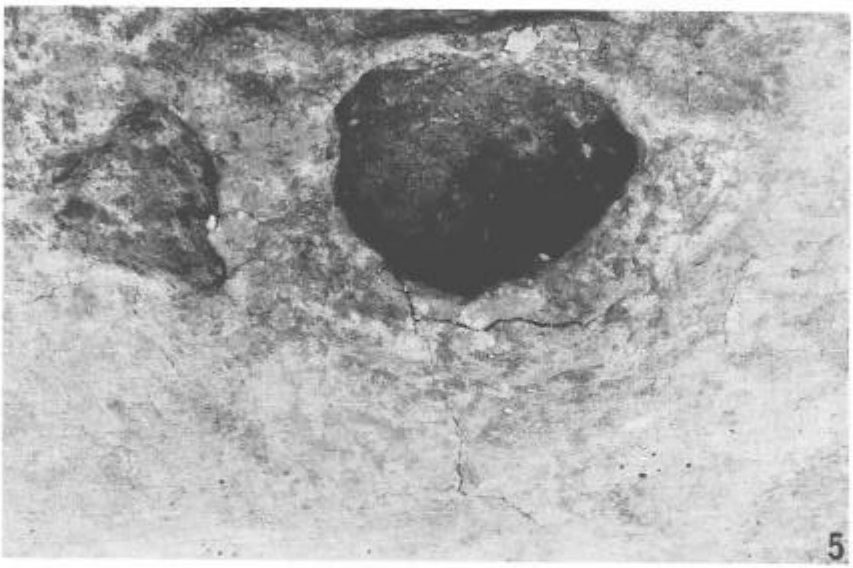


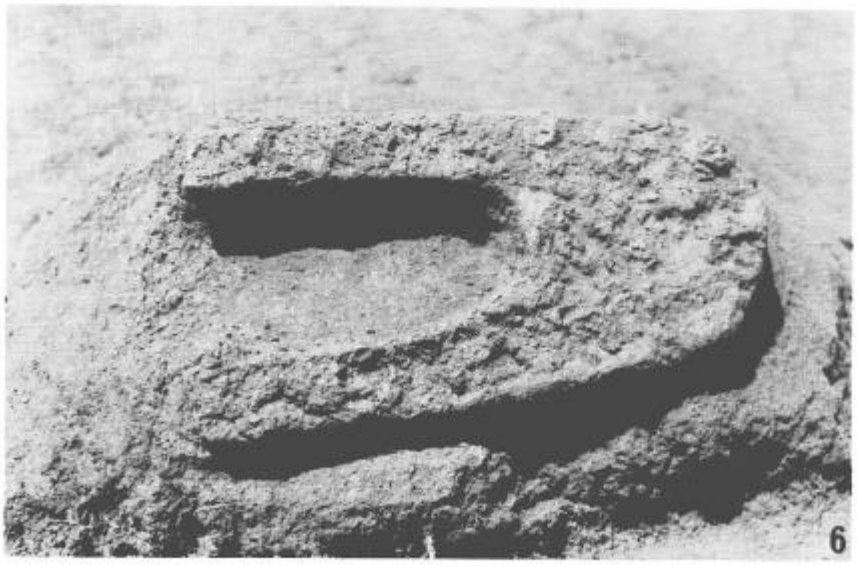
第２図　竹生遺跡遺構分布図





図版 1　(1) 遺跡調査前（西▶東）　(2) 竪穴状遺構（製鉄，鍛治遺構）SK101（西▶東）
(3) 竪穴状遺構内，製鉄炉，鉄滓ピット（西▶東）





図版 2　(5) 土壙SK31（西▶東）　(6) カマド状遺構SKF04（北▶南）
(7) 鉄鏃先出土状況